

バカテスボケツト

野木雄大

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

【第一章】

元野球少年の小波 一輝（こなみ かずき）は幼馴染みの南雲 瑠璃花（なぐも るりか）と共に試験召喚戦争に挑む。

【第二章】

清涼祭（文化祭）が迫る中、過去に囚われた男、辻井 悟志（つじい さとし）は生徒会メンバーとの日常で『信じられるもの』を見つける為、日々奮闘する。

この物語は『バカとテストと召喚獣』と『パワプロクンポケット』のクロスオーバーです。世界観はバカテスですが所々でパワポケ要素？を出していこうかと思っています。

誤字脱字、アドバイス等ありましたら報告お願いします。

正直な話、表現や文章が上手いとは言えません。パワポケの名シーンを上手く再現出来るか分かりませんがどうか暖かい目で応援お願いします。

サブタイトルに付いてる※は人物紹介ありのページです。

第一章 試召戦争編

目

次

第一章 試召戦争編	1
プロローグ	
Fクラス	
自己紹介	
提案	
根拠	
ミーティング	
南雲瑠璃花	
Dクラス戦（1）	
Dクラス戦（2）	
戦後対談（1）	
計画の変更	
模擬試召戦争	
Cクラス	
Cクラス戦（1）	
Cクラス戦（2）	
Cクラス戦（3）	
Cクラス戦（4）	
Cクラス戦（5）	
神条紫杏	
戦後対談（2）	
交渉前	
交渉※	
明日に向けて	

ペア決め※

清涼祭開幕

召喚大会一回戦 悟志&紫杏

召喚大会一回戦 一輝&梨子（1）

召喚大会一回戦 一輝&梨子（2）

召喚大会一回戦 明久&雄二（1）

召喚大会一回戦 明久&雄二（2）

校門にて

小さな来訪者

会議

最悪に備えて※

打開策

素直※

第一章 試召戦争編

プロローグ

まだ寒さが残る四月の朝。俺、小波 一輝（こなみ かづき）は女の子と一緒に学校へと続く道を歩いていた。

「今日から待ちに待つた新学期ですね」

「待ちに待つてたのは俺じゃなくて雄二じゃないか？」

「そういう一輝も試召戦争楽しみにしていたのでは？」

学習意欲向上の目的の為に俺達が通う文月学園に導入された『試験召喚システム』。テストの点数に応じた戦闘能力を持つ『召喚獣』を操作し設備を賭けてクラス対抗で戦う『試験召喚戦争』、通称『試召戦争』である。

一年時は試召戦争のルールと召喚獣の操作を学んだだけ。しかしついに入学前から楽しみにしていたイベントに参加できると思うとワクワクする。

「あらあら、やつぱり楽しみだつたんじやないですか」

「そういう瑠璃花だつて」

「ふふふ、わかります？」

歩く度に綺麗な青髪を揺らす幼馴染みの南雲 瑠璃花（なぐも るりか）。彼女もまんざらではないようだ。

「しかし以外だな。瑠璃花は戦争なんて物騒な事は苦手だと思つてたんだけど?」

「そうですか? どちらかというと戦争というよりゲームのイメージが強いですね」「…なるほど」

ゲームか、俺もそう思う。

「おはようございます西村先生！」

「小波に南雲、おはよう。珍しく遅刻ギリギリだな」

学校に着いた俺達は校門に一人立っている馴染みの教師に挨拶する。生徒指導担当の西村教諭。趣味でトライアスロンをやつてるというその大きなガタイと厳しい指導により多くの生徒から『鉄人』と呼ばれ恐れられている。

「すみません、お母さんが心配でギリギリまで看病を：」

「…そうか。南雲のお母さんは体調が優れないのだつたな」

そう、瑠璃花のお母さんは俺が小学生の頃からある事情でいろいろと無理をした結果体を壊したのだ。始めは入退院を繰り返していたがここ最近は病院に行っていない。それでも時々倒れそうになって瑠璃花が看病するわけだ。

「まあ遅刻した訳ではないから謝る必要はないがな。ほら、振り分け試験の結果だ」

西村先生は俺達に封筒を渡す。一年生と二年生が進級する前に受ける『振り分け試験』。成績の優劣でクラスが決まり、俺達にとつては二年生をどの教室で過ごすかを決める重要な試験だ。しかし…

「結果見えてるんだけどな」

「ですね…」

苦笑いする俺と瑠璃花。実を言うと俺達一人は振り分け試験を受けていない。その理由は

「学校に行く途中で迷子になつた子供を見つけて一緒に親を探していいたそุดだな」

もう知られていた。誰から聞いたんだろうか？

「すまなかつたな。俺としては出来るならもう一度試験を受けさせてやりたいが、それだと他の生徒に示しがつかない。本当にすまない」

そう言つて俺達に頭を下げる西村先生。時に厳しく時に優しい良い教師だと思う。

「頭を上げてください西村先生」

「そうですよ。私達も覚悟の上です」

「そう言つてもらえると助かる。…おつと、長話が過ぎたな。お前たち、早く教室に行け」

「はい、失礼します！」

『小波一輝 Fクラス』

『南雲瑠璃花 Fクラス』

Fクラス

三階の二年生校舎に来て俺と瑠璃花は驚愕した。

……目の前の光景に。

「…まあ瑠璃花」

「…なんでしょうか」

「ここは教室だよな？ ホテルじゃなくて？」
「教室で間違いないですよ……Aクラスの」

場所は二年Aクラス前。窓から覗いてみると巨大スクリーンが見える。他には個人のノートパソコンにエアコン!? 冷蔵庫にリクライニングシート!? までまで、最高クラスとはいえやり過ぎじやね!?

「どれだけお金掛けてるんでしょうか：」

「広さもハンパないぞ。見ろ、普通の教室の五、六倍はあるな」

そんな会話をしていると

「皆さん進級おめでとうござります」

あ、スクリーンに担任の先生が映し出された。あれは…高橋先生だ。

「高橋先生はAクラスの担任なんですね
「まああの人なら務まるだろう」

スーツを着こなし、眼鏡を掛けた知的な女性の見本とも言える高橋先生。西村先生同様去年世話になつた人だ。

「……霧島 翔子（きりしま しょうこ）です。よろしくお願ひしま

す

一人の女子生徒が代表の挨拶なのか、スクリーンの前で挨拶している。長い黒髪、物静かな雰囲気を持つあの子は…

「やつぱり翔子が代表か」

「翔子なら当然ですよ。去年からずっと成績トップなんですから」

翔子と俺達は同じ中学だつた訳じやないが、俺と瑠璃花の通つていた中学に翔子の従姉がいてソイツに紹介されて交流を持つた。

「…アイツも、頑張つてるかな」

「？ 何か言いましたか？」

「いや、何でもない。そろそろ教室に行こう。このままじゃ本当に遅刻する」

話を切り上げて俺達はAクラスを後にした。

そしてFクラス前。

「…なあ瑠璃花」

「…なんでしようか」

「ここは教室だよな？ 山小屋じやなくて？」

「教室で間違いないですよ……Fクラスの」

Aクラスにいた時とほぼ同じ会話を繰り広げている俺達。Aクラ

スは良い意味で凄かつたがFクラスも凄い。

もちろん、悪い意味でだ。古ぼけた扉にひび割れ多数の窓。扉の上に飾られているFクラスのプレートは真ん中部分がセロテープで修正されている。

「……」は本当に学校なんだよな？ いつの間にか別世界に迷いこんでた、なんてことはないよな？」

「一輝？ Aクラスの教室と格差が激しいからそう言いたくなる気持ちはわかります。ですが現実は受け入れましょう」

「…わかつた」

瑠璃花のおかげで冷静になれた。外見がこれでは室内がどうなつていることやら、一瞬戸惑いながら扉を開ける。

「おはよ 「早く座れ、蛆虫野郎！」 つ!?」

扉を開けた瞬間俺に向けて罵倒が飛んできた。この声は

「なんだ一輝か。悪いな、てつきりアイツかと思つてな」

「雄二、朝からずいぶんな挨拶だな」

教卓に立っているのは赤髪短髪ゴリラこと坂本 雄二（さかもと ゆうじ）。去年のクラスメイトだ。そして…

「ちよつと待て。心の中でサラッと俺を罵倒しなかつたか？」

「なぜわかるんだよ。仮にしたとしてもお前も罵倒したんだからおあいこだろ」

「はあ…一人共相変わらずですね」

後ろで呆れている瑠璃花をよそに教室を見渡す。床が畳、机と椅子の代わりに卓袱台と座布団がある。Aクラスとのあまりの格差に涙

が出そうだ。

「先生はまだ来てないみたいですね。私達の席はどこでしようか?」

「好きな場所に座るといい」

「席すら決まってないのかよ!」

「ここ本当に学校!? 何度も聞くけど本当に学校!?」

「あれ、一輝と南雲さん? 二人も今来たの?」

廊下から聞き慣れた男子の声がする。

「早く座れ、蛆虫野郎」

「いきなり酷くない!?」

「毎回面白いリアクションだな。おはよう明久」

目当ての人間が来たことで雄二は先程のセリフを対象に向けて放つ。突然の罵倒に期待通りの反応をする吉井 明久(よしい あきひさ)。コイツも去年のクラスメイトだ。

「おはよう一輝。…ってなんで雄二が教卓にいるのさ」

「俺がクラスの代表だからだ」

ふーん、雄二が代表なんだ。てか雄二と明久がFクラスか…。二人ならD、Cクラスを狙えるのに。後でなにがあつたのか聞いてみるか。

自己紹介

それから少しして担任の先生が来た為、出入口で盛り上がっていた俺達は移動する。席順は自由だから俺は空いてる席に座り、その隣の席に瑠璃花も座る。

「えーおはようございます。二年Fクラスの担任の……福原 慎（ふくはら しん）です。よろしくお願ひします」

自己紹介を始めた福原先生は黒板に名前を書こうとしたが何故かやめた。チョークすら用意されてないのか…？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されますか？ 必要なものがあれば極力自分で調達するように。それと不備があればいつでも申し出て下さい」

だいたいの説明が終わると何人かの生徒が手を擧げる。

「先生、俺の座布団に綿がほとんど入つてないでーす」

「我慢してください」

「先生、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています」

「我慢してください」「いや無理でしょっ！」はははつ冗談ですよ。木工用ボンドが支給されていますので、後で自分で直してください。それと割れた窓ガラスについてもセロハンテープとビニール袋の支給を申請しておきます」

福原先生、冴えない印象に似合わずなかなかの人だな。この人とも仲良くなれそうだ。

「では、自己紹介を始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願
いします」

「木下 秀吉(きのした ひでよし)じゃ。演劇部に所属しておる。今
年一年よろしく頼むぞい」

独特な言葉使いで自己紹介するのは去年のクラスメイトの秀吉。
男子の制服姿でも十人中十人が女子と間違えるだろう可愛らしい容
姿は本人の悩みの種らしい。

「…………土屋 康太（つちや こうた）」

またしても知り合いだ。康太は口数少なくて小柄な奴だけど多芸
に秀でている。俺には出来ない様々な事をこなす為、いろんな意味で
尊敬している。

「島田 美波（しまだ みなみ）です。海外育ちで、日本語は会話はで
きるけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイ
ツだったので。趣味はーー」

お、ちゃんと女子がいるな……ってまた去年のクラスメイトか。：
知り合いだらけだな。

「ーー趣味は吉井明久を殴ることです☆」「誰っ!？」

「はろはろー。吉井、今年もよろしくね」

突然の爆弾発言に分かりやすい反応をする明久。そんなアイツを見つけて笑顔で手を振る島田。あの二人も相変わらずだな。

「ーーです。よろしく」

その後も淡々と自己紹介が続き、いよいよ俺達の番だ。

「小波一輝です。趣味は体を動かす事です。一年間よろしくお願ひします」

俺の方はすんなり終わったが…

「南雲瑠璃花です。料理が趣味で家庭部に所属しています。皆さん、一年間よろしくお願ひしますね」

「「よろしくうーーー!!」「」

瑠璃花の挨拶だけ男子連中が返す。返された瑠璃花は苦笑いしながら引いている。まあ瑠璃花って男子から人気高いみたいだし当然なのかな?

「吉井明久です。気軽にダーリンつてよんでもくださいね♪」

「「ダアアアーーリイイーーン!!」「」

瑠璃花だけじゃなかつた。俺達の後ろの席のバカのおふざけで聞いてるだけで不快な気分になる。

「……失礼、忘れてください。とにかくよろしくお願ひします」

言つた本人も口に手を当て今にも吐きそうな顔で席に着く。何が

したかつたんだい、お前さん？

「あの、遅れて、すいま、せん……」

突然ガラリと教室の扉が開き、息を切らせて胸に手を当てている女子が入ってきた。

提案

教室全体が驚きや疑問が混ざったような声で賑やかになる。当たり前だ。教室に入ってきたのは本来ならここに来ないはずの生徒なのだから。

「丁度よかつたです。今自己紹介をしているところなので君もお願ひします」

「は、はい！　あの、姫路 瑞希（ひめじ みずき）といいます。よろしくお願ひします……」

騒がしい中、数少ない平然としていた福原先生が声をかけ姫路は自己紹介をした。すると一人の男子が高々と右手を擧げる。

「はいっ質問です！」

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんでここにいるんですか？」

…これら、それじやあ失礼な質問になるぞ。まあ気持ちはわかる。今クラス全員の視線を浴びてているだろう彼女は入学当初から成績上位に名前を残している程の有名人だからだ。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その答えを聞いてクラス全員納得の表情を浮かべた。

『そう言えば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとうございます』

改めて思う。想像以上にバカだらけだ。

「で、ではっ、一年間よろしくお願ひしますっ！」

逃げるよう俺達にいる空いていた明久の隣に座る姫路。彼女の自己紹介が終わつても未だに騒がしいクラスメイト。

「はいはい。皆さん、静かにしてくださいね」

バキイツ ガラガラ～……

皆に注意しようと先生が教卓を叩くと、それは一瞬でゴミ屑と化した。

「え～……替えを用意してきます。少し待つていてください」

「あ、あはは、けほつけほつ……」

笑いながら咳き込む姫路。体の弱い彼女にFクラスの環境は厳しそぎるんじやないか？ そう考えていると

「雄二、一輝。ちょっといい？」

「あ？」

「ん？ なんだ？」

明久に連れられて俺と雄二は教室を出た。

「で、話つて？」

廊下に出て最初に口を開いたのは雄二だ。

「うん。この教室についてなんだけど、いくらなんでも酷いと思わない？」

「Fクラス、想像以上に酷いもんだな」

「Aクラスの設備を見たあとだからな。余計にそう感じるのかもな」

学校側は生徒の誰かが教育委員会に訴えることを想定していないのか？ というくらいに酷いものだ……あ、そようそ。

「なあ、お前たちはなんでFクラスにいるんだ？ 二人ならもつと上のクラスに行けたはずだろ？」

俺の質問に対する二人の答えは

「試験中に倒れた姫路さんを保健室に連れていくつて無得点に」

「姫路を運んでいる明久をたまたま見つけてな。点数を調整してFクラスになつた。お前らといった方が楽しいからな」

まつたく拗いも拗つて……

「お前らバカだろ？」

「お前が言うな」

俺に関しては仕方がない。瑠璃花は困つてゐる人を放つておけない性格だし、俺自身瑠璃花と一緒にいたいし。

「ははは。さて、話を脱線させてなんだけどさ。明久の言う通り、確かにFクラスの教室は酷いよな」

時間もないしそろそろ本題に入ろうか。

「でしょ？ そこで僕からの提案なんだけど、試召戦争仕掛けてみない？ Aクラスに」

「戦争？……姫路の為、か？」

「うん。姫路さんは本来ならAクラスにいるべき人だし、彼女にこの設備はキツすぎるとと思うんだ」

明久も俺と同じ考え方のようだな。しかし…

「確かにこのままじゃ何らかの病気になつてもおかしくないな。まあ、そもそも俺もAクラス相手に戦争をやろうとおもつていたからな。いいだろう、協力してやる」

「ありがとう雄二。一輝はどう？ 去年から試召戦争やる気だったし、協力してくれるよね？」

雄二を味方につけ、俺に期待の眼差しを向ける明久。

「確かに、俺は試召戦争目当てでこの学校に来たといつていい。だが…

お前のその理由なら俺は試召戦争には反対だ」

明久視点

一輝の答えは僕にとつて予想外のものだつた。隣にいる雄二も驚きを隠せていない。

「え、なんですか!?」

一輝が試合戦争の為に文月学園に来たことを去年聞いた。だから雄二同様この提案に必ず乗つてくると思っていた。まさか反対していくなんて思いもしなかった。

「勝算がないからか?」

雄二が一輝に尋ねる。確かにAクラスとFクラスの力の差は歴然だ。でも僕らのクラスには勝算がある。目の前にいる雄二と一輝もそう、秀吉に康太に島田さん。しかも姫路さんと南雲さんもいる。僕だつて全力を尽くす。

これだけの戦力でうまく立ち回ればAクラスにだつて…

「勝算については聞くまでもないだろう。俺達のクラスには十分な戦力があるからな。問題なのはAクラスに勝った後だ」

Aクラスに勝つた後? 一輝は何を言つてるんだろう。

「Aクラスの連中は努力して設備を手にいれた。それに対しても前たち以外のFクラス連中は努力していないからここにいる。そんな奴らにAクラスの設備は必要ないし、努力した連中を踏みにじるような真似はしたくない」

僕は何も言えなかつた。

「次に体が弱いのは姫路だけじゃないだろ。Aクラスにだつて体が弱い女子はいる……いや、女子とは限らない。運動とは無縁の体力の無い男子だつている。戦争に勝つて設備を入れ替えたらいつらが間違いなく病氣になる。姫路一人の為にそいつらを犠牲にする気か？」

ようやく僕は気づいた。目の前の姫路さんのことばかり考えて他の人のことを考えてなかつた事に。少し考えれば分かることなのに……

「一輝、ゴメン。僕は本当にバカだ。周りがちゃんと見えてなかつたよ…」

「そう落ち込むなよ。やる前に気づけたならまだ間に合うさ。それに、お前みたいに他人のために自分の信念を貫ける奴は嫌いじゃないしな」

「…うん、本当にゴメンね。それと、ありがとう」

一輝、改めて君を凄いと思う。何が正しくて何が間違つているのかを冷静に見極めて仲間たちを導く。

今でも君が『伝説のキヤプテン』と呼ばれている理由がわかつた気がする。

一輝視点

明久の説得？ を終えたは良いが振り出しに戻ってしまったな。
らしい事を言つても試召戦争をしたいのは俺の本心だ。

どうしたものかと悩んでいると今まで黙っていた雄二が口を開く。

「一輝、要するにAクラスに迷惑を掛けなければいいんだろ？ それならなんとかなるかもな」

「ホントにつ!?」

雄二の話題に反応したのは俺ではなく明久だ。

「簡単だ。勝った時の報酬を変えればいい。そうだな、『再度振り分け試験を行う』つてのはどうだ？」

「えつ……報酬を変えるつて、そんな事出来るの!?」

「可能だ。過去の試召戦争について調べてみたんだが、上位クラスに勝つたクラスが設備の交換じやあなく設備のランクを一つ上げる提案が通つたらしい。それに比べれば再度振り分け試験を行うくらい学校側からすれば苦でもないはずだ」

雄二の提案に明久の表情がだんだん明るくなつていく。俺の答えを求める、振り向いてくる。当然異論はない。

「これが俺の提案だ。一輝、これでどうだ」

「ここまでの大出されて文句はないよ。わかつた、俺も協力する」「雄二、一輝：ありがとう。じゃあそろそろ先生も戻つてくるし僕達も教室に戻ろう」

明久は俺と雄二に礼を言つて教室に入つていき、俺達もそれに続

く。

「では最後に坂本君、自己紹介をしてください」「了解」

代表として最後に挨拶したいと順番を後回しにしてもらつた雄二が先生に呼ばれて席を立つ。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きに呼んでくれ。さて、皆に一つ聞きたい」

ゆっくりと教室を見渡す。

「カビ臭い教室、古く汚れた座布団、薄汚れた卓袱台。それに対してもAクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがーー」

一呼吸おいて告げる

「ーー不満はないか?」

『『『大ありじやああああああああああああああつ!!』』』

窓ガラスが割れるかのような魂の叫びが響き渡る。

「だろう? 僕もこの現状は大いに不満だ」

『そうだそうだ!』

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！』
『改善を要求する！』

次々とあがる不満の声。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案だ
がーー

——FクラスはAクラスに試験召喚戦争を仕掛けようと思う

さて、楽しくなりそうだ。

根拠

『無理だ、勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいれば何もいらない』

『南雲さんがいてくれれば満足』

弱気な声があちこちから上がる。若干数名がズレた発言をするが今は無視だ。皆の言いたいことは判る。何故なら成績下位のFクラスが成績上位のAクラスに勝つ。それは世間でいう『Giant killing』を実現させるに等しいからだ。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを…』

自信ありと宣言する雄二。しかしそれでも否定的な意見は尽きない。

「根拠ならあるさ。このクラスには試召戦争で勝つ事の出来る要素が揃っている。それを今から説明してやる」

勝てる根拠。それを聞いて全員が雄二に視線を向ける。皆の視線を浴びる雄二是姫路の方を見て…

「おい康太。いつまでも姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「…………!!（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死に顔と手を左右に振つて否定する康太。そして姫路、今さらス

カートを押さえても遅いぞ。

「土屋康太。こいつがあの有名な『寡黙なる性識者（ムツツリーニ）』だ

「…………!!（ブンブン）」

頬に付いた畳の跡を手で隠しながらも否定する姿が哀れだ。

『馬鹿な！ ヤツがそうだというのか……？』

『だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ…』

『ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ…』

康太の二つ名、それがムツツリーニ。性に関する知識を求める姿からその名がついた。その結果、奴は保健体育の成績で学年トップに登り詰める程になつた。

「次に木下秀吉。皆も知つてゐる演劇部のホープだ」

『おお……！』

『確かに、Aクラス木下優子のーー』

『『双子の妹！』』

「妹ではない！ 弟じゃ！」

秀吉が必死になつて否定するが……たぶん誰も聞いてないな。ドンマイ。

「島田の数学も俺達の中で群を抜いている」

『おおっ……！』

「姫路と南雲のことは説明する必要もないだろう

「えつ？ わ、私ですか？」

「そうだ姫路、ウチの主戦力だ。期待している」

試召戦争において姫路のような成績トップ争いに加わる人ほど心

強い戦力はないな。それに…

『そうだ。俺達には姫路さんとがいるんだ!』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『南雲さんの成績つて毎回二十位前後。文句なしにAクラスレベル
じゃねーか!』

『ああ、彼女さえいれば何もいらない』

「よかつたな瑠璃花。期待されてるぞ?」

「姫路さんに比べれば私なんて霞んでしまいますけどね」

そんなことはないさ。さつき誰かが言つた通り、瑠璃花はAクラス
並の実力がある。康太のように得意分野に突出しているわけではな
いが俺の知る限り全体的に苦手はない。どの科目でも戦えるという
事は展開次第で優位に立てるという事だ。

「当然、俺も全力を尽くす」

『坂本つて、確か小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか?』
『てことは、実力はAクラスレベルが三人いるつてことだよな!』

いけそうた、やれそうだ、気がつけば教室の土気は確実に上がつて
いた。

「それに、吉井明久と小波一輝もいる」

……シン——

俺と明久の名前が出た瞬間、クラスの士気は下がつた。俺達の名前
はオチ扱いかよ!?

『誰だよ、吉井と小波つて』

『聞いたことがないぞ』

『そんなヤツこのクラスにいたか?』

「ちよつと雄二!」一輝はともかくどうしてそこで僕の名前を呼ぶのかさ! ほら、折角上がりかけていた士気が下がっちゃったじゃないか!

!』

「そう自分を卑下するなよ明久。お前は観察処分者じゃないか」

『観察処分者』。学生生活において問題のある生徒に課せられる処分。主に教師の仕事の際、力仕事などの雑用を物理干渉(物に触れる)召喚獣でこなす。

ただし物に触れる召喚獣の負担(疲れやダメージ)の何割かは召喚者にファイードバックされる。故に観察処分者。問題児の生徒に与えられるペナルティである。

『おいおい、ようするに試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しめてことだろ?』

『おいそれと召喚出来ない奴が一人いるってことだよな』

様々な意見が飛び交う。まあそうなるわな。だが問題はそこじやない。雄二もそれについて話すだろう。

『確かにファイードバックはデメリットだが、観察処分者ゆえのメリットもある。明久、今までに何回召喚獣を動かした?』

「数えてないけど、ほぼ毎日先生の仕事手伝つてたから百は越えてるんじやないかな?』

「聞いたか皆。俺達は去年、授業で数回動かしただけだが明久と一輝は違う。俺達以上に召喚獣の操作に精通しているから点数が上の相手でも互角以上に渡り合える。十分過ぎる戦力だ』

『マジでつ! それつてすぐくね!?』

『あれ？ ちょっと待て。 吉井はわかつたけど小波は結局なんなん
だ？』

明久について納得した皆の視線が俺に集中する。うわゝなにこの
空氣？ 雄二、早く俺の説明をしてくれ。

「一輝は試召戦争が目当てでこの学校に来た。先生方から許可を貰つ
て明久と同じように雑用をこなしている。もう皆も判るだろう。こ
れだけの戦力があればAクラスに負ける要素など一つもない！」

『『うおおおおおおつ！』』

『いける、勝てるぞ！』

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当たり前だ!!』

「ならば全員ベンを執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーーっ!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデスクだ
！」

『うおおーーっ』

「お、おー…」

ホント雄二は盛り上げるのが上手い。姫路も頑張って乗っている。

ミーティング

「まず手始めにDクラスを落とす。そこで明久！ 秀吉を連れてDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役を果たしてこい」「…それはいいけど、下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭うよね？」

明久の言う通り。下位クラスからの宣戦布告は拒否できないとめ宣戦布告に来た人は基本的に痛めつけられるのだ。

「だからこそその秀吉だ。秀吉が居れば少しはマシになるだろうからな」

「雄二よ。それはワシがDクラスの面々から女扱いされておる、ということではないのか!?」

「わかつたよ。開戦は午後からでいい？」

「ああ頼んだぞ」

「待つのじや一人とも！ 淡々と話を進めるでない！」

決意を固めて教室を出ていく明久。納得行かないまま後を追う秀吉。はたして結果は…。

「た、だい、ま…」
バタリツ

教室を飛び出して十分。戻ってきた明久ははその場で倒れた。ボ

口ボロになつた制服から判るように袋叩きにされたのだろう。しかし、

「なぜじや？ なぜワシは攻撃されなかつたのじや？」

一方無傷の秀吉は納得がいかないという顔をしていた。どうやら明久が盾になつてくれていたらう事に気づいてないようだ。

「お…おう、ごくろうだつたな。ちゃんと伝えてきたか？」

「うん。昼休み終了から開戦になつたよ」

倒れた明久を見て顔をひきつらせる雄二。そして明久はすぐに復活して雄二に報告する。

「そうか、ならいい。これからミーティングを行う。さつき名前を挙げたメンバーは屋上に来てくれ」

雄二はそう言つて教室を出ていつた。それに続き康太と秀吉。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「吉井、大丈夫？」

「うん、大丈夫。ほとんどかすり傷」

姫路と島田に心配され、なんとか起き上がる明久は姫路、島田と共に教室を出る。

「一輝、私たちも行きましようか」「ん？ ああ、行こうか」

瑠璃花に促され、俺も教室を後にする。

屋上に来た俺達。雄二がフエンスの前にある段差に腰を下ろし、皆がそれに習う。全員が座つたところで雄二が口を開く。

「さて、今回のDクラス戦だが、まず簡単に作戦を言おう」

「その前に雄一よ。気になつていたのじやが、どうしてDクラスなんじや？ 普通はEじやろう？」

「簡単な話だ。Eクラスは戦うまでもないからだ」

「なるほど。確かにな」

雄二の意図が理解できた俺は頷く。しかし明久はわからないらしい。

「あれ？ でも僕らよりクラスが上だよ？」

「確かに試験では奴等が上だ。けど、実際のところは違う。明久、お前の周りにいる面子をよく見てみろ」

雄二に言われた通り俺達を一人一人見る明久。

「美少女が三人とバカが二人と有名人が一人いるね」

「誰が美少女だと！」

「…………（ボツ）」

「ええっ！ 雄二とムツツリーニが美少女に反応するの!? ツツコミ
切れないんだけど！」

こんな時にでもふざけられるとはな。仕方がない、代わりに俺が言

うか。

「要するにだ明久。ここにいる面子なら正面からやりあつてもEクラスには勝てる。Dクラスも問題はないだろうが、絶対とは言えない」「だつたら最初から目標であるAクラスに挑もうよ」

「初陣として派手に勝つて景気づけにしたほうがいいだろ？ クラスの士気を維持する為にもな。それに何回か試召戦争をやつて召喚獣の操作を積む目的もあるだろし」

一応雄二に確認を取るため視線で問う。それに気づいて雄二は頷く。

「一輝の言う通りだな。まあDクラスに挑む理由はそれ以外にもあるがな」

「どういうことじゃ？」

「それについてはいずれ話す。今はDクラス戦の話をしよう。これら作戦を説明する。しつかり聞いてくれ」

俺達はDクラス戦勝利のための作戦に耳を傾けた。

南雲 瑠璃花

「瑠璃花、いくぞ」

「はい」

屋上での作戦会議を終えた俺達は教室に戻つて授業を受けた。そして今は昼休み。本来なら瑠璃花が作つた弁当があるんだけど…

「ん？ 一輝、南雲。何処か行くのか？」

「ああ。今日は弁当が無いから売店で食べるよ」

「珍しいな。戦争の準備もあるから遅れるなよ」

雄二の質問に簡潔に答える。昼休みが終わればすぐに試召戦争が始まる。代表として釘を刺しているんだろう。

「わかっているさ。時間までには戻るよ」

そう言つて俺は教室を出ていき、瑠璃花が後ろをついて行く。二人で並んで廊下を歩く中、瑠璃花が口を開く。

「すみません。今日に限つてお弁当の用意が出来ず…」

「仕方ないよ。瑠璃花のお母さんの看病してたんだしさ。それに、瑠璃花の料理は楽しみだけど毎日お弁当作つてもらつたら悪いし」「悪いだなんて、そんなことありません。私は自分がしたくて一輝のお弁当を作つているんですから」

「ははは、だつたらこれからもご好意に甘えちゃおうかな？」

「はい、どんどん甘えてください！」

互いに笑いながら売店を目指す。

校舎一階の売店に来た俺達。店の前に知つてゐる後ろ姿があり、声を掛ける。

「小野さん、ここにちは。店開いてます？」

「あら～小波くん、いらっしゃい。もちろん開いてますよ～」

「ここにちは、小野さん」

「南雲さんもここにちは～」

俺達に挨拶をする三角巾にエプロン姿のお姉さん、名前を小野 映子（おの えいこ）さん。去年の秋から出来た売店で働いている。実年齢は不明。しかし二十代前半を思わせる若さと美貌、そしてのほほんとした雰囲気を漂わせることから生徒だけでなく教師からの評判も高い。

俺は先生方の雑用を手伝う際にこの人と何度も関わっている。瑠璃花も料理のスキルを上げる為に小野さんから指導を受けたことがあるらしい。

「パン二つ買いたいんですけど。これ二人分のお金です」「どうも～。好きなもの持つていってくださいね～」

お金を受け取り、いつも通りの天使のスマイルを見せる小野さん。うん、ファンが多いのも頷ける。そんな事を思つていると、離れた場所で一人の先生が困った様子で歩いている。どうしたんだろう…。

「布施先生。何かありましたか？」

「ああ、小波君。実はーー」

瑠璃花視点

売店でパンを買って教室に戻ろうという時に一輝が何かに気づいて歩き出す。見ると通路の向こうから布施先生が何かを考えながら歩いている。布施先生と何かを話し始めた一輝はすぐに私のもとに戻ってきた。

「ごめん瑠璃花。布施先生の手伝いしてくるからさ、俺の分のパン持つて教室に戻つてて」

「あ…はい、わかりました」

突然の事に変な声が出そうになつたけどすぐに返事をして一輝のパンを受け取る。そして一輝は布施先生とどこかへ行つてしまつた。

「小波くん、また先生方のお手伝い？」

「一輝は人がいいですかね。困っている人を放つて置けないんですよ」

「そう、私の時も…。」

「では小野さん、教室に戻りますね」

小野さんに一礼して背を向けると

「…南雲さん、一つ聞いてもいいですか？」

呼び止められた。

「え？　はい、いいですけど…」

「Fクラスの子達と仲良く出来そうですか？」

「…………」

それを聞いた瞬間、私の心が暗くなるのがわかる。

「やつぱりまだ、彼や身内以外の人と繋がりを持つのが不安ですか？」

小野さんの問いに私は頷く。小学校四年生の頃、父が多額の借金を残して病死して、元々住んでた一軒家を離れる事になった。お母さんは借金を返すために朝から夜まで働く日々を送り、そして私は事情を知った学校の同級生からいじめを受けるようになった。

貧乏人、母子家庭、疫病神、それらの言葉は今でも心に刺さっている。仲の良かつた筈のクラスメイト、周りが私の事をどう思っていたのか、あの頃ハツキリと思い知らされた。始めは我慢できていたけど日に日にいじめがエスカレートしていき、ついには学校に居場所がなくなり私は転校を余儀なくされたのだ。

「…はい。もうあんな思いは御免ですから…」

事実、私は吉井君や坂本君達とも距離を取っている。去年から教室で一輝と他愛のない話で盛り上がる彼等が良い人達なのはわかっている。

それでも私自身が一步を踏み出せないでいる。そんな私に小野さんが笑顔で

「大丈夫。あなたはまだ他人との繋がりを諦めてませんよ」

諦めてない、ですか。

「…そうだといいですね」

もう教室に戻ります、と頭を下げて私は教室を目指して歩く。

一輝と出会ったのは転校先の小学校。その時になつて同じアパートの隣の部屋に住んでる事を知り一緒に登校する事になつた。次第に彼と一緒にいる事に居心地がいいと感じると同時に家の事情を彼に知られる事が怖かつた。しかし秘密を知つても一輝は私から離れる事はなかつた。彼は私を貧乏人でも疫病神でもない南雲瑠璃花として見てくれたのだ。そんな彼に私は惹かれていた。

そしてしばらくして、小学校六年生の頃に起きたある出来事により彼は私達親子を救つてくれたのだけど、それはまた別のお話。

彼に救われ、命の恩人なんて言葉でも足りない程の大きな恩を今度は私が彼を支える事で返していくと決めたのだ。

……一輝、あなたのお世話は私の生き甲斐なんですからね。

Dクラス戦（1）

昼休みが終わり、Dクラスとの試召戦争が始まり俺、瑠璃花、明久、姫路の四人は空き教室で回復試験を受けている。前の振り分け試験で明久と姫路は途中退席によつて無得点。俺と瑠璃花は試験を受けていないため無得点。今の俺達では召喚獣を呼び出せないのだ。

「……よし」

「一輝、行くのですか？」

「ああ。これだけ解けば十分だ。明久もそろそろいいんじやないか？」ガタツ

「そうだね。じゃあ僕も」ガタツ

「ふ、一人とももう終わつたんですか!?」

戦争開始から三十分。ある程度問題を解いた俺は試験を切り上げ、それを悟つた瑠璃花は確認の為に聞いてくる。明久にも声を掛け、いい頃合いだつたらしく立ち上がる。姫路は早く回復試験を終えた俺達に驚く。

「俺と明久は低い点数でも十分戦えるからな。いくぞ明久！」

「了解。じゃあ行つてくるね」

「気をつけてくださいね」

「私たちもすぐに行きます！」

瑠璃花と姫路の声援を受け取り俺たちは空き教室を後にする。

明久視点

現在の状況は：おそらく戦争開始から渡り廊下でDクラスと交戦していた秀吉率いる先攻部隊が後退をしだして、それを見かねた島田さん率いる中堅部隊が加勢に加わったあたりかな？ ここにくる前に秀吉たちが回復試験を受けに戻つたし。

「見たところ教師は高橋先生の他に化学の布施先生と五十嵐先生がいるな。明久、化学は何点取つた？」

「一応全教科50点以上は取つたから問題ないよ。操作でカバーするしね」

「よし。科目変更はいつでも出来るに越したことはないからな。化学以外でも戦えるよう高橋先生のもとに向かおう」

一輝の提案に肯定の意を示すために頷く。そして走り出そうとした瞬間

「い、嫌あつ！ 補習室は嫌あつ！」

あれ、島田さん？ 立ち止まって辺りを見渡すと……いた。五十嵐先生が展開する化学のフィールドの中に島田と女子生徒の姿が。

あれ？ あのツインロールヘアの子は……

〔化学〕

Fクラス 島田美波 53点

V S

Dクラス 清水美春 94点

清水さんんんんんっ！？ あの娘Dクラスにいたの!? さつき宣戦布告に行つたときは気づかなかつたよ！

清水 美春（しみず みはる）。島田さんを『お姉様』と慕い、少々

……いや、かなりイケない思考を持つ女子生徒。

「ふふつ。お姉様、この時間ならベッドは空いていますからね」

「ひいいっ…！」

「一輝、先に行つて。僕は島田さんを助けに行く」

「あ、ああ。また後でな」

清水さんが島田さんの手を引っ張つて保健室へと歩き出す。これはヤバい。補習室行きよりもヤバい予感がする。一輝も予想がついたのか、若干顔がひきつっていたし…。

「Fクラス吉井明久、Dクラス清水に挑みます。試獣召喚（サモン）つ！」

起動ワードを唱えると僕の足下に魔方陣が現れて、そこから改造学ランを身に纏い、右手に木刀を持った召喚獣が現れた。その顔は僕そつくりである。

突然現れた僕に向けられたのは島田さんからの希望の眼差し。そして清水さんからの敵意の眼差し。

「吉井、助けにきてくれたのね！」

「吉井明久：美春の邪魔をしないでください！」

「清水さん。君にはいろいろと世話になつてているけど、今は戦争中だ。おとなしく島田さんを離してくれると嬉しいかな？」

「美春の邪魔をすると言うのならば貴方も敵です！」

清水さんの召喚獣は僕の召喚獣に突進してきた。僕は召喚獣を作して最小限の動きで攻撃をかわして足払いをかけ、激しく転倒した清水さんの召喚獣の首を一閃した。

〔化学〕

Fクラス 吉井明久 73点

V S

Dクラス 清水美春 D E A D

「そ、そんな…」

「戦死者は補習〜!!」

どこから現れたのか、鉄人（西村先生）が清水さんを補習室へ連行する。

「お、お姉様〜つ！」

彼女の悲鳴は姿が見えなくなつた後もしばらく続いた。

「島田さん、無事？」

「吉井、ありがとう。助かつたわ」

「どういたしまして。じゃあ僕は先に行つた一輝を追いかけるけど、島田さんはどうする？ 僕と来る？ 回復試験受けに行く？」

僕の問いに島田さんが少し考えて

「一緒に行くわ。美春からはあまり攻撃を受けていないし」「決まりだね。じゃあ行くよ！」

僕たちは一輝のもとへと急いだ。

「ねえ吉井」

「なに島田さん？」

「アンタ美春と知り合いなの？」

「清水さん？ 僕のバイト先の喫茶店、あの子のお父さんが経営しててね。たまに店に顔を出しに来てるんだ」

「……吉井って、バイトしてたのね」

Dクラス戦（2）

明久視点

先に向かった一輝にようやくたどり着いた僕と島田さんは目の前の光景に戦慄していた。

「おう。二人とも遅かつたな」

「…小波？ 一体何をしたの？」

「何つて、Dクラス連中に戦いを挑んだだけだけど？」

島田さんの問いに何もなかつたかのように答える一輝。いや、この状況は…

『戦死者は補習〜!!』

『て、鉄人！？ 嫌だ！ 補習室は嫌だ〜』

『頼む！ 見逃してくれ！ あんな拷問耐えきれる気がしない！』

『拷問ではない。立派な教育だ！ 喜べ。戦争が終わる頃には趣味は勉強、尊敬するのは二宮金次郎、といった立派な生徒になれるだろう』

『それは教育じやなくて一種の洗脳！ 誰か、誰か助け、ぎやああ〜〜!!』

Fクラスも何人か混ざっているが、Dクラスの生徒十数人が鉄人に担がれ、補習室へと運ばれていった。

「あれ…全部君が倒したの？」

「ああ。面倒だつたから全員を相手にした。やられたFクラスの何人かは助ける暇がなかつたからな」

「十数人を運んでいく西村先生もスゴいけど、アンタもアンタよね…」「まあね。点数差はあつても操作性でなんとかなつたよ」

点数はあくまでも召喚獣の強さを表すものであつて、人間と同じように心臓を貫かれたり首を斬られたりすれば点数差に関係なく戦死する。一輝も僕同様去年から召喚獣を何度も動かしていたから点数が低くても負けるわけがない。

「小波の召喚獣見たかつたわー」

「ははは、次の機会にね」

「とりあえず、今の状況を雄二に報告する？ 時間稼ぎする必要無くなりそうだし」

僕の提案に二人が賛成し、近くにいた須川君に伝令を頼んだ。僕達はこの場で待機して再びやつて来たDクラスの増援部隊の相手をした。

雄二視点

「須川、それは本当か？」

「ああ。俺もあの場にいた」

須川から話を聞き、俺が確認するように問うと須川は本当だといわんばかりに頷く。Fクラスとしてはありがたいことだが予想外の展開に内心驚いている。

(点数差を気にせず戦えるとはな…)

今朝、Aクラスに勝つ根拠として召喚獣操作の有効性についてクラスメイトに話したが、あれはあくまでクラスの士気を上げるため。俺自身召喚獣に関してそこまで詳しくはなかつた。どんなに細かい操作が出来ても点数差で勝敗が決まると思っていたからだ。

明久と一輝が戦力になるのは正直に嬉しい。だが相手がDクラスだからな。これは念のために……

ガラツ

教室の扉が開く。

「坂本君。回復試験、終わりました」

またしても嬉しい誤算が起きた。

一輝視点

「おりやあああああつ!!」

【現代国語】

Fクラス	小波一輝	68点
Fクラス	吉井明久	59点
V S		
Dクラス	中野健太	D E A D
Dクラス	鈴木悠太	D E A D

Dクラス 平山紀之 DEAD

「戦死者は補習〜!!」

『嫌だ〜!』

『うわああ〜!』

『小波い〜! 覚えてろよ〜!』

俺と明久は目の前の敵を倒しながら少しづつDクラスへと前進していく。さつきまで島田も戦っていたが点数を消耗して回復試験を受けに行つた。ん? そういえば倒した中に見覚えのある奴がいたような〜。まあいいか。

「明久! まだやれるな?」

「もちろん! 一気に畳み掛けるよ!」

「くそつ〜まさかたつた二人にここまでやられるとは!」

俺達の目と鼻の先には見るからに焦っているDクラス代表の平賀源二（ひらが げんじ）の姿が。

「お前を倒せばゲームセットだな」

「Fクラス吉井と小波がーー」

「させません! 〔〔試獣召喚（サモン）！〕〕

「なつ!？」

【現代国語】

Fクラス	小波一輝	68点
Fクラス	吉井明久	59点
VS		
Dクラス	玉野美紀	112点
Dクラス	鈴木靖彦	97点
Dクラス	山本有三	108点

Dクラス 笹島圭吾 104点

突如俺達の前に現れたのはDクラスの近衛部隊。不味い、囲まれた
!

「残念だつたな。ここまで一人でよくやつたと讃めてあげよう」

勝ち誇つた平賀の顔。なんかムカつくな。

「三人がかりで駄目なら四人がかりだ。流石に君達でも苦戦は免れないだろうね」

確かに。こちらは点数が低い上に既に囲まれている。この状態で俺と明久で一人ずつ倒せたとしても残つた二人にやられる可能性がある。どうせなら戦死はしたくない。だから最後は一一

「瑠璃花、あとは頼む」

一一助つ人に任せることにした。

「は?」

俺の言つてる事の意味がわからないだろう平賀は当然のように疑問の声をあげる。

「わかりました」

そんな平賀の後ろから瑠璃花が歩いてくる。

「え? 南雲さん。どうしたの? Aクラスはこの廊下は通らなかつたと思うけど」

「Fクラスの南雲瑠璃花。Dクラス代表の平賀君に現代国語で挑みます。試験召喚（サモン）」

平賀の問いかけを無視して事務仕事のように淡々と述べて召喚獣を呼び出す。

【現代国語】

Fクラス 南雲瑠璃花 293点

V S

Dクラス 平賀源二 129点

「え？ あ、あれ？」

未だ現状を理解できていない平賀を他所に瑠璃花は召喚獣に武器を構えさせ

「いきます！」

平賀の召喚獣を一撃で仕留めたのだつた。

戦後対談（1）

『凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台とはおさらばだな！』

『南雲さん愛します！』

Fクラスの勝利。その報せを聞いた生徒達の叫びが校舎内を駆け巡る。片や勝利の喜びによる勝鬨。片や敗北による悲鳴。

そんな中、俺は戦争の終止符を打つた幼馴染みに歩み寄る。

「悪かつたな瑠璃花。騙し討ちみたいな真似をさせて」

「いえ、私にとつて一輝（あなた）の役に立つ事は日々の糧ですから」

「ははは、感謝してるよ」

瑠璃花の頭を軽く撫でる。そしてこちらに近づいてくる気配に気づいて振り向く。

「明久、一輝、南雲。よくやつてくれた」

雄二だ。恐らく瑠璃花をここまで連れてきたのもコイツだろう。

「まさか南雲さんがFクラスだなんて……信じられん」

負けたショックからか、床に腰を下ろしている平賀の姿が。そんな彼に雄二が近づく。

「平賀。早速で悪いが戦後対談に入りたいんだが、いいか？」

「…ああ。ルールに則つて教室を明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だ。作業は明日でいいか？」

顔に出してはいないが落ち込んでいるのがわかる。当然だ、負けた

以上あのボロボロな設備で過ごすと思っているだろうからな。だけど

「いや、その必要はない。Dクラスの設備を奪う気はないからだ」

設備は奪わない。昼のミーティングに参加した俺達八人はその話を聞いて納得している。しかし…

『『はあああああつ!?』』

当然不満の声もある。何人かが雄二に迫つて文句を言っている。それでも雄二は冷静に対処する。

「お前ら。俺達の目標はAクラスだろう」

手を前に出して「落ち着け」というようになだめる。そして平賀に向き直り

「というわけだ。Dクラスの設備には手を出すつもりはない」

「それは俺達にはありがたいが…。それでいいのか?」

「もちろん、条件がある。Dクラスは三ヶ月間俺達に協力する事だ」

「ん? 協力というと?」

「大したことじやない。ちよつとした雑用だつたりAクラスとの交渉の際に一緒に来てもらつたりな。あとは勝手に宣戦布告しない事。それらを受け入れるなら設備の交換を無しにする。どうだ?」

Dクラスからすれば願つてもないことだろう。ヤバイことをさせられる訳でもない以上これらの提案を呑むだけで設備の交換を避けられるんだから。

「……わかった。ではこちらはありがたくその提案を呑ませて貰お

う」

周りにいるDクラスの生徒達の多くが安堵で胸を撫で下ろしている。設備が入れ替わらずに済んで喜びを隠せないでいる。

「よし、契約成立だな。今日はもう帰つていいぞ」

「ああ、ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願つているよ」「はは、無理するなよ。勝てっこないと思つてはいるだろ?」

「いや、小波と吉井がいれば本当にAクラスを打倒できると思つているよ」

応援してゐからな、と手を挙げて平賀は去つていった。

「さて、皆! 今日はゞ苦勞だつた! 明日は消費した点数の補給を行つから今日はゆつくり休んでくれ! 解散!」

雄二の号令で皆雑談を交えながら荷物を取りに教室へと向かう。

試召戦争が終わつて一時間。最終下校時刻までまだ時間がある。明久はバイト。雄二、姫路、島田は家の事情で早々に帰つた。秀吉、康太、瑠璃花は部活の為まだ校舎にいる。俺は屋上で瑠璃花を待つていた。

懐かしい音が聞こえ振り向くと、校舎から少し離れたグラウンドで野球部が練習している。彼らを見ていると思い出す、五年前の奇跡を。

「ん？」

昔の思い出にふけているとポケットの中のスマホが震えている事に気づく。画面に映し出された名前を見て呆れてしまう。

「…アイツ暇なのか？」

といいつつ通話のマークにタッチをしてスマホを耳に押し当て、最近会つてなかつた友人に話しかける。

「もしもし玲奈か？　久しぶりだな。翔子とはもう電話したのか？」

計画の変更

時刻は七時四十分。俺と瑠璃花は既に学校に来ていた。登校するには些か早すぎるこの時間帯だとグラウンドで朝練をしている運動部だけで他の生徒の姿はない。

ちなみに何故こんな早くに登校したかと言うと昨日の夜に雄二からメールが来たからだ。『協力して欲しいことがある。明日説明するから早めに登校してほしい』と。

「おはよう（ござります）」

「お、一輝。南雲も一緒か、おはよう。意外と早く来てくれたんだな」

教室の扉を開けると、既に雄二が真ん中の席（卓袱台と座布団）に座っていた。

「雄二こそ、随分と早いんじやないか？」

先に教室に来て驚かせるつもりだったが、どうやら向こうが一枚上手だつたらしい。

「俺の持ち点は振り分け試験の為に調整したものだからな。Dクラス戦はともかく次の戦争の為にしつかり取つておこうと思つてな」

なるほどね。卓袱台の上にある参考書の量からしてかなり早い時間に來たな。

「それは感心。…で？ 次はどのクラスに挑む気だ？」

「Bクラスだ――と言いたいんだがな。昨日の戦争を見てやり方を変えようと思う」

「やり方を…ですか？」

雄二は「そうだ」と頷く。ちなみに俺は、基本的に俺と明久達の会話に参加する事のない瑠璃花が珍しく口を開いたことに内心驚いていた。

「俺は今まで召喚獣の勝負は点数で決まるものだとばかり思っていたんだ。だが聞いた話だと一輝と明久。お前ら二人は倍の点数差のある召喚獣をほぼ一撃で戦死させていたと聞いてな。協力して欲しいことを話す前にお前の口からその確認をしたかった」

「そういうことか。あまり知られてないことだけど、召喚獣にも人間と同じ急所があるんだ。心臓の部分を貫かれたり、首を切り飛ばされたりすれば点数差に関係なく一撃で戦死する」

俺はこの話を明久から聞いた。アーツは観察処分者だからフイードバックによつて召喚獣と感覚を共有することでそれに気づいたみたいだ。その事を雄二に話したら

「…これは良い意味で予想外だな。やはり計画をーー」

顎に手を当てて何やら考え込んでいる雄二。そういうえば雄二は宣戦布告の前に召喚獣操作の有効性について皆に説明していたな。てっきり雄二も明久から聞いたのかと思ったが、どうやらクラスの士気を上げるためのハッタリだつたようだ。

…まあハッタリじゃなくなつた訳だが？

「——よし。一輝、南雲。協力して欲しいことについてなんだが、いいか？」

職員室へと歩く俺達。雄二の提案、それはクラス間ではなくクラス内で行う、『模擬試召戦争』だつた。そのため雄二は自分より教師の信用を得ているだろう俺達に立会人となってくれる教師を一人見つけて説得して欲しいのだろう。

「失礼します」

職員室に入つて周りを見渡す。しかし…

「高橋先生はいないか…。全教科のフィールドを展開できる人にお願いしたかったんだけどな」

「となると馴染みのある先生方…：西村先生もいませんね」

今職員室にいるのは知らない先生方ばかり。去年から世話になつてゐる先生方の姿はない。正直知り合いではない先生方にこの話をするのは気がひける。模擬試召戦争は昼に行う予定なので急ぐ必要はないし、高橋先生ならHR後にでもAクラスに行けばいるだろうと判断し、職員室を出ようとしたら

「君達、なにか用事かい？」

職員室にいる教師の一人がこちらにやつてきた。見た感じ二十代後半から三十代前半くらいの若い男性教師だつた。職員室に来て何もしない俺達が気になつたのだろう。

「一輝、どうします？」

この人に話を持ちかけるかどうか、瑠璃花は俺に一任する気みたいだ。まあ向こうから声をかけてくれたのだ。ダメ元で話してみよう。

「先生、実は——」

「ほう……クラス内での試召戦争、面白そうじやないか」

断られる覚悟で話した結果、あっさりOKが出た。

「あのー、そんな簡単に了承していいんですか？ 確か試召戦争は原則としてクラス対抗戦だけですよね？」

瑠璃花が確認をとる。実をいうと俺達がやろうとしているのは試験召喚戦争の規則に反しているのだ。だからあまり馴染みのない教師にこの話を持ちかけることに対する抵抗があつた。しかしこうもあつさりOKができるとは…

「もちろん、学園長に確認しなきゃいけないけど問題は無いと思うよ。そもそも試験召喚システムは生徒の学習意欲向上を目的としているからね。結果的にその目的を果たせるなら多少の例外くらい認めるんじやないか？」

学園長自身、試召戦争は大歓迎みたいだしね……と、最後に付け加える男性教師。

「じゃあ、昼休み終了後に立ち会つてもらいたいんですけど…かまいませんか？」

「俺でいいなら喜んで。学園長もそろそろ見えるだろうし、今の話について一緒に確認しに行こう」

男性教師は職員室を出て学園長室へと歩く。俺達もその後ろをついていく。

「ありがとうございます、えーっと……」

礼を言つた後でこの人の名前を聞いてないことに気づいた。

「ははは、去年は一年生だった君達とあまり関わつてないから知らないか」

苦笑する男性教師は歩くのをやめて俺の方に向き直り、手を差し伸べる。

「数学と保健体育を担当している、そして今年から二年Aクラスの副担任を務めることになつた暁 司（あかつき つかさ）だ。よろしく、
小波一輝君」

模擬試召戦争

暁視点

昼休みが終わり、各クラスで午後の授業が行われている中、二年Fクラスだけ別の催しが行われていた。それは：

「くたばれ吉井つ！」

「地獄に落ちろ小波い！」

そう、今ここで行われているのはFクラス内の模擬試召戦争である。Fクラスの教室全域に張られた召喚フィールドの中で複数の召喚獣がたつた二人の召喚獣に敵意（殺意？）丸出しで襲いかかっていた。

一方、敵意を向けられている二人の召喚獣はそれらの攻撃を難なく避けては的確に一撃を与えていた。そして：

【数学】

Fクラス	小波一輝	188点
VS		
Fクラス	須川亮	D E A D
Fクラス	横溝浩二	D E A D
Fクラス	吉井明久	141点

Fクラス	福村幸平	D E A D
Fクラス	有働住吉	D E A D

「戦死者は補習〜！」

「なんだとつ！ 模擬試召戦争でも鉄人の補習があるのか！？」

「嫌だ～助けてくれええっ！」

本来試召戦争には多くの教師が立ち合い、それにより他クラスの授業は基本的に自習となる。だが今回はクラス内の戦争で立ち会いの教師は俺は一人だ。他のクラスは通常通り授業を行っている。

補習担当教師である西村先生も試召戦争とはいえ模擬である以上、戦死した生徒を補習室に連行する必要はない筈だ。それでも須川達四人を苦もなく担いで教室を出ていく西村先生を目の当たりにした俺は

「西村先生、あなた暇なんですか？」

と、本人に聞こえない声で軽いツツコミをいれる。知らない仲ではないとはいえ年齢的にもキヤリア的にも先輩にあたる人に対しても堂々と舐めた口は聞かないのだ。それにしても…

「ぎやあああつ!!」

「補習は嫌だあああつ!!」

戦死した生徒が次々と運ばれていく。

この模擬試召戦争のルールを簡単に説明すると

一、二人一組のチーム戦。

二、残り一人になるか五時間目の授業終了のチャイムが鳴った時点で終戦。

…とはいえるのルールに関してはまるで意味を成していない。戦争前に予めペア決めは済ませたらしいが、味方が戦死してぼつちになつた者同士で組んだり、利害の不一致でペア同士で仲間割れを起こしたりしている者がほとんどだ。

要するに最初のペアがどうであれ最終的に一人になれば終戦だな。

それにしてもこの状況は坂本君の計画か？

「吉井！ 貴様を倒して南雲さんとペアになるのは俺だあ!!」

「小波い！ 僕と木下秀吉の恋物語スタートの為にもここでくたばつてくれやあああっ！」

男子二人の叫びを聞いて判ると思うが吉井君は南雲さんと、小波君は木下君とペアを組んでいる。一部を除くFクラス男子達は数少ない女子とペアを組めた一輝と明久に嫉妬している。実際戦争開始からあの二人が集中的に狙われ続けている。

戦争開始からわずか十五分で一クラスの半分以上が戦死している。何も知らない人は話を聞いて驚くだろうが、全てを知っている俺は溜め息をついて呆れるだけだった。

「思春期男子の嫉妬とは恐ろしいものだな」

そんな可愛らしい連中ではないだろうが、とりあえずそう思うことにした。

一輝視点

「やつと落ち着ける…」

敵意むき出しで襲い掛かつてきた四十人のバカ共を戦死させた俺

と明久は声を揃えてその場に腰をおろす。そして俺は一息ついた後で、事の元凶を睨み付ける。

「雄二、お前とんでもないことをしてくれたな」

「そうだよ！ 僕と一輝のペアを女子にすれば皆が暴走する事くらいわかつてたでしょ!?」

「待つのじや明久よ！ ワシは男じやぞ！」

「何いってるのさ秀吉！ 秀吉以上の美少女が男のはずないじやないか！」

明久と秀吉がいつも通りの会話をする中、雄二はうしろめたげに口を開く。

「正直悪かつたと思つてる。連中のモチベーションを上げるために仕方がなかつたんだ。すまん」

雄二の心からの謝罪。そんなすんなり頭を下げられたら文句の一つも言えない。

「はあ…わかってる。俺も本気で怒つてる訳じゃないさ」

のんびりやるよりはマシだらうしな。と付け足す。

「てかこの組み合わせはなんだ？ チームワークを考えるなら俺は明久か瑠璃花じやないのか？」

「それに関してはテストの点数と操作性だな。一輝と明久は操作に慣れてるから、まだ操作に慣れてないかつ今後前線に出す予定の秀吉と南雲二人と組ませた。で、お前と南雲、明久と秀吉の組み合わせなら練習せずとも連携は取れるだろうから結果この形になつた」

雄二の説明で納得した。俺も戦争中ずっと瑠璃花のそばにいる訳じやないし状況によつては秀吉やムツツリーニと組むこともあるし。

「むう…一輝とペアになつたはいいのじやが、誰とも戦えなかつたのじや」

「私も、吉井君のサポートすら出来ませんでしたね」

残念そうに呟く秀吉と瑠璃花。そんな中、雄二とムツツリーニが俺のそばにいる召喚獣に注目する。

「にしても一輝の召喚獣はやつぱりつて感じだな」

「……ピツタリ」

「おいおい、いきなりなんだよお前ら」

「言いたいことはわかるけどさ…。

「僕もそう思うよ。だつて一輝の召喚獣はまるでーー」「南雲（さん）！」姫路さんに島田さん？ どうしたの？」

突然瑠璃花を呼ぶ声が。振り向くとそこには姫路と島田がいた。ああ、そういうえばこの二人はペアだつたな。点数的に見てバランスは取れてるな。

「ウチと勝負して！」

「私と戦つてください！」

俺と明久の次は瑠璃花か…。姫路は知らないが島田の方は恐らく瑠璃花を倒して明久と組む気かな？

「私ですか？ まあ…別にかまいませんよ」

「南雲さんが戦うならペアの僕もーー」

「吉井君は休んでてください。ここは私一人で十分です」

立ち上がるうとする明久に休むよう促す瑠璃花。

「後悔しても知らないわよ、瑞希！」

「はい！」

「「試験召喚（サモン）！」」

女子三人の間に三つの魔方陣が現れ、そこからそれぞれの召喚獣が現れる。

島田の召喚獣は青の軍服にサーベルを、姫路は西洋鎧に両手剣を装備している。そして

「ほう……南雲の召喚獣はナース姿じゃのう」「…………ナース服（ブシャアアアツ！）」

瑠璃花の召喚獣は背中に小さな羽の付いたナース服に巨大な注射器を装備している。まさに白衣の天使だ。そしてムツツリーニよ、一体何を想像した?

〔数学〕

V S	F クラス	南雲 瑠璃花	301点
	F クラス	島田 美波	179点
	F クラス	姫路 瑞希	463点

「喰らいなさい！」

突貫した島田の召喚獣がサーベルをブンブン振り回すが瑠璃花の召喚獣には一発も当たらない。

「なんで当たらないのよ!?」

「召喚獣の操作が雑なんですよ」

「くつこうなつたら…瑞希！」

「わかりました。…えいっ！」

島田の合図で姫路の召喚獣に付いている腕輪が光出し、熱線が放たれる。四百点以上の召喚獣が持つ腕輪の力が瑠璃花を襲うが

「甘いです」

体制も崩されていない状態で一直線に走る光線が当たる筈もなく、瑠璃花の召喚獣は難なく回避し、そのまま姫路の召喚獣の心臓に注射器を突き刺した。

「そんな!?」

「嘘つ!? 瑞希がーー 「余所見してていいんですか?」 しまった!」

動搖した島田の隙を逃さず、両手で注射器を振り回し、島田の召喚獣の体を一閃した。

【数学】

Fクラス 南雲瑠璃花 301点

V S

Fクラス 島田美波 D E A D

Fクラス 姫路瑞希 D E A D

勝負が決まった瞬間、教室の隅にある掃除用具入れのロツカーモードが突然開き

「戦死者は補習〜!!」

「いやああああああつ!!」

何故かロツカ―から飛び出してきた西村先生によつて姫路と島田は連れていかれた。

「……いつからあそこにいたんだ？」

「それより鉄人のあの巨体がロツカ―に納まつたのか？」

「そりいえば以前ミカン箱から飛び出してきたことがあつたような

⋮

「…………何故ミカン箱から」

「エスペー〇東を越えておるのう」

その光景にしばらくの間啞然とする俺達だった。

雄二視点

模擬試召戦争も終わつて今は放課後。俺は教室で今日の結果について考えていた。

「おう雄二、まだ帰つてなかつたのか？」

「一輝か。そういうお前はーーつて聞くまでもないか」

基本的に南雲の部活が終わるまでは学校に残つてゐるからなコイツは。

「瑠璃花を待つてゐるものもあるが、模擬試召戦争に立ち会つてくれた暁先生に礼を言いに行つてたんだよ」

「おお…そ、うか。そ、れはそ、うと一輝、今、日はいろいろと助かっ、た。お、前のお陰で計画がまとまつた」

あの後、終戦まで召喚獣を動かしたおかげで俺達主要メンバーの召喚獣の操作性は文句なしに上昇した。秀吉やムツツリーニが得意科目以外で戦えるようになるのは正直嬉しい。

：ただ、姫路と島田にも召喚獣の操作に徹して欲しかったがな。

「ほう…じやあ明日にはAクラスに挑む氣か？」

「いや、流石にあともう一戦ちゃんとした試召戦争をやつておきたい。経験は積むに越したことはないからな」

「じゃあ予定通りBクラス戦？」

俺は首を横にふる。

「召喚獣の戦いが点数で決まる訳じゃないとわかつたからな。模擬試召戦争同様、クラス全員に操作性を磨いてもらう為にランクを一つ下げる」

「それってつまり？」

これだけ言えば分かるだろう。ある程度予想がついてだろうがそれでも確認する一輝に肯定の意思を示すために頷き口を開く。

「そ、うだ。明、日は挑、むのは

Cクラスだ」

一方その頃

「凄い、ウチこんなに美味しいクッキー初めて食べたわっ！」

「苦労したんですよ。彼が美味しいって言ってくれるまで何度も挑戦して…」

「南雲さんつ、ここまで美味しく作れるコツとかないんですかっ!?」

家庭科室でFクラス女子三人が親睦を深めていたりする。

Cクラス

明久視点

「我々FクラスはCクラスに對して試召戦争を仕掛ける（のじや）！」

朝のHRを終えた僕はDクラスの時と同様秀吉を連れてCクラスの教室に來ていた。理由はもちろん宣戦布告の為。

「えつと……わかつたわ、宣戦布告を受け入れる。どうせこつちは：拒否出来ないし」

僕達の前に立つのはCクラスの代表を名乗る小山 夕香（こやま ゆうか）さん。クールビューティーという表現が似合う女子生徒なんだけど…どうしたんだろう、喋り方がぎこちない。

…そして何故だ？ 彼女だけじゃない、Cクラスの皆が憐れむような目で僕を見ているような気がする。

「ありがとうございます小山さん。開戦は午後からでいい？」

「え、ええ良いわ。…それより吉井君だつけ？ 一つ聞いていい？」

「うん。なにかな？」

未だにぎこちない喋り方の小山さん。一体何を気にしているのか。それを聞くためにも話を聞こう。

「なんで貴方達はセーラー服を着ているの？」

「…………」

言つた。僕がひたすら目を背けていた現実を小山さんが包み隠さずに言つた。分かっていたさ。さつきから感じる憐れみの視線がそ

ういうことだつてことはつ…！

「ははは。宣戦布告の使者つて大抵酷い目に遭うでしょ？ 実際Dクラスの時にボロボロにされてさ。何か対策はないかクラスの皆さんに聞いたらこれなら襲われないだろうつて無理矢理着せられて」

「だからつて女装はないでしょ。よくそれを着て宣戦布告にいこうと思つたわね」

「…確かに。今でも周囲からの憐れむような視線が突き刺さるんだ。そしてその度に大切な何かを失つていく気がしてさ…」

床に座り込む僕の肩に手を置いて元気付けてくれる秀吉。

「明久、気をしつかり持つのじや。男子たるもの、一生に一度は女装をするものじやぞ」

「そんな現実僕は認めないつ！ お願い見ないでつ！ こんな汚れてしまつた僕を見ないでつ！」

「おつ落ち着くのじや明久！ よそのクラスで暴れるでない！」

僕もうお嬢にいけないつ…！

「…なんか可哀想になつてきたわね。ねえ皆？ 彼は充分すぎるくらい傷ついてるし、これ以上酷いことするのはどうかと思うんだけど」

小山さんがCクラスの皆さんに問う。

『…だよな。流石にここまで追い詰められてる奴に追い討ちをかけるのは人としてどうかと…』

『宣戦布告に来た使者を痛めつけるのは絶対つてわけじやないしね』

『まあ、最終的な決定権は小山さんに委ねましょう』

Cクラスの面々で何やら話し合つてゐる。そして結論を出した小

山さんが僕達に歩み寄り

「吉井君。今の貴方の状況に免じて二人に危害は加えないわ」

「ホントに!?」

「ええ。開戦は午後からよね。お互い頑張りましょう」

小山さん：君はなんて優しい人なんだつ！　ここまで他人に優しくされたのは久しぶりな気がする。

小山視点

「失礼しました！」

セーラー服姿の男子二人（吉井君と木下君）が出ていった後、私はすぐに教室のドアを開けて顔半分を廊下に出す。そして吉井君達の姿が見えなくなつたのを確認してドアを閉めた。すると

「小山よ、ご苦労だつたな」

一人の女子が私に近づいてくる。その人は私を含む他の生徒のようないい黒のブレザーを着ていない。

彼女が着ているのは白のブレザー。それはつまり彼女が生徒会役員である事を表している。さらにいえば目の前にいる彼女は生徒会長でもある。

「いえ、私はあなたの言つた通りにしただけよ。…それより本当に大

丈夫なの？ 下手したらこれルール違反になるんじゃない？」

私は彼女に何度も目かられない確認をする。私達が試召戦争でやろうとしている事が事なのだ。正直不安でしかない。

「気持ちはわかるがそう不安になるな。FクラスとはいえAクラスレベルが二人もいる以上正攻法では勝てないからこそその策だ。念のため先生方にも確認をとつたから反則にはならないさ。それに先程の二人、吉井と木下は小山と話をして何の違和感も感じていなかつただろう？」

「それは確かに……きやつ」

「ほらほら、ウチらの会長を信じなアカンで！」

後ろから両肩を掴まれて思わず悲鳴をあげてしまう。にしきつといタズラな笑みを浮かべて肩を掴んできたのは可愛らしい顔に似合わず高身長の女子生徒だ。白のブレザーを着ている。

「私達は会長を信じて戦うだけよ」

さらに一人、高圧的な雰囲気を放つ眼鏡の女子生徒もこちらにやって来た。彼女も白のブレザーを着ている。

「…そうね、宣戦布告の使者に嘘をついた以上もう後戻りは出来ない。こうなつたら会長の作戦を実行するだけよつ！」

もう覚悟を決めたわ！ やつてやろうじゃない！

「その意気やで」

「よく言つたわ」

「うむ。小山の決意を無駄にしないためにも、私も最善を尽くそう。皆、この戦争絶対に勝つぞ！」

「「おおーーっ!!」」

会長がクラスの士気をあげる。一昨日Fクラスがクラス分け早々戦争を起こした時は驚いた。Dクラスが攻め込まれた以上今度はCクラスも狙われるかも知れないと警戒していた。しかも向こうにはAクラスレベルが二人もいる。負ける可能性が出てきた。だけど

「小山、私が合図したら例の作戦を実行してくれ。向こうの主力を一人必ず討ち取つて見せる」

「ええ、私は会長を信じるわ」

幸運にも今年のCクラスには生徒会役員が三人もいる。負けるはずがないわ!

Cクラス戦（1）

昼休み終了の鐘がなる。それはつまりFクラス対Cクラスの試験開始の合図でもあつた。

「始まりましたね。一輝、そろそろ教室に戻らないと…」「ゴクゴク……だな。雄二には遅くなるつて伝えたけど、それでもクラスの命運がかかってる以上早く戻らないとな。小野さん、ご馳走さま」

場所は一階の売店。昼休みは瑠璃花と二人で小野さんの仕事を手伝っていた。それを終えて小野さんからお茶と菓子を貰つて一息ついていたのだ。

「はい。二人共、頑張つてね！」

ファイトつ、と二人分のコップを受け取つた小野さんの応援の言葉。天使の笑顔でそれを言われては負けるわけにはいかないと学園の男子なら誰もが思うだろう。

「一輝。鼻の下…伸びてい・ま・す・よ？」
「おつと悪い。…よし、行くぞ」

若干声のトーンを落とす瑠璃花に畏縮し、気を引き締めて俺達は売店を後にした。

「…………ばか」

後ろをついてくる瑠璃花の呟きは聞こえなかつた。

「すまない雄二、遅くなつた」

「一輝と南雲か、『試召戦争開始時に教室で待機』なんてルールはないから別に構わない。今回お前たち二人は中堅部隊だからな。教室で待機してくれ」

教室に戻った俺達に教卓にいた雄二是問題なしと判断。お咎めはないらしい。まあまだ始まつて間もないし、遅くなるとは予め伝えてはいたけど。

「で、状況は？」

「今のところCクラスに怪しい動きはない。先攻部隊のメンバーに姫路を投入して秀吉と明久を中心にしているからそう簡単には崩れないとだろう」

いきなり姫路を使うのか。それに明久と昨日の模擬試召戦争で操作性が上がった秀吉も……もしかすると善戦するんじやないか？

「…………戻つた」

教室の扉が開いたと思つたらいつのまにか教卓にいる雄二の隣に現れたムツツリーニ（忍者）。恐らく現状報告かな？

「ムツツリーニ、現場はどんな感じだつた？」

「…………先攻部隊は渡り廊下でCクラスと交戦。ファイールドの科目が数学。姫路の腕輪の力での場にいたCクラスの生徒の殆どが戦

死した」

：全員開いた口が塞がらないでいた。俺も同じだ。善戦すると思っていたけどここまでとは。

ピンポンパンボーン

と教室のスピーカーから音が鳴る。こんな時に放送か？

『二年Fクラスの皆さん。Cクラス代表がたつた一人屋上で貴方達を待っています。勝つ自信があるならば屋上まで来てください。繰り返します——』

女子生徒（おそらくCクラス）の放送の内容に耳を疑つた。雄二も俺と同じリアクションをしているため、俺の聞き間違いではない。

「……雄二、どう思う？」

「わざわざ逃げ場の無い屋上に自分から足を運ぶか？ どう考えても罠だろ」

「しかし罠だとしても一人で屋上にいるなんて放送をかける理由はなんだ？」一人：は嘘だとしても屋上になにかあるかもしけれない

「本当に代表がいたとしてCクラス代表の小山……だつたか？ Fクラス全員で屋上に突撃したとしてアイツに姫路や南雲のいる俺達をどうにか出来るのは思えないんだがな」

そうなるよな。なら小山の狙いはなんだろうか？

「じゃあさ、本当か罠か、二つの可能性を想定して動いてみようか？」
「ん？ 何か案があるのか？」

「俺と瑠璃花で屋上に行く。本当に小山がいるなら決着をつけられるし、無難に屋上に閉じ込める類いの罠だつたら犠牲は二人で済むだろう？」

「……お前ら二人を失うのはキツいがあれも良い。中堅部隊の連中を連れ

て一度先攻部隊と合流してから屋上に行つてくれ

「了解。行くぞ瑠璃花」

「はい」

瑠璃花と中堅部隊のメンバーを引き連れて教室を出た。

「一輝！」

渡り廊下を越えて新校舎。Cクラスも目と鼻の先の場所で明久達と合流した。明久が俺に向かつて手を振ると。近くにいた秀吉と島田も俺達に気付く。

「三人とも。第一陣お疲れさん」

「あはは、すごく大変だつたよ」

「まつたくじや。Dクラスより点数が高い上に連中やけに連携がとれておつたからの。昨日の模擬試召戦争がなければ戦死しておつた」

秀吉がそこまで言うとはな…。すると瑠璃花があることに気付く。

「皆さん、姫路さんはどこです？」

あ、ホントだ。姫路がいない。

「そういうえばいないな。島田、姫路はどこにいるんだ？」
「えつと…瑞希はさつきの放送を聞いて屋上に行つたわ」

なん……だと？

「他に行つた奴は？」

「瑞希だけ。この戦争に決着（けり）をつけるつて」

マジか。まあ俺と瑠璃花が実験台になるつもりだつたしそれならそれで。

「だつたら戦争はもうすぐ終わりかな？」

「そうだね。小山さんには悪いけど一人で姫路さんに勝てるとは思えな「残念だけど姫路さんは負けるわ」えつ!？」

明久の言葉が遮られ、俺達はCクラスの方へと顔を向ける。ガラツと教室の扉が開きそこから廊下に出てきたのは

「小山…さん？ なんでここにいるの？」

明久は目の前にいる女子、小山夕香に問いかける。すると小山はイタズラが成功した子供のように

「ごめんね吉井君。実は私、あなたに嘘ついてたの」「嘘？ さつきの放送の事？」

「いや明久、小山の嘘は多分それじやない」

明久の思つてている小山の嘘は屋上にいるという放送だろう。しかしそつちじやない。小山が明久に嘘をついたのはもつと前。

「え…、それつてどういう「小山は代表やあらへんつちゅうことや」誰つ？」

渡り廊下のそばにある階段からぞろぞろとこちらにやつてくるCクラスの面々。関西弁を喋ったのは異様に背の高く白いブレザーの女子だ。アイツは：

「生徒会役員がなんでここに？」

「それはもちろんウチもCクラスやから」

「私も忘れないで欲しいわ」

もう一人、眼鏡をかけた白ブレザーの威圧感ある女子がCクラスの教室から出てきて小山の隣に立つ。

「二年Cクラス、生徒会庶務の大江 和那（おおえ かずな）や。よろしく」

「同じく二年Cクラス、生徒会書記の浜野 朱里（はまの あかり）よ。わかつたらさっさとやられなさい」

高身長の女子が大江和那、眼鏡の女子が浜野朱里と言うらしい。そんな中で俺は口を開く。

「生徒会役員が二人もいるとはな。……で？ 小山が代表じゃないなら誰がCクラスの代表なんだ？」

俺の問いに小山はクスクスと笑つて答えた。

「生徒会長よ♪」

第三者視点

姫路瑞希は決して油断も慢心もしていなかつた。Dクラス戦では戦場に立てず、前日の模擬試召戦争はロクに戦えないまま戦死した。模擬試召戦争の目的は操作性の向上だと事前に聞かされていたにも関わらずそれを忘れてしまい、せつかく一輝が教師にお願いして作つて貰つた機会を棒に振つてしまつた。

だからこそCクラス戦は皆の役に立とうと前線に立ち、開始から三十分も経たない内に十人以上を戦死させた。

そこでCクラス代表が屋上で自分達を待つてているという放送だ。クラスの役に立ちたい、その思いが突つ走り彼女は明久や秀吉、美波の制止も聞かず一人で屋上に向かつた。その結果：

「そ、そんなつ…!?

彼女の召喚獣の首が飛ばされたのだ。当然三百点以上あつた召喚獣の持ち点は無くなり戦死となつた。

「姫路瑞希よ、お前は確かに強かつた。だが——」

腕を組ながらゆつくりと歩み寄り、両手と両膝をついて茫然自失となつてゐる彼女を堂々とした態度で見下ろすのは

【世界史】

Cクラス 神条紫杏 483点

V S

Fクラス 姫路瑞希 D E A D

「——私には及ばない」

文月学園生徒会長、神条 紫杏（しんじょう しあん）であった。

Cクラス戦（2）

第三者視点

文月学園で一番名前の通つている生徒は誰か？ それを問われれば一人の生徒が挙げられる。

毎年二学期に行われる生徒会選挙。本来ならば来年三年生になる二年生の中から選ばれるのが通例である。しかし、去年の生徒会選挙では異例の事態が発生した。

そう。学園初、一年生の生徒会長が誕生したのだ。他の候補者達を押し退けて最多票を勝ち取り全校生徒のトップに君臨した女子生徒。それこそが現二年Cクラス代表、神条紫杏である。

一輝視点

Cクラス教室の前で敵の挟み撃ちにあつた俺達は英語の召喚フィールドの中で大乱闘を繰り広げていた。

「ハアツ！」

蛮族（正確にはインディアン）のような格好をした大江の召喚獣が繰り出す槍の連続突きをかわしていく。一瞬も気が抜けない為に避ける事に集中し過ぎると

「隙あり！」

「くらえつ！」

他のCクラス生徒の奇襲を受けてしまいそうになる。俺は左右から攻撃を後ろに下がることで回避し、同時に大江の召喚獣とも距離を取る。

【英語】

Fクラス 小波一輝 91点
VS

Cクラス 大江和那 122点

：不味いな。大人数を相手に徐々に点数を削られていくこちらに対しても向こうは連携がとれている。特に大江って奴はやけに操作慣れしていやがる。

アソツを先に倒すべきなんだが向こうの武器は槍だ。迂闊に近付くことは出来ない。

「戦死者は補習〜！」

「ぎやああ〜！」

そうこうしている間に味方は減る一方だ。俺はCクラス連中の攻撃をかわしながらもチラつと仲間達を見る。瑠璃花と島田は小山を含むCクラス数人に囲まれているが、互いを護るように背中合わせで戦っている。

明久と秀吉は少し離れた所でCクラス数人と

【英語】

Fクラス	吉井明久	86点
Fクラス	木下秀吉	34点
VS		

Cクラス 浜野朱里 415点

四百点越えの浜野の召喚獣（迷彩服と両手にナイフ）と戦っていた。
⋮マジかよ、まさかの腕輪持ちだと!?

「きやああつ！」

「島田さん！」

悲鳴に振り向くと、いつの間にか俺から離れていた大江の召喚獣の槍が島田の召喚獣を貫いていた。

「秀吉！」

「ぐぬつ…！」

別の場所でも浜野の召喚獣が投げたナイフが秀吉の召喚獣の頭に突き刺さる。

【英語】

Fクラス 島田美波 D E A D

Fクラス 木下秀吉 D E A D

「戦死者は補習〜!!」

「皆の者、すまぬ」

「ごめんっ」

秀吉と島田が戦死した。気がつけばこの場にいるFクラスは俺、明久、瑠璃花の三人だけになっていた。その時Cクラス男子が走つてこちらにやってくる。

「みんな聞け！ 我らが生徒会長がFクラス姫路を討伐したぞーっ！」

オオオオオオッ!! というCクラス全員の喜びの声。既に勝ちは決まつたと言つてゐるような向こうの勝鬪に似た叫びに対し、俺達Fクラスの三人は絶望の窮地に立たされた。

「そんな…姫路さんが…」

「明久…」

「……」

明久はショックを隠せないでいる。俺も似たようなものか、姫路が負ける可能性は想定していたが正直起こりえないと思つていたからな。瑠璃花は何も言わないが、悔しそうにしている。

「これで勝負は決まつたも同然やな」

「人数も戦力もCクラスが優勢。この状況が覆ることはないわ」

大江と浜野がこちらにやつてくる。召喚獣は武器を構えているため油断も隙もない。小山が二人の前に立ち

「アンタ達は既に召喚獣を呼び出している。フィールドの外に逃げようものならどうなるか判つていてるわよね?」

敵前逃亡による戦死扱い。つまりこの状況を開拓するにはたつた三人で十人以上いるCクラス連中を倒さなければならない。昨日俺と明久は暴走したバカ共（Fクラス男子）四十人を倒したが、だからといって勝てる可能性はほぼ皆無と言つていい。

連携がとれているのもそなだが召喚獣の操作に慣れている大江。そして腕輪持ちの浜野。まだその力が未知数である以上このまま戦えば間違ひなく全滅する。万事休すかつ…!

「さあ、大人しくやられーー」

一瞬何が起こつたのか、全員が理解出来ないでいた。何故なら、英語の召喚フィールドが消滅し、その結果この場にいた全ての召喚獣が消滅したのだ。

「どういうこと?!」

「これは一体…」

周りが狼狽えている中で、偶然俺の視界の端にある人物の姿が映つた。旧校舎側の廊下へ振り向くとそこには忍者の格好をしたクラスメートと、最近知り合つた数学兼体育教師が。

「明久、瑠璃花、走れっ！」

「えっ!? 一輝、一体どういう…」

「あとで話す！ 今は逃げるぞ！」

そうして俺、明久、瑠璃花はCクラス連中を搔い潜り、旧校舎へと走り出す。

「あ、待ちなさい！」

小山が叫ぶ。敵に待てと言わされて待つ奴はない！

Cクラス戦（3）

Cクラスの包囲網を切り抜け命からがら逃げ延びた俺達はFクラスにて雄二に状況を報告した。

「…そうか、秀吉や島田だけじゃなく姫路まで敗けたのか」

独り言のように告げると窓に背中を預けて頭を抱える雄二。今のFクラスの現状を考えれば無理もないだろう。

Fクラスは先攻部隊に十五人、中堅部隊に十人を投入して生きて戻ってきたのはたったの三人。対するCクラスは姫路が十一人を戦死させ、先程の乱戦ではどさくさに紛れて三人しか倒せていない。つまり今Fクラス二十七人、Cクラス三十六人。点数差だけでなく人数差も不利という最悪な状況である。

打開策を考えている中、明久が近づいてくる。

「ねえ一輝。さつきの召喚獣が消えた事なんだけど、あれって結局なんだつたの？」

「…ああ、それはーー」

俺は廊下側の壁に背中を預けている人物の方に顔を向ける。

「暁先生があの場所で新たな召喚フィールドを展開したからだ」「フィールドを展開つて……あつ」

「気づいたか。二つ以上のフィールドを近い場所で展開するとフィールドが干渉して消滅するんだ。もちろん召喚獣も消える。暁先生があの場所でフィールドを展開すれば当然そうなる」

正直全滅を覚悟していた。明久は窮地を救ってくれた暁先生に礼を言うが先生は首を左右にふつて今まで黙っていた口を開く。

「それに関するては土屋君に礼を言うんだ。俺をあの場所に連れてきたのも、フィールドを開拓するよう指示したのも彼だ。」

そうだ、すべてはムツツリーニが機転を利かせたおかげだ。

「ありがとうムツツリーニ」

「…………（コクツ）」

明久の感謝に頷くだけのムツツリーニ。無表情の為照れてるのかどうかわからない。

「さて雄二、いつまでもこうしてるわけにはいかないんじゃないかな？」
戦況を見ればCクラス連中はいつこそこそ攻めにきてもおかしくはないんだから」

「…ああ、わかっている」

万全とはいえないがある程度復活した雄二がこちらにやつてくる。

「…にしてもCクラス代表が小山じやなく神条紫杏だつたとはな」「皆ごめん。小山さんが代表だつて嘘を僕があつさり信じたから」

明久が頭を下げる。確かに屋上にいる代表が小山なら姫路一人でどうにかなるだろうと、加勢に行くことはしなかつた。…どちらにせよ姫路の独断専行であるに変わりはないけど。

「明久だけが悪い訳じゃねえ。宣戦布告から開戦までの間に調べる時間はいくらでもあつたんだ。にも関わらずそれを怠つた。序盤に姫路で向こうの人数を減らして後半は力押しでどうにかなると、戦う前から勝つたつもりでいた…」

「向こうは俺達の対策をしつかり立てていたな。あの連携は打ち合わせもせずに出来るものじやない。それに腕輪持ちの為に英語の教師

を既に呼んでいた。出来る限りの人数を新校舎に誘い込んで挟み撃ちにし、確実に潰す作戦だな」

俺としては浜野朱里の腕輪がどんなものかを知りたかったが、深追いするわけにもいかなかつたし。

「誘い込むつて…それつて姫路さんが倒した十人はわざと負けたような言い方だよね？」

「どちらにしろあの生徒会長を倒さなきゃFクラスに勝ちはないんだ。暁先生、Cクラス代表の位置を知りたいんですけど」

時間が無い為、明久の質問は軽く流して暁先生から情報を貰おう。先生はポケットから端末を取り出して画面を覗く。

「Cクラス代表は今も屋上にいるな。世界史の先生も一緒だ

「えつ…まだ屋上にいるの？ 一人で？」

「ああ、戦争開始からずっと屋上にいる。一人かどうかは知らんが」

ああ、各クラスの代表の居場所しかわからないんだつけ？ それより立ち会いの教師は世界史なのか。なら…

「明久、お前歴史系得意だつたよな？ 世界史の点数はどれくらいある？」

「急にどうしたの？ …世界史は確か三百点くらいは取れてたよ」「三百点か…。黙つていたが俺は世界史で腕輪を持つてる」

俺の放つた一言でこの場にいた全員（瑠璃花以外）が一斉に俺を見る。一番反応したのは雄二だ。

「それは本当か一輝!?」

「ああ。明久が腕輪を持つてたなら操作性の高い明久に頼んだが、そ

れなら神条紫杏とは俺が戦う。向こうの土俵に乗つてやるよ」「

主力である姫路が戦死し、予想外の強敵の存在により絶望の淵に立たされたFクラスに勝利の可能性、活路への希望が出てきた事で沈んでいた連中の表情が明るくなる。その時

ばんつ（教室の扉が開く音）

「盛り上がりつとるところ失礼するでー」

背の高い女子、大江が教室にやつてきた。皆が彼女に注目している
中俺はムツツリーニに合図を送り…

「Fクラス代表の坂本はアンタやな？ その首貫いに来たで

「お前が大江和那か。聞いた通り（身長が）デカいな」

「なつ：レディに向かつてそれはあれへんやろ。エツチ！ スケベ！
ド変態！」

「ちよつと待て、今のは背が高いって意味のデカいだ。おいコラ！
両手で胸を隠すような仕草はやめろ！ 誤解されるだろうが！」

あれ、なんか勝手に盛り上がりつてくれている。こつちとしては有難い。…よし、作戦は皆（雄二以外）に行き届いたな。ならば

「行動開始つ！」

一輝の合図で俺、雄二、近衛部隊の六人を残して他は一斉に走り出す。大江が一つの出入口の前に立っているため一輝達は後ろ側の扉から教室を出ていく。

「あつ……ちよ待 「…………Fクラス土屋、大江に挑む」なつ!?」
「承認する」

一輝達を追いかけようとする大江に俺は戦いを挑む。暁先生が召喚フィールドを展開する。これでこの女は逃げられない。

「…………近衛部隊は雄二を守れ。この女は俺が倒す」

「「了解!」」

「ウチを倒すとか中々デカい事言うやん。えーよ、その挑戦受けたるわ!」

「(…………) 試獣召喚 (サモン) !」

起動ワードによつて俺達の召喚獣が姿を現す。俺の召喚獣の装備は忍者装束に小太刀の二刀流だ。
相手の武器は槍。さらに奴は召喚獣の操作に慣れている。だがこのフィールドは

【保健体育】

Fクラス 土屋康太 511点

V S

Aクラス 大江和那 209点

俺の独壇場だ。

「うそっ!? なんやねんその点数!?」

俺の点数を見て驚きの声をあげる大江和那。言つておくがお前の点数もCクラスにしては高い方だぞ。

「…………いくぞ、加速」

一撃で決める為に腕輪を発動させる。目にも止まらない速さで大江の召喚獣に接近して小太刀で一閃する。

「…………なんだと!?」

キインツという音が響く。

「あつぶな！ いきなりやつたからほんまビックリしたわ！」

小太刀は大江の召喚獣の体に触ることは無かつた。奴の槍によつて弾かれたからだ。バカな！ あの攻撃を防いだというのか？

「いや、間一髪やつたわ。ほな、次はウチから行くで！」

槍を構えた大江の召喚獣が突っ込んでくる。

その後、俺の加速と大江の反射神経よつて繰り広げられる攻防は終戦まで続くことになるのだった。

Cクラス戦（4）

明久視点

教室を出た僕達はさつそくCクラス連中に囲まれた。しかし立ち止まる訳にはいかない！

『Fクラス近藤、挑む！』

『Fクラス武藤、勝負を挑む』

『Fクラス原田、そこのお前にーー』

Cクラス連中が迫つてくる度に近くにいる誰かが召喚獣勝負を仕掛けた。そうやつて少しづつ僕達は屋上を目指す。

姫路さんを倒した神条さんの力は未知数だ。彼女に勝つ可能性があるのは腕輪持ちの一輝とムツツリーニだけ。雄二の護衛にムツツリーニをつける以上戦えるのは一輝だけ。つまり：

一輝を屋上に連れていく事がFクラスの作戦、最後の希望だ！

『会長の下には行かせない！』

『Fクラス覚悟っ！』

試召戦争は基本的にどちらかの代表が戦死しなければ終わらない。神条さんがいる屋上に向かうだろ僕達を待ち伏せするCクラスの生徒は当然いる訳で。

『ここは俺が引き受ける！みんなは先に行つてくれ！』

また一人クラスメイトが敵に突っ込んでいく。皆の犠牲は無駄にはしないつ！

旧校舎から渡り廊下、新校舎、階段を上つて四階に到着する頃にはこの場にいるのは僕と一輝と南雲さんの三人だけになつていた。あ

とは階段を登るだけなんだけど…

「よくここまで辿り着いたわね」

小山さんと浜野さんを含めたCクラス四人が待ち伏せていた。そして側には英語の召喚フィールドを張っている遠藤先生がいた。苦戦は免れないのか…！

「一輝、ここは私と吉井君が引き受けます。貴方は屋上へ行つてください」

「瑠璃花…わかつた。明久、ここは任せたぞ」

南雲さんと僕に一言告げて屋上の階段を上る一輝。しかし相手がそれを許す筈もなく。

「会長のもとには行かせな「構わないわ。行かせなさい」浜野さん!」

小山さんが一輝を止めようと動くが浜野さんがそれを阻む。

『…屋上に来る者は通すよう会長に言われているのよ。上に立つ者として誰からの挑戦も受けるつて聞かなくて…』

『ああ…』

ため息をつく浜野さんとどこか納得してしまつている小山さん。会話の内容はあまり聞き取れなかつたが、どうやら向こうの事情みたいだ。

「すみません吉井君。巻き込んでしまつて」

「謝る必要はないよ南雲さん。これで僕達の目的は果たしたんだし」

あとは一輝の勝利を信じるだけだ。

「たつた二人であたし達四人に挑もうなんて……随分とナメた真似をしてくれるわね」

「「試獣召喚（サモン）！」」

【英語】

F クラス	吉井明久	105点
F クラス	南雲瑠璃花	237点
VS		
C クラス	小山夕香	164点
C クラス	新野すみれ	141点
C クラス	黒崎トオル	128点
C クラス	浜野朱里	415点

全員が召喚獣を呼び出す。そしてこの場で一番点数の高い浜野さんが僕の前に来る。

「三人は南雲さんと戦つて。あたしはこの男を潰すから」

僕に敵意を向ける浜野さん。：威圧感が半端ない。

「浜野さん、俺も一緒に戦うよ」

「男は嫌いなの。話しかけないでくれる？」ギロツ

「す、すいません！」

話しかけてきた男子（黒崎君）を睨み付ける浜野さん。そしてやつと理解した。彼女の高圧的な雰囲気は男嫌いによるものなんだ。清水さんに似ているけどどこか違うものを感じるは何故だ？

あ、いろいろ考えている内に南雲さんと小山さん達が既に戦い始めている。それじゃ僕も召喚獣に木刀を構えさせて浜野さんの相手をしよう。怖いけどっ！

一輝視点

扉を開けた俺の視界に映つたのは赤に近い茶髪のポニーテールに白いブレザーを着た女子生徒だ。彼女は屋上のフェンスに背中を預けて本を読んでいた。

凛としたその姿は芸術と言つてもよく、男子だけでなく女子すらも魅了するだろう。

学園一の美少女と称される知人（霧島翔子）といい勝負になるだろうその女子生徒は俺の存在に気づくと本を閉じて背中をフェンスから離す。

「待つっていたぞ、新たな挑戦者よ」

学園の頂きに君臨し、去年から様々な噂の絶えない生徒会長たる尊大な態度である。

「存じていると思うが、Cクラス代表の神条紫杏だ。よろしく」

「この学園で君を知らない人はいないだろ。Fクラスの小波一輝だ」「君の事も知つているぞ。『伝説のキャプテン』と呼ばれてるらしいな」

「……五年も前の話だよ」

もうキャプテンどころか野球少年でもないしな。それにしても

「本当に君一人しかいないんだな。よく姫路に勝てたものだ」「初戦の相手にしてはなかなかの強敵だつたぞ」

はつはつはつ、と笑いながら言われてもな…。しかしこの態度が彼女の強さの一つでもあるわけだ。

「さて、そろそろ始めようか？　あまり無駄話しているとウチの代表が殺られるかも知れないし」

「ふむ…戦争である以上このまま長話を続けるべきなのだが、私の都合上それでは意味がない。犬井先生、召喚許可を」「……承認する」

寡黙な男性教師の犬井先生。今までの会話を黙つて聞いていた男性教師は世界史のファイールドを開く。

「〔試験召喚（サモン）！〕

お互いの召喚獣が現れる。神条の召喚獣は

「…魔王？」

そんな感じである。赤いローブを羽織つており、右手に禍々しい大剣を持っている。それだけでファンタジー世界の魔王な感じを漂わせている。

「小波の召喚獣は意外だな。周りから伝説扱いされているからつつきり勇者的なものを予想していたが…」

そして神条は俺の召喚獣に対しての感想を述べる。

「まさかの野球選手か？　それにしてもそんなユニフォームを着てい

るプロ野球の球団なんてあつたか?」

赤と白の野球ユニフォームを身にまとい、右手に金属バットを持った俺の召喚獣。この姿はまさに

「プロ野球じゃない。これは俺がいた少年野球チーム、『ガンバーズ』のユニフォームだ」

小学生の頃の俺自身だ。

「ほう、それは懐かしいだろうな。学園長先生も粋な計らいをするではないか」

「そつちこそ。生徒会長が魔王様とはなかなかだと思うぞ」

「ははは、恐怖支配も上に立つ者の務めさ。するつもりはないがな。
……行くぞ!」

神条の召喚獣が禍々しい大剣を振り上げ、思いつ切り振り抜く。それによつて生まれた斬撃が俺の召喚獣目掛けて飛んできた。

【世界史】

Fクラス	小波一輝	407点
V S		
Cクラス	神条紫杏	483点

Cクラス戦（5）

俺は休みなく召喚獣を走らせ、飛んでくる斬撃を避け続ける。ちなみに俺の召喚獣に襲いかかってくるソレは神条の召喚獣の剣によつて繰り出されるものだ。

総合科目を除く各教科で四百点以上を取ると特殊能力を使える腕輪を手に出来る。腕輪の力は召喚獣の点数を消費する事で発動できるのだが

「神条、腕輪を使つているのになぜ召喚獣の点数が減つていないんだ？」

神条の召喚獣は何度もこちらに斬撃を放つているにも関わらず点数が減つていない。それに疑問を感じて質問すると返ってきた答えは驚くべきものだった。

「ん？ 腕輪を使つていないのだから点数が減る筈がないだろう」

……はい？

「腕輪を使つていないって…じゃあこの斬撃はなんだ？」

「ああこれか。剣を振り抜く際に生じる衝撃波のようなものだ。ほら、漫画やアニメでも剣の達人が遠くに離れた物体を斬つたりするだろう。あれと同じだ」

「召喚獣でそれを再現したのか!?」

「たつた一点でもゴリラ並の力を持つ召喚獣だ。四百点分の身体能力があれば剣を振るスピードで斬撃を飛ばすことなど容易だろう」

難しいことをあつさり言つてのけやがる。やっぱこの女噂通りとんでもない人だな。

「正しく剣を振らなきや出来ない芸当だろ。そんな操作技術をどこで身につけたんだ？」

「君と同じさ。去年から先生方にお願いして教師の雑用を引き受け、召喚獣を動かす機会をもらつた」

「…そ、うか、君も試召戦争日当てでこの学校に来たクチか」

「いや、召喚獣に興味はあるが私の目的は他にある。そんなことより長話していく大丈夫なのか？ そちらの代表が戦死する前に私を倒すのだろう？ ならば時間を掛けるべきでは無いと私は思うが？」

「だよね。遠距離攻撃に対して打開策が無いからさつきから逃げてばかりだし。」

「会話しながら攻撃を避けてるんだ。戦いを疎かにしている訳じゃないだろ。」

「会話中も俺は召喚獣を走らせ続けている。なんか顔がバテてきてるな。これ以上走れないとかやめてくれよ？」
「どてつ

「ああっ！ 召喚獣が転んだ！」

「隙ありだつ！」

起き上がる俺の召喚獣に容赦なく斬撃が襲い掛かる。もうこうなつたら一か八かの賭けだ！

「これでもくらえ！」

カキーンツ！

金属バットを構えた俺の召喚獣が斬撃を打つたのだ。打つた斬撃は神条の召喚獣には当たらず明後日の方向へと飛んでいつたけど

「……なるほど、斬撃でも金属バットが斬られないとは。だつたらもうやけくそだ！」

繰り出される斬撃を金属バットで弾き返しながら少しづつ神条の召喚獣に近づいていき、そしてガキンッと金属バットと大剣のぶつかり合う音が響く。

「これだけ接近すれば斬撃も飛ばせないだろう？　お互い至近距離で殴り合おうじゃないか」

「ほう……なかなかやるではないか。ならば私も全力で応えよう！」

それから何度も武器をぶつけ合う。たまに俺の金属バットが神条の召喚獣の肩にヒットしたり、神条の剣による突きが俺の召喚獣の体を掠めたり、互いに少しづつ点数を削っていく。このまま接近戦は長く続き…

【世界史】

Fクラス 小波一輝 36点

V S

Cクラス 神条紫杏 45点

ついに最初にあつた点数はもう見る影もなくなつた。恐らく次の一撃を決めた者が勝つだろう。そして俺は重大な事に気付く。

「そういえばまだお互いに腕輪を使ってないよな？」
「ふむ……戦いに夢中ですっかり忘れていたな」

忘れていたのは俺だけではなかつたようだ。この生徒会長、どこか抜けてるところもあるのか？　俺も他人（ひと）のことは言えないけど。

「俺の場合は点数的に使つてどうなるんだ？って感じなんだよな。どうする？ 腕輪使うか？ 今使つても恨まないぞ？」

「私としても今更感がなあ…。せつかくここまできたんだ。最後まで腕輪無しでやろうじゃないか」

俺も向こうも考えている事は同じらしい。ならば

「いくぞおおおおおっ！」

「そ、」だあああああつ！」

お互に攻撃が決まり、二体の召喚獣は消滅した。そして試召戦争はFクラスの勝利で幕を閉じたのだつた。

神条紫杏

紫杏視点

「負けたか…」

召喚獣が消え、自らの敗北を悟ったものの、不思議と悔しさはなかつた。腕輪の使用を忘れていた事を置いても、やれるだけのことをやつたと満足している。そして集中力が切れたのか脚に力が入らず私は地面に膝をつけてゆつくりと座り込む。そんな私を見かねて小波が歩み寄つてくる。

「大丈夫か？」

「心配ない、気が抜けただけさ」

「そうか……よつと」

私の右隣に立ち腰を下ろす小波。突然の彼の行動に私は頭に『?』を浮かべるだけだった。

「ん？　ああ、戦つた相手を見下ろすのもどうかと思つてな。隣いいか？」

わざわざ目線を合わせてくれたのか…。

「…既に座つているが、構わんぞ」

「ありがとな。あと、いくつか質問いいか？」

「いきなりだな。…とりあえず聞こう」

「なに、腑に落ちない点がいくつもあってな。屋上に一人でいた理由だ。しかも放送を流してもらって自分は屋上にいるつてわざわざ教えてくれた。

確かに前の操作技術とあの戦法なら何人が相手でも負けること

はないだろう。でもクラスの命運がかかってる戦争だ。代表が一人で戦うなんて無茶な真似をクラスメイトがよく許したなと思うし、ただ：お前の目的が何なのかを知りたい」

ふむ、ごもっともな質問だ。

「今回のCクラスの戦法は単に私のワガママだ。それでも小山達は二つ返事で聞き入れてくれた」

「全員納得したのか？」

「カズとアカリは『生徒会長の人望』だと言つてくれてはいたが、仮にそうだとしてもそれだけとは思えん。正直私も驚いているくらいだ」「Cクラスの連中と何人か戦つたが、代表に対する不満は感じなかつたぞ？ むしろ楽しんでたような気がする」

「そうなのか？」

ふむ、いくら考えてもわからないな。

「そろそろ、小山に偽の代表やらせてウチのメンバーを騙したわけだが、その作戦にはどういった意図があつたんだ？」

「あれか。ハツキリ言つてしまえば何の意味もなかつたな。元々は小山を代表だと思わせて意表をつく作戦だつたが、私が作戦の変更をお願いしたから無駄になつてしまつた。

それでも宣戦布告に来た吉井と木下は騙されたままだつたから小山の偽代表作戦はバレるまで続けたわけだが……ああそうだ小波、先程の質問なんだが

「ん？」

私はある質問に気づく。

「戦いの場を屋上（ここ）に選んだ理由はだな……ある人に私の勇姿を見て欲しかったからだ」

「見て欲しいつて…誰に？」

小波の問いに答えるように私は空を見上げた。綺麗な青空と白い雲だ。

「いや、校舎内にいては見えないだろうからな。今日はいい天気だ、きつと雲の上から見ていてくれてた事だろう」「それってつまり……」

「ん？ ああすまない。察しの通りだよ…」

私の脳裏に浮かぶのは一人の女の子の笑顔だ。

小学生の頃、『近所の空き地に立つ桃の木には精霊が宿っている』という話を聞いた私はその精霊を一日見たいと桃の木の空き地へと足を運んだ。一日中待つても精霊は現れなかつたが、そこで私は一人の女の子と出会つた。

それからというもの毎日のように桃の木の下で待ち合わせをして一緒に遊んだ赤い眼鏡の女の子。自分で言うのもアレだが今も昔も変わり者だった当時の私は学校に友達がいなかつたため、その子が私にとつて初めての友達だつた。

そう、もう二度と会うことのない私の友達。

彼女と会えなくなり、中学三年生になつた頃には彼女と遊んだ空き地は公園として整備され、思い出の桃の木も取り除かれてしまつた。あの子のいない平凡な毎日を過ごしていたある日の事。文月学園で行われている試験召喚獣に興味が湧いた。

目の前にいる小波一輝は召喚獣に興味を持ち、試召戦争が目当てで文月に来たと言つた。

私も同じく召喚獣に興味を持つて前の学校のエスカレーター進学を蹴つて文月を受験した。しかし彼との相違点、私の目当ては試召戦争ではないという事だ。

(強いて言うなら私は、オカルトの類いを信じている)

化学とオカルトによつて生まれた試験召喚システムの存在、それは化学では証明できないものがある事を私に教えてくれた。

だからこそ試験召喚システムに携われば私の願いは叶うかもしない。

全てはただ…もう一度あの子と話がしたいだけなのだから。

「私達の戦い、あの子は楽しんでくれたかな？」

「…確証はないが俺達二人が満足してゐるなら、その子も見てて楽しめたんじやないか？」

「そうか、それならーー」

話の途中で立ち会い教師の犬井先生が近づいてきた。

「……戦後対談がある。そろそろ校舎に戻るぞ」

「それもそうですね。小波、話の続きは歩きながらにしよう」

ゆっくりと立ち上がり、三人で屋上を後にした。

戦後対談（2）

明久視点

場所は旧校舎三階の我らがFクラス教室。終戦時点で生き残った両クラスの生徒が集まっていた。

「Cクラス代表の神条だ。君達の戦いぶり、見事の一言だつたぞ」「Fクラス代表の坂本だ。正直今回の戦争は敗けを覚悟していた。あの状況からよく勝てた、と今でも驚いている」

各代表が向かい合つて挨拶を交わす。神条さんか：全校集会とかで何度も壇上で話をする彼女を見たけどこうして近くで見ると中の美人だ。それに加えて姫路さんや島田さん、さらに言えば南雲さんとも違う魅力を感じる。

「さて…戦後対談に入る前に一つ、俺達は設備を交換するつもりはない。こちらの条件を呑んでくれるなら今回の戦争は和平という形で終らせたい」

それを聞いてCクラスだけでなくFクラスの何人かも騒ぎ出す。

「落ち着け、俺達の目的はAクラスだろう？」

Dクラス戦の時と同様に騒ぐFクラス連中をなだめる雄二。そんな中、神条さんは腕を組んで考える。

「ふむ、我々としては嬉しい話だが……何をやらせる気だ？」

「なあに、明日の朝Aクラスに行つて『CクラスはAクラスに対し戦争の準備がある』とだけ伝えてくれればいい。ただし、宣戦布告はするな」

「……なるほど、Aクラス戦を有利に戦うために我々を…恐らくDク

ラスも使つて脅しをかけるといったところかな?」

「脅しではなく交渉と言つて欲しいな」

「ははは、面白い奴だな。……わかつた。Cクラス代表としてその条件件、喜んで受け入れる」

Cクラスの方から安堵と驚きの混ざった声が響き渡る。あの条件で設備の交換が無くなるんだから当然の反応かもしれない。

その後は同盟を結ぶ話だつたり、また近いうちに模擬試召戦争しそうという話をして戦後対談は終わつた。意外と早く戦争が終わつたのもあり、今はここに集まつている戦死していない者達が下校時刻までクラス関係なく他愛のない話で盛り上がり、ある意味親睦会になつてしまつてゐる。

雄二は小山さんにやたら言い寄られ、ムツツリーニはCクラスの男子達に写真を見せてゐる。写真を渡す度に盛り上がつてゐるのを見るに女子の写真だろう。

南雲さんは浜野さんと何かを話してゐる。一体なんだろうか？
そして一輝はみんなと少し離れた場所で神条さんと会話してゐる。

「なあ吉井くん」

背後で誰かに呼ばれ、振り向くと僕より頭一ついや二つ高い女子がいた。

「えつと…大江さん？」

「せやせや。長い付き合いになるかも知れへんから、これからもよろしくうな♪」

「う、うん。こちらこそつ」

馴れ馴れしく近寄つてきつては僕の手を取つてブンブン握手をする。
…凄い力だ。そして

突然真剣な顔になり僕の顔を覗き込む。

「…ホンマ会長と同じ雰囲気を感じる」

「え？」

「いきなり何を言っているんだろう？」

「いきなり何やと思うけどな、ウチら生徒会はアンタが観察処分者になつた経緯を知つとる。小学生の女の子の為に去年あんな騒動を引き起こしたことなどを」

「あれ？ なんでバレてるんだろう。先生方の誰かが話したかな？ …いや違う、先生方にはあの女の子の事は話していないし。」

「当然の処罰かも知れへんな。手段がどうあれ女の子の願いを聞き入れた結果、アンタは問題児のレッテルを貼られたわけやん。後悔してへんの？」

真剣な表情で僕の答えを待つ大江さん。そんな彼女を見てふざける訳にもいかないと思えた。

「後悔はしないよ。他に方法があつたかも知れないけど、あの時はああするしか思いつかなかつたんだ。結果的にあの女の子が笑つてくれたから…それでいいんだ」

「それが……アンタの正義？」

「ははは、正義なんて大それたものじゃないよ。ただ僕が…『やらなきやいけないと思ったから、やつたんだ』よ」

「つ！ ……そうか。やっぱアンタ会長に似どるわ。損得関係なく自分の道を突き進むところとか」

「あの～大江さん？ 何言つてるとかよくわからないんだけど…」

「ええからええから。せや、いい機会やしお互い名前で呼び合わへん

? ウチアンタのことめっちゃ気に入ったわ!」
「え?」

真剣な表情が消えたと思つたら最初の馴れ馴れしい感じに戻つて距離を詰めてきた。

「あの、大江さん?」

「ウチの事はカズつて呼んでええで。生徒会やCクラスの親しい人からもそう呼ばれとるさかい。そつちはなんて呼んだらええの? 吉井明久やし…アキつて呼んでもええん?」

こうして、僕はCクラスの女子と友達になりました。

交渉前

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言わっていたにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があつてのことだ。ありがとう」

Cクラス戦を終えた翌日のH.R.。教卓に立つ雄二からの感謝の言葉だ。明日は雪でも降るのか？

「ゆ、雄二どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

明久も俺と同じ思いらしく雄二に声をかける。しかし雄二は素直な気持ちを隠す気はないらしい。

「（）まで来た以上、絶対Aクラスにも勝ちたい。勝つて、生き残るには勉強すればいいってもんじやないという現実を、教師共に突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

Dクラス戦前から一向に落ちる気配のない士気が教室を包む。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている」

クラスの皆は驚きを隠せなかつたのか、教室にざわめきが広がる。ちなみに俺は面白そうだな、と思った。そしてやるなら俺に戦わせて欲しい…と。

『どういうことだ?』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。やるのは当然俺と翔子だ」

バンバンと机を叩いて皆を静める雄二。くそぅ! わかつてはいたが俺じやないか。拳を握つて悔しそうにしている俺を見て隣の瑠璃花が苦笑いしている。

「馬鹿の坂本が霧島さんに勝てるわけがなああつ!?」

「次は耳だ」

雄二の投げたカツターナイフが須川の頬を掠める。アレはマジで殺る気だつたな。

「まあ、須川の言う通り確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしない。だが、それはDクラス戦もCクラス戦も同じだつたろう? まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかつた」

だが、俺達は勝つている。Dクラスは余裕で。Cクラスはギリギリだつたけどな…。

「今回だつて同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ちは揺るがない。俺信じて任せてくれ。過去に『神童』とまで言われた力を、今皆に見せてやる」

『『おおおーーーっ!!』』

全員が雄二を信じている。素晴らしいことだがこの期待を裏切つたらただではすまないぞ?

「さて、具体的なやり方だが、一騎討ちでフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

うーん：何か策でもあるのか？

「でも同点だつたらきつと延長戦だよ？ そうなつたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言う通りじゃ」

「おいおい明久と秀吉、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでもそこまで運に頼りきつた真似はしない」

「？ それなら翔子の集中力を乱す方法を知つていてるとか？」

「いいや一輝、アイツなら集中なんてせずとも余裕で満点を取るだろう」

「雄二よ、あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしてもいいじゃろう」

秀吉がシビレを切らし、他の皆も頷く。

「すまない、前置きが長くなつたな」

雄二はこほんと咳き込んでから口を開く。

「ある問題が出ればアイツは必ず間違える。その問題は——『大化の改新』だ」

大化の改新？ 小学生レベルでそんな問題は…

「…もしかして年号か？ 何年に起きた、とか？」

「ビンゴだ一輝。その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

アッシュがその程度の問題を間違えるとは思えないんだけどな。なにより

「雄二、お前の作戦はわかつた。しかし翔子が満点を取れなかつたとしてお前の方は大丈夫なのか？」

「小学生レベルのテストだろ？ 心配すんなつて」

すごい自信だな。あとで確かめてみるかな？

「ちなみに大化の改新が起きたのは645年。こんな簡単な問題はここにいる皆間違えないだろう」

ふと教室を見渡すとほとんどの男子が顔を逸らした。ええ…

「あの、坂本君？」

「ん？ なんだ姫路」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

「ああ、アッシュとは幼馴染みだ」

「総員、狙ええっ！」

『『『イエッサー!!』』』

須川の号令でほとんどの男子が立ち上がる。

「待て、なぜ皆上履きを構える!?」

『黙れ男の敵！』

『Aクラスの前にキサマを殺す！』

「俺が一体何をしたと!?」

こちらお前ら、本来の目的をわすれるんじゃない。

「あの、吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりやまあ、美人だし…って、え？　なんで姫路さんと島田さんは両手を床につけて。o_r_z見たいな感じになつてるの!?　どうして二人とも滝のような涙を流しているの!？」

あつちもこつちも地獄絵図だな。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染みで、小さい頃に大化の革新で嘘の答えを教えたんだ。アイツは一度教えた事は忘れない。だから今、学年トップの座にいる。俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机はーー」

『『システムデスクだ！』』

さつきまでの反乱が嘘のようにみんなの心は一つになつた。

『ん？　そいいえば小波。さつきお前も霧島さんを名前で呼ばなかつたか？』

「ああ、翔子の従姉が同じ中学のクラスメイトでーー」

「総員、狙ええつ！」

『『イエッサー!!』』

「ちくしょーつ！　こうなることはわかりきつていたよ！」

交渉※

「一騎討ち？」

「ああ。俺達Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

場所はAクラス前。今回は明久と秀吉に加えて雄二を筆頭に俺、瑠璃花、姫路、島田、ムツツリーニの八人で宣戦布告に来た。

「毎回こうしてくれたら僕もいろいろと失わずに済んだ気がするんだけど…」

背後から聞こえる明久の呟きは無視しよう。今は交渉に集中だ。

「うーん…何が狙いなの？」

「もちろん、俺達Fクラスの勝利だ」

雄二と交渉しているのは女子の制服を着た秀吉一人ではなく、秀吉の双子の姉である木下 優子（きのした ゆうこ）だ。ホントにそつくりだな。初見で見分けるのは不可能だろう。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけど、わざわざリスクを犯す必要もないかな？」

「賢明だな。ところで話は変わるが、Cクラスとやり合う気はあるか？」

「Cクラスって、あの生徒会長がいる…」

「昨日の戦争は和平による終結つてことになつてるのは知つていてるだけだろう？だから連中はお前達に試召戦争を挑める。Cクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」

「……それって脅迫かしら？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

おーい雄二。端からみれば完全に悪党だぞ。

「…わかつた、その提案受けるわ」

「え、本当?」

すんなり要求が通つたからか、明久が声を上げる。

「だつて…聞いた話あの生徒会長、姫路さんを倒したんでしょう？ そんな化物のいるクラスと戦争なんて嫌だし」

昨日の戦争で姫路が戦死したことはAクラスにも伝わっていたようだ。おかげでこちらの提案がすんなり通るとはサンキュー神条。「でもこちらからも提案。代表同士の一騎討ちじやなくて、お互い七人ずつ選んで、その七人で一騎討ちをして白星の多いクラスが勝ち、ていうのなら受けてもいいわ」

当然ながら向こうも警戒してくる。秀吉そつくりなのに侮れないな。

「姫路が出てくる可能性を警戒しているんだろうが安心してくれ。一騎討ちには俺が出る」

「無理ね、これは戦争なんだから。その言葉を鵜呑みには出来ないわ」「そうか…わかつた。その条件を呑んでもいい」

雄二の返事で何人かが動搖している。一騎討ち七回か、流石にFクラスメンバーではキツいと俺も思うぞ。

「ただ、七回は多すぎる。一騎討ちを五回にしてくれ。その代わり科

目の選択権はそつちが三つ、こつちが二つでいい」

なるほど、考えたな。イレギュラーの多いFクラスだが、個人の総合点数は姫路と瑠璃花を除いてほとんどのAクラス生徒に負けてるのが現状だ。

科目的選択権二つは厳しいが、代表同士の一騎討ちを諦める代わりに試合の回数を減らせばこちらのリスクも減る。

木下姉は悩む。五回勝負だと雄二が勝つ事を前提に考えれば残りの二勝は（Aクラスの立場からして）姫路と瑠璃花で決まる可能性があるからだ。慎重になるのも仕方がない。

「……受けてもいい」

「うわっ!?」

突然現れた女子生徒、霧島翔子の登場に明久が驚く。俺はもう慣れた。

「久しぶりだな、翔子」

「……一輝、久しぶり。雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？ 代表、いいの？」

「……その代わり条件がある」

「条件？」

「……うん」

うなずいた翔子は顔を雄二に向かっていい放つ。

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」

ああ……なんとなく察してしまった。

「わかった。交渉成立だな」

「……うん、決まり。勝負は明日の昼でいい?」

「それで構わない。交渉を終えた以上C、Dクラスをぶつける必要もなくなつたしな」

ふう、予定とは大分違うけど無事に宣戦布告を終えた。クラスの皆に報告する為にも、俺達は教室に向かって歩きだす。

「……一輝」

「? なんだ翔子」

雄二たちがFクラスに帰るなか、俺だけが翔子に呼び止められた。
どうしたんだ?

「……玲奈は、まだあなたのことを諦めてないから」

ああ、その話か。

「……わかってるさ」

それでも、俺の答えは既に決まっている。

こうしてFクラスに戻った俺達。

「一輝、翔子と何を話してたんですか？」

「大したことじゃないさ。それより瑠璃花、手伝つて欲しいことがあるんだけど、いいかな？」

「ん？ なんでしよう？」

「ちよつと放課後までに作りたいものがあつてね」

明日に向けて

宣戦布告を終え、Aクラス戦を明日に控えた放課後の教室。そこに
は

「……」

先程まで親友が解いていたテストの採点を終え、その答案用紙を右手でヒラヒラさせながら、無言で親友を見下ろす俺と

「……」ちーん：

テストの結果を聞いて見事に卓袱台に顔を伏せ撃沈している親友（雄二）がいた。ちなみに雄二が解いたのは日本史のテスト。範囲は小学生レベルで百点満点の上限あり。もちろん、『大化の革新がいつ起こったか』の問題も入っている。

瑠璃花ともう一人の助つ人の協力もあってなんとか放課後までに間に合わせることができた。

「四十六点か。…雄二、何か言い残すことはあるか？」

とりあえず今も死んだような顔をしている雄二に言い訳ではなく遺言の言葉を求める。特に意味はないが？ すると雄二は突然卓袱台を両手でバンッと叩いて起き上がる。

「ああそりゃ悪かつたなつ！ 見ての通りこれが俺の実力だ文句あるかゴラアツ！」
「開き直つたか…」

まあ、やる気を失くすよりは全然いい。

「で？ どうするんだ？ 小学生の日本史で満点を取れない以上、普通に翔子と戦つて勝つしかないが？」

「くつ…そうするしかないか」

「だがお前はD・Cクラス戦で一度も召喚獣を操作してないだろう。模擬試召戦争で練習を積んだとはいえ、それで翔子に勝てるのか？」
「帰つたら徹夜漬けで勉強して、明日の回復試験で取れるだけ点数を取つてーー」

「大事な勝負前に徹夜なんてやめとけ。体調崩して召喚獣の操作が鈍つて負けたなんてクラスの皆に顔向け出来ないぞ？ それにどれだけ頑張つてもお前の点数は精々Cクラスレベル。数学は二百点超えてたけど、翔子はその倍の点数は取れる」

「じゃあどーすればいいんだっ!?」

「知らん、お前の戦いだろ。自分で考えろ」

「なんだそれ⁈ だーくそつ！ お前さつきから何がしたいんだ！
俺を困らせて楽しいのかよ!？」

自業自得とはいえかなり追い詰められてるな…。まあこれが狙いだしな。

「ああそうだよ。雄二、俺はお前に困れつて言つてるんだよ」
「なつ⁉」

俺の言葉に驚く雄二。

「お前さ、クラスの命運が掛かつた勝負を舐めてるのか？ 『優れたリーダーの条件は悩める事』だ。たつた一つの作戦で既に勝つた氣でいるリーダーを見て、明日の勝負は危険だと考えたんだよ」

雄二是黙るだけだ。

「…雄二。話は変わるが、お前の戦争の目的はなんだ？」

「は？ なんだよいきなり…」

「この試召戦争、事の発端は明久だが、確かに前も個人的な理由で戦争を起こす気でいただろ？ あの時は聞きそびれたからな。今聞いておきたいだけさ」

「俺はただ、世の中学力だけがすべてじゃないって事を教師やAクラスの連中に証明したいだけだ！」

「それがお前の本心か？ 俺も明久もそうだが、お前も周りの人からどう思われようが関係ないっていうタイプだろう？ 正直お前がそんな理由で戦うなんてピンと来ないんだよ。むしろ…翔子の為つて思つたほうがしつくりくる」

「な、なんで翔子が出てくるんだよ!?」

翔子の名前を出した途端分かりやすく動搖する雄二。

「なんとなくだが、お前が翔子との対戦にやけに拘つてるようだ。……まあ、今の反応を見てだいたいわかったが？」

「おい待て！ 一体何がわかつたとーー」

「雄二」

とりあえず雄二を黙らせる。そして

「お前の小学生の頃に起きた事件は以前翔子から聞いた。その話を聞いてお前が翔子の事を大事に思っている事はわかつた。

言つておくが、翔子に対する気持ちを肯定しようが否定しようが話は続けるから黙つて最後まで聞いとけ」

「……」

一応釘を刺しておく。

「かつて『神童』とまで言われたお前が今は一転して『悪鬼羅刹』と言われるようになつたこと。翔子はそれを自分のせいだと思ってる」

「違うっ！ あれは俺がーー」

「最後まで聞けって。その事件以降お前が何らかの答えを求めてさ迷う様に喧嘩に明け暮れる中、翔子は今日までずっとお前を信じて見守る事を決意した。お前がどんなに突き放しても、離れることは決してない。その理由はお前が一番よくわかっている筈だ」

「……」

「俺の勘だが今回の試召戦争はお前と翔子の過去に決着（ケリ）をつけた為のものなんじやないか？ しかしだ、負けた責任がクラスの皆さんぶ以上リーダーのお前に中途半端な気持ちで戦いに臨んで欲しくないんだよ」

「俺は別に勝負を舐めてる訳じやーー」

「たかが小学生のテストだと油断した結果がこれだろうが」「ぐつ…」

右手の答案用紙を突きつける。流石の雄二も言い返せなくなつた。

「雄二、お前が探していた問い合わせは最初から目の前にあるんじやないか？ あとはお前自身が素直に向き合うことだ。過去の自分と：翔子の想いにな」

俺は教室の扉に向かつて歩く。

「隣の空き教室で待つてたから、ゆっくり考えて、お前なりの答えが見つかったら來い。そのまま家に帰つてもいいが、そうなつたら俺は一生お前を軽蔑する」

それだけ言つて俺は教室を後にした。

明久視点

学校が終わつた僕はバイトの為『喫茶ラ・ペデイス』へと向かう。しかしその足取りは少しばかり重い。今日一緒に働く人が原因である。
(嫌いじやないんだけど苦手なんだよなあ…)

そう思いつつも店の扉を開ける。今のところ店内に客はおらず、そして店の奥からあの娘が姿を現す。

「いらっしゃいませ、何名様でーー」

例の彼女は僕と目があつた瞬間

「ーーお帰りくださいませ、出入口は後ろになります♪」「笑顔でサラリと帰れって言われた!? 一応仕事で来たんだけど!?」「あはは、冗談だよ。おにーさん反応が面白いからつい」「…僕は別に構わないけど先輩に対してそれでいいのかな、准ちゃん？」
「…心配なく。おにーさんにしかこんなことはしませんし、美春さんからも許可は貰いましたから。存分に弄つてもいいって」「清水さあああんっ！」

これがメイド服を嬉々として着ている清水さん同様ツインロールヘアの後輩女子とのやりとりである。

一輝視点

Fクラスの隣にある空き教室で待機していると二十分程で雄二がやつて來た。

「随分と時間がかかつたな。で、答えは見つかつたのか？」
「ああ」

問い合わせを返した雄二の顔は晴れやかだつた。どうやら答えは見つかつたらしい。

「一輝、お前のお陰で自分なりの答えを見つける事が出来た。俺はーー」

「おつとストップだ。その答え、その気持ちは翔子だけに伝えてやれ」「あ、ああ」

さて、本題に入ろう。

「雄二。明日の一騎討ち、お前は誰と戦うんだ？」

「もちろん翔子と戦う。そして勝つ」

「しかし、翔子の点数はお前の倍はある。それでも勝つというのか？」
「それでも勝つ。もうアソイツを待たせるわけにはいかねえ！」

言つてる事は『勝つ』の一点張りだが、先程の無鉄砲で後ろ向きな考え方と違つて真っ直ぐ俺を見て言つてゐる。そんな勝とうとしているリーダーに、応えないわけにはいかないよな。

俺は両手をパンパンと二回叩いて

「西村先生、入ってきてください」

合図と共に西村先生が教室に入ってきた。予想外の登場に雄二は当然

「て、鉄人!? なんでここに!?

驚いている。

「西村先生と呼べ坂本。明日の一騎討ちに向けて練習がしたいと小波に頼まれてな」

「Aクラス戦が明日に迫っている以上、今から勉強して一点でも多く取るより召喚獣の操作性を上げる方が効率がいいだろう」

「一輝お前……まさか最初からこれをやる為に?」

ははは…。実を言うとここまで事が上手く運んだのは久しぶりなんだよな。ちなみに本当は暁先生を呼びたかったんだけど、あの人はAクラスの副担任だ。明日戦うクラスの人間に協力を呼び掛けるのは避けるべきだと踏んだ。

「雄二。ハツキリ言つてこれからやるのは荒療治だ。召喚獣の戦いは点数差で決まるわけじやない。だからといってこれで翔子に勝てるとは限らない。それでもやるか?」

もう一度雄二の意思を確認する。雄二是覚悟を決めた目で頷く。

「…わかった。ならば始めから全力で行く。最終下校時刻までに俺を戦死させて見せろ!」

「やつてやらああああつ!」

「「試験召喚（サモン）っ！」」

共通点

瑠璃花視点

家庭科室でちょうどお菓子を作り終えるとテーブルに置いてあったスマホが突然震え、手に取つて画面を見る。一輝からですね。

『最終下校時刻まで残ることになった。部活終わつたら先帰つていいぞ。』

：やつぱり坂本君と何かあつたんでしょうか。一緒に小学生の日本史のテストを作つたのはそういうことでしょうし。校門で待つてますよ。と私はすぐに返信をしてスマホを元の位置に置く。そんな私に先輩女子が寄つてきた。

「おっ、またしても彼氏からのメッセージか？ 羨ましい限りだな」

「ぶ…部長、そんなんじやないですよ」

「ははは、まあそう照れるな」

まつたくもう…。

「話は聞いたぞ～？ 二年生に進級して三日連続で試召戦争とは、君も大変なクラスに入つたな」

「いえいえそんなことは。私も一輝も試召戦争は楽しみにしてましたから」

「最初からやる気充分な奴はいいよな～。私なんか拷問器具なんかが平然と置いてある補習室に行きたくない思いでいっぱいだつたというのに」

…なぜ学校に拷問器具が？ そういえば私まだ戦死してませんね。

「そういえば模擬試験…だったか？　それに暁先生が立ち会つたと聞いたけど」

「暁先生を知つてるんですか？」

「もちろん、今の三年生は一年の頃から世話になつてたから知らない人はいない。今年から二年の副担になつてしまつたからそういう会えなくなつてしまつたがな」

部長達三年生とそんな繋がりがあつたんですねあの人…。

「暁先生、昔野球やつてたからな。瑠璃花の彼氏と勝負させたら面白いんじゃないか？」

「ですから私と一輝はまだ……え、あの人野球やつてたんですか？」

「ああ。十年ほど前に『花丸高校』でな。ただ、三年の夏に野球部が甲子園に行つたらしいんだが、暁先生はその時既に野球部を辞めている」

「えっ、どうしてですか？」

「さあな。怪我したのか、チームメイトと揉めたのか、先生自身あまり高校時代の事は話したがらないんだ」

怪我、ですか…。

「野球、嫌いになつたんでしょうか…？」

「いや、たまにバッティングセンターで打つてるし少年野球の試合を観戦に行つてるから、むしろ好きだと思うぞ？」

「…部長、先生の事よく知つてますね。調べたんですか？」

「私だけじやないぞ？　暁親衛隊のメンバー全員の共有財産だ」

そう言つて手作りの会員証を見せる部長。あの先生、ファンクラブがあるんですね…。

「瑠璃花も親衛隊に入らないか？　会員証ならうちのリーダーが作り

すぎてまだ余つてゐるぞ?」

「いえ、結構です」

「即答か。まあ君は小波君のファンみたいなものだし仕方ないか」

「私と一輝はまだ付き合つてません」

「まだ…なんだな?」

しまつた。墓穴を掘つてしましましたね。恥ずかしさで顔が赤くなりかけた丁度その時に家庭科室の扉が開く。

「いたいた。夏菜、先生が呼んでるわよ」

女子生徒が顔を出す。部長を呼び捨てにしてますし、先輩でしょうか? 銀色のショートヘアで、ブレザーカラーのボタンを全部外してヤンキーミたいな感じがしますね…。

「フツキーじゃないか。お前が探しに来てくれるとは嬉しいな」「後輩の前でその呼び方やめなさい。先生の頼みを断るのが面倒だつただけ」

…不良に見えて実はいい人なんでしょうか? 先輩と目が合う。

「少しコイツを借りていくわね。さあ行くわよ夏菜」

部長の腕を掴んで家庭科室を出ていく。「すぐ戻るからな!」と部長が廊下で叫んでいる。お菓子も作り終えたばかりですので暇になりましたね。

ふと先程の話を思い返す。

(暁先生もいろいろあつたんですね…)

何があつたのかは分かりません。苦労や嫌な事があつたのかも知

れません。もし辞めた理由が怪我や揉め事だったなら他人事には思えない自分がいる。

一輝が中学で野球部を辞めた理由が、その二つですから…。

雄二視点

最終下校時刻になつても特訓を続けた為に鉄人に校門へと投げ捨てられた俺と一輝はそれぞれ帰路についた。そして家に帰ると玄関先に

「翔子!」

「……雄二」

「なんでここにいるんだ?」

「……雄二に聞きたい事があつて」

聞きたいこと?

「……雄二。どうしてそんなに試召戦争にこだわるの? 設備が欲しいの?」

ああ、そういうことか。

「俺は、机になんか興味はねえ。別の目的の為だ」

「……別の目的？」

「そうだ。だから翔子。明日は手を抜くなよ？　お前の全力を持って俺を倒しにきてくれ」

本気のお前に勝たなければ意味がないんだ…！

「……わかってる。明日は全力で雄二に勝つ」

Aクラス戦（1）

明久視点

『これより、Aクラス対Fクラスの試召戦争を行う』
『では、両名共準備は良いですか？』

ついに始まつた一騎討ち、会場はAクラス教室。立会人は模擬試召戦争でお世話になつたAクラス副担任の暁先生と学年主任の高橋先生が務めてくれる。うん、高橋先生は相変わらず知的で美人だ。

「ああ」

「……問題ない」

雄二と霧島さんが応える。

『それでは一人目の方、どうぞ』
『アタシから行くよつ』

向こうは秀吉の姉、木下優子さん。そしてFクラスの初陣は

「明久、行つてこい」

僕だ。

「うん。皆、行つてくるね」
「吉井君、頑張つてくださいねつ」
「吉井、勝つたらクレープ奢つてあげるつ」

姫路さんと島田さんの応援。これは必ず勝たないとねつ

「よろしくね、優子さーー」

優子さんの前に立ち声をかける。が、なんだろう…？ 面白くなさ
そうな顔でこつちを見ている。

「あの～優子さん、どうしたの？」

「つ!? あ、ごめんね明久君。お手柔らかにお願いね。手加減はしな
いわよ」

「それは僕だつて」

先程の雰囲気は嘘のように消え、笑顔を見せる優子さん。僕も彼女
も気合い十分みたいだね。

『対戦科目を決めてください』

「優子さん、君が選んでいいよ」

「あら、じゃ遠慮なく。高橋先生、数学でお願いします」

ぐわ～つ、苦手科目とはついてない。優子さん、ひどいよっ！

（フフフ…明久君、アナタが理数系を苦手としてるのは知ってるのよ
ね～。彼を相手にこんなことはしたくないけど、コレって戦争だし
…）

『承認します』

教室全域にフィールドが張られる。

「試獣召喚（サモン）つ！」

起動ワードと共に僕達の召喚獣が現れる。改造学ランに木刀を装
備した僕の召喚獣と、西洋鎧にランスを装備した優子さんの召喚獣
だ。

鎧か……木刀で心臓を狙うのはやめた方がいいかも。首か頭を狙いしかないけど、武器がランスだから迂闊に近づく事ができない。でも…

【数学】

Fクラス	吉井明久	141点
VS		
Aクラス	木下優子	376点

負けるつもりはないっ！

優子視点

点数差に臆することもなく、アタシに反撃のスキも与えず攻撃してくる明久君の目に一切の迷いは感じない。この状況でも彼はアタシに勝つ気でいる。

アタシは勉強の為に図書室に通う事が多く、観察処分者の仕事をしている彼と出会う事が多かつた。去年のアタシは彼を学年一の問題児と見下し、話しかける気も起きずにいた。

だけど、度々見かける彼の真面目に仕事に取り組む姿勢を見てそんな感情は次第に消えていった。

それからと、いうものの図書室で顔を会わせては挨拶をし、ちょっとした世間話で盛り上がつたり、たまたま好きな本のジャンルが似ているのもあって今では互いに本の貸し借りをしている。

とある先生から聞いた話、去年明久君が問題を起こした理由は困つてゐる人を助けるためだつたらしい。だからと言つて教職員に迷惑をかけていい理由にはならないけれど。

彼は周りから優等生と呼ばれているアタシの事を尊敬してくれている。しかし、物事に對していつでも一直線に突つ走る事が出来る、そんな彼をアタシは羨ましく思う。

そしてそんな彼に惹かれてしまつてゐるアタシがいる。試合前に彼が姫路さんや島田さんと仲良く話しているのを見て少し苛立つくりには、他の女に彼を渡したくないのだろうと思う。

「明久君、今更だけどアナタの木刀より長いランス持つてるアタシに対して躊躇うことなく接近戦つてどうなのかしら？」

「いや、どうせ考えたつて良い案なんて浮かばないし。だつたら後悔しないようにしようかなーつて思つてさ」

「明久君らしいわね。でも気づいてるかしら？」

バキッ

激しい攻防の末、明久の召喚獣の木刀が折れてしまつた。

「しまつーー「そこよー！」

動搖した彼のスキを逃さず、ランスを横一線に振り抜く。彼の召喚獣は上半身と下半身が見事に分かれて消滅した。

《勝者、Aクラス》

高橋先生の声が響く、アタシの勝利が確定する。だけど…

「か、体がつ…体が痛いいいいつ!!」

召喚獣のファイードバツクにより床に倒れて苦しむ明久君。しまつた、手加減するのを忘れていたわ…。

明久視点

「皆ごめんね、負けちゃつた」

しばらくして痛みが収まり、優子さんに差し伸べられた手を掴んで立ち上がり、少しフラフラな状態でFクラス陣営に戻ってきた僕に雄二が口を開く。

「いや、あの点数差と不利な状況でよく戦ってくれた。それに木下優子の召喚獣の操作は上手かつたからな」

お咎めなし、とホツとしていると今度は一輝が

「なあ明久。木下優子と知り合いなのか？ やけに親しかった気がするんだが…」

「うん、彼女とは去年から本の貸し借りをしていてね」

「なんですか？」

「ワシは初耳じやぞ！」

姫路さんと島田さんが声を揃えて驚く。秀吉も知らなかつたあたり、どうやら双子の妹「弟じや！」は姉から何も聞かされてなかつたらしい。

「いやあ、優子さん意外と面白い本勧めてくれてさ。僕も思いの外ハマつちやつて今の関係が半年以上続いてるわけで……」

『木下優子……明後日の方向から宿敵（ライバル）出現ね…』

『強敵過ぎますよ…。ライバルは美波ちゃんだけでいいのに…』

『うむ……姉上もまんざらではなきそそうじやし、二人には悪いがワシは立場上姉上を応援せねばならんのかの…?』

『なつ木下、ウチ達を裏切る気!?』

『木下君ヒドいです!』

離れた場所でなにやらヒソヒソ話をしている三人。何を話してい るんだろう?

「明久。帰り道に後ろから刺されるないようにな?」

「いきなりなに物騒な事を言つてるの!?」

訳がわからないよ!

Aクラス戦（2）※

『では、次の方どうぞ』

「姫路、頼むぞ」

「はい、行ってきます！」

雄二に指名され、気合い十分な姫路が前に出る。さて、Aクラスからは…：

「僕が相手をしよう」

Aクラスから歩み出たのは眼鏡をかけた男子、名を久保 利光（くぼ としみつ）。姫路が振り分け試験を落ちたために学年次席となつた生徒だ。

「総合科目でお願いします」

『承認します』

Fクラスの科目選択権は二つ。姫路には科目を選ばないようにな言つてある。

しかし総合科目か…。姫路と久保の実力は拮抗しているから最悪な展開も…：

【総合科目】

Aクラス 久保利光 3997点

V S

Fクラス 姫路瑞希 4409点

……はい？

二人の召喚獣が現れ、表示された点数を見た俺は空いた口が塞がらずに入った。もちろんそれは俺だけじゃない。

『マ、 マジか!?』

『いつの間にこんな実力を!?!』

『この点数、 霧島翔子に匹敵するぞ……!』

「久保君を相手に点数差が四百…?」

「姫路さん…やつぱり凄い」

至るところから驚きの声があがる。隣にいる明久と瑠璃花もだ。

「ぐつ……姫路さん、君はどうやつてそんなに強くなつたんだ……?」

悔しそうに姫路に尋ねる久保。つい最近までは学年二位の座を奪い合つてた者の実力がここまで離された。当然気にはなるだろう。

「……私、 このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、 Fクラスが

「Fクラスが好き?」

「はい。だから頑張れるんです」

ズバアアアン…!

勝負は姫路の勝ちで決まった。

明久視点

Fクラスの皆が好き……か。姫路さん嬉しい台詞を言つてくれるよ。
……泣いてないからね？

『三人目の方どうぞ』

「…………（スクツ）」

ムツツリーニが立ち上がる。そして、今まで使わなかつた科目選択権を使う時がやつて來たのだ。

そう、ムツツリーニは総合科目の八十パーセントを保健体育で獲得する猛者。その勝負ならAクラスにだつて負けはしない。

「じゃ、ボクが行こうかな」

Aクラスからは薄緑色の髪をショートカットにしたボーアイツシユな女の子が出てきた。

「一年の終わりに転入してきた工藤 愛子（くどう あいこ）です。よろしくね」

ん？ どこかで聞いた名前だ。そう考へていると挨拶を終えた彼女は僕に向かつて手を大きく振つてくる。

「明久くーん、久しぶりー」

あ、思い出した。

「あれ？ 愛子ちゃん？」

「覚えててくれたんだー。嬉しいなー☆」

「ごめんね、ついさっきまで忘れてたんだ……とは言わないでおこうつて考えてたら横から襟首を掴まれて

「吉井っ！ あんたウチの知らない間に一体何人の女と関係を作つてるのよ!?」

島田さん、誤解を招くような発言はやめてくれる？

「一応聞いておきますけど、もう他にはいないですよね…？ 木下姉妹と工藤さんだけですよね？」

あれ？ 姫路さんの目が病んでるような。凄く怖いんだけど！？

「待つのじゃ姫路よつ、何故ワシが含まれておるのじゃ!?」

「木下（君）が一番の天敵だからよ（です）！」

「ワシは男ぢや！」

他の女子との関係か……そういえば一昨日Cクラスのカズさん（大江和那）と電話番号交換したけど……素直に話すべきか、黙るべきか

⋮

《そこ、私語は慎むように》

《教科は何にしますか》

暁先生が注意し、高橋先生がムツツリーニに尋ねる。

「…………保健体育」

ムツツリーニの唯一にして最強の武器が選択される。

「土屋君だつけ？ 随分と保健体育が得意なみたいだね？」

愛子ちゃんがムツツリーニに話しかける。何をする気だろ？

「でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？……キミとは違つて、実技で、ね♪」

「…………つ!?」

とんでもない発言にムツツリーニが鼻を抑える。なんとか鼻血を堪えたようだ。

「キミで実践してもイイんだけどー、ボクとしては既に心に決めた相手がいるからねー」

僕を見てウインクしてくる愛子ちゃん。え？ それってつまりーー

『そろそろ召喚してください』

「はーい、試獣召喚（サモン）つと
「…………試獣召喚（サモン）」

高橋先生が急かして二人が召喚獣を呼び出す。ムツツリーニの召喚獣は何度も見てる忍者装束に両手にクナイ。一方愛子ちゃんは

『なんだあの巨大な斧は!?』

見るからに破壊力抜群の巨大な斧を持つセーラー服姿の召喚獣。あれは強そうだ。だけど…

「実践派と理論派、どっちが強いかを見せてあげるよ」

【保健体育】

Fクラス 土屋康太 572点
VS

Aクラス 工藤愛子 446点

「…………望むところ、 加速」

「腕輪発動！」

バチャイイン…！

「…………なんだとつ…！」

ムツツリーニが驚愕によつて大きく開かれる。高速移動で愛子ちゃんの召喚獣に斬りかかるとしたムツツリーニの召喚獣の動きが止まつたのだ。

いや、あれは……感電しているのかな？

「ボクの腕輪の能力は『電気』。武器にまとわせて攻撃するのがキホン戦術なんだけど、こーゆー使い道もあるんだヨ?」

そう言つて足で床を踏み鳴らす。もしかして…

「…………床に電気を流したのか!?」

ムツツリーニも同じ考えのようだ。そういう言つてる内に愛子ちゃんの召喚獣は麻痺状態で動けないムツツリーニの召喚獣を一刀両断するのだつた。

「ゞこ名答☆」

一輝視点

「さて、いよいよ俺か…」

ムツツリーニが負けたのは予想外の事態だが、まだ負けた訳じやない。俺は四人目として前に出る。

「一輝」

雄二に引き留められた。

「一輝。明久と姫路とムツツリーニの為にも、俺は勝ちたい。だから、俺まで回してくれ」

言われるまでもないさ。

「わかっているさ。昨日お前にあれだけ偉そうに言つた以上不様な姿は見せないよ。行つてくる」

俺は歩き出す、勝つために。

「あ、そうそう一輝。科目選択権、使つていいからな?」

え、いいの?

Aクラス戦（3）

明久が惜しくも敗れ、姫路が巻き返し、そしてムツツリーニが負けた。現状は一勝二敗、もう後がなくなつたな。

『明久くん見てた？　見てたよね。ボク勝つたよー。だから褒めてー☆』

『う、うん。凄かつたね…』

『こら愛子、明久君が困つてるでしょ！　そんなにくつつかない！』

『よ、吉井君。私も勝ちました！　だから私も褒めて欲しいです！』

『こら瑞希、なにちやつかり抜け駆けしようとしてるのよ。てゆーかアンタ達二人はAクラスでしょーが！　なんでこつちにいるの!?』

そんな中、どこぞの友人（明久）がAクラスも含む複数の女子に囲まれているわけで。

アイツ知らない間に色んな女子と関わってたんだな。ハーレム築いてたんだな。

『『ゴゴゴゴゴゴゴゴ…!』』

うん、あの光景を見ているFクラス（俺、雄二、秀吉、ムツツリーニを除く）男子共の殺気が半端ないな。今にも明久に殴りかかりそうだ。

『あれは止めたほうがいいのでは?』

『放つても問題は無いでしょう。一騎討ちの妨げにはなりませんし』

『：高橋先生、あなたつて堅物に見えて意外と融通が効くんですね。初めて知りましたよ』

先生方、どうか止めてあげてください。さて気を取り直して、俺の

対戦相手は誰だろうか…。

「私が行きます」

Aクラスから一人の女子生徒が前に出る。その姿を見てFクラス側がざわつく。銀髪ボブカットの落ち着いた雰囲気の美人だが、彼女の容姿がざわつきの原因ではない。

一番の原因是彼女が白いブレザーを着ているという事実だ。おいおいマジか？ ウチのクラスつて連中と関わること多くないか？

「…君も生徒会か？」

「上守といいます。一昨日は会長がお世話になりました」

どうやら俺の相手は生徒会副会長、上守 甲斐(かみもり かい)らしいな。神条から聞いた話、彼女は神条と同じ中学で、三年間同じクラスだつたそうだ。そして自分についてくる形で文月に來たとか。

『教科を選択してください』

「世界史で」

「？ そちらの代表の為に選択権を取つておかなくていいのですか？」

「俺が負けたらそこで終わりだからな。うちの代表にも何か考えがあるんだろう」

本来なら俺より高い点数を取れる瑠璃花を出すべきなんだろうけど、アイツの腕輪は一騎討ちでは役に立たないらしい。だからこそ雄二は俺を器用した。

「そうですか…ではお互にベストを尽くしましょう。試獣召喚（サモン）！」

「試獣召喚（サモン）！」

俺達の召喚獣が現れる。ガンバーズのユニフォームにバットを持った俺の召喚獣と、鎧を纏い右手に斧、左腕に盾を装備した上守の召喚獣。

【世界史】

Fクラス 小波一輝 413点

V S

Aクラス 上守甲斐 433点

「…見せてもらいますよ？ 会長に勝つた貴方の力をつ！」

前の戦いで見た工藤愛子には及ばない斧を構えた上守の召喚獣が突っ込んでくる。甘い。

俺の召喚獣は最小限の動きで突進を避け、そのスキだらけの背中にバットを振り下ろ「甘いですね」なに!?

地面を蹴つて前方に跳んだ上守の召喚獣。振り下ろしたバットは見事に空振りとなる。

「なかなかやるな。Cクラスにいた生徒会役員も試召戦争初めての割りに皆操作が上手かつたな。君も神条から教わったとか？」

まあCクラスの連中も神条から操作のコツを教えてもらつたらし
いから、同じ生徒会の彼女も神条から教わつたと考えれば納得がい
く。

「…随分と余裕ですね。このままだと貴方、負けますよ？」

え？ どういうことだ？ ふと俺の召喚獣を見る。よく見ると側
に蜘蛛のようなものがーー

ドカアアンツ！

【世界史】

Fクラス 小波一輝 285点

なんだ!? 突然蜘蛛のような何かが俺の召喚獣に触れた瞬間爆発したぞ! 点数もかなり削られた! これはまさか…

「…腕輪の能力か?」

「その通りです。持ち点を十点消費することで追尾型(蜘蛛型)の爆弾を放つことが出来るのです。ただ威力が小さいため、一撃で相手を仕留める事はできませんが…」

最後の方を残念そうに言つてたけど、たつた十点の爆弾でこのダメージかよ? ん? 上守の点数がどんどん減つていく。

【世界史】

Aクラス 上守甲斐 423→273点

かなりの点数が減った。百五十点か? つまり爆弾蜘蛛の数は…:

「十五匹です」

俺の思考を読んだ上守は俺に答えを提示する。そして上守の召喚獣の周囲から十五匹の蜘蛛が現れる。その光景に驚いていると上守は思い出したように

「ちなみにさつきの話ですが、私に召喚獣の操作を教えたのは会長ではありませんよ? さらに言えば会長も教えてもらつた側です」

「何だと? じゃあ一体誰から…」

「…あいにく戦争中にべらべらと相手の質問に答える程お人好しでは

ありませんので。その答えは勝負の後で聞きに来なさい」

蜘蛛達は俺の召喚獸を見つけるとカサカサと素早い動きで接近してきた。なにこれ怖い。

「これでチェックメイトです」

上守は召喚獸のもつ片手斧を俺の召喚獸に向けてぶん投げる。

「危なっ！」

すぐ右に跳んで斧をかわす。その拍子に倒れてしまい、起き上がりの間に爆弾蜘蛛がすぐ側まで迫ってきていた。さらに俺はとんでもない事態に気づく。

どういう理屈かは解らないが、さつき上守の召喚獸が投げた片手斧がブームランのように俺の召喚獸の背中めがけて戻ってきた。

前方に爆弾蜘蛛、後方に斧ブームラン。もう一度左右に跳べば爆弾蜘蛛から逃げられなくなる。かといってこのまま立つていれば後ろから斧が飛んできてグサリだ。

絶体絶命だな。ふと上守と目が合う。

「言つた筈ですよ、『チェックメイト』と」

ドカアアンツ！

俺の召喚獸は爆発に巻き込まれた。

Aクラス戦（4）※

甲斐視点

ドカアアンツ！

今ので最後の爆発ですか？煙に覆われているせいで彼の召喚獣がどうなったかは判りませんが、恐らく戦死でしょう。

（会長に勝つたのだからもう少し粘つてくれると期待していたのですが、あつけなかつたですね……ん？）

ブンツ ガツ！

「なつ!?」

煙の向こうから飛んできた何かが私の召喚獣に直撃した。あれは…バツト？ 一体何が…？

「そ、」だああああつ！」

今度は小波の召喚獣が姿を現し、私の召喚獣に飛び掛かるうとしていた。急いでその場から動こうとするも、召喚獣が言うことを聞かない。…いえ、さつきバツトを頭に喰らつたせいで気絶している？

ズバアアンツ！

何も出来ないまま私の召喚獣は一刀両断された。私が投げた斧を持つ彼の召喚獣によつて。

【世界史】

Fクラス 小波一輝 14点

V S

Aクラス 上守甲斐 D E A D

『勝者、Fクラス』

「そんな、一体…」

何が起こつたの？ なんで彼の召喚獣は戦死していないの!?

「かなり動搖しているな、顔に出てるぞ。知りたいなら教えようか？」

』

小波がこちらに近づいてくる。……私、そんなに動搖していましたか？

「…教えてください。あの状況でどうやつて無事でいられたのですか？」

「うーん…正直無事とは言えないな。爆発を受けて俺の召喚獣の持ち点はたつたあれだけなんだし」

召喚フィールドが展開されているおかげで未だに消えずにする彼の召喚獣はと、自分で放り投げた事で教室の隅に無造作に転がっているバットを拾つて埃を払つて。そんな召喚獣の頭の上には『世界史 14点』と表示されている。

「あの時、前方からは爆弾蜘蛛が接近、後方からは斧が飛んできた。スピードからして斧の方が早く俺の召喚獣に接触するから、下にしゃがんで斧を回避しただけさ。

そして俺の召喚獣の頭上を素通りした斧は床に突き刺さり、偶然蜘

蜘蛛が斧にぶつかり爆発。で、近くにいた蜘蛛達も衝撃により連鎖爆発を起こしたわけだ。一瞬の出来事だつたから、わからなかつただろ？」

確かに、すぐに煙に覆われましたからね…。

「ちなみに俺の召喚獣は斧を避けた後すぐに後退させた。それでも爆発に巻き込まれたから危なかつたよ。

で、全ての爆弾が爆発したのを見計らつて俺の召喚獣の武器（バット）をお前の召喚獣にぶつけて、意識が跳んでいるそのスキにお前の召喚獣の武器（斧）を床から引っこ抜いて斬りかかつたわけだ」

「あなたの投げたバットが当たつたかなんて煙で見えないのに分かる訳がありません。貴方が負けたらFクラスの負けが決まる戦いでよくそんな賭けに出れましたね」

「コントローラーを操作しなきゃラジコンは動かない。本人に動かす意思がなければ召喚獣は絶対にその場から動かない。君が無駄に召喚獣を動かすような事をしないと踏んだ。

斧が刺さった場所と君の召喚獣が立っていた場所を覚えていれば煙で見えていなくても戦える。何度も召喚獣を操作しているから自信はあつた」

それを聞いて、今日まで自分が積み重ねてきたものを信じている、と誇らしげに言う彼にすんなりと負けを認めてしまう自分がいた。

「…ようするに実戦経験の差というわけですか。『必ず勝ちます』と言つておいてこの様（ザマ）ではーー」

一息ついて

「会長にお叱りを受けてしますね…」

勝負に負けたからという理由で会長が私に説教をするなんて思つていない。それを分かつていてるから彼は私の冗談と一緒に笑つてくれたのだつた。

雄二視点

「一輝、よくやつた」

「凄いよ一輝、あんな強力な腕輪持つてる相手に勝つちやうなんて！」

「うむ、おかげで無事に大将戦まで繋がつたのう」

「……計画通り」

「よく勝てたものよねー、ウチはもう生徒会と戦うのだけは御免だわ」

「小波君、凄いですっ！」

戻ってきた一輝はFクラスお馴染みの面々から歓迎を受ける。そして

「瑠璃花、勝つたぞ」

「お疲れ様です。一輝、いい戦いでしたよ」

お互に見つめ合つて別の世界に行つてしまつた二人。まだAクラス戦は終わつてないだろーが。

「おいこらそこの二人。そういうのは全部終わつてからにしてくれ

「ああ、悪い」

「すみません、つい…」

恥ずかしがることもなくすんなりこちらを向いて謝る二人。弄ろうと思つたんだがな、つまらん。

「雄二、さつきまで明久にくつついてたAクラスの二人は?」

一輝の質問に対しても俺はAクラス陣営に顔を向ける。

「お前が戦つてる間に暁先生から注意を受けて戻つていつたぞ。戦争中だし、こつちとしては事件が起ころざしに済んだ」

「事件?」

「女子四人に囮まれてる明久に須川達が襲い掛かろうとしていたからな。そんなくだらない事で戦争を中止にされたら堪つたものじやない」

それだけ説明すると一輝は納得してくれた。

『最後の一人どうぞ』

…ついにこの時が来たか。

「……はい」

Aクラスからはもちろん翔子だ。そしてFクラスからは当然

「俺の出番だな」

翔子の下へ歩こうとしたら俺の周りに何人か集まってきた。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ、任された」

明久にぐつと手を握られ、俺はそれを力強く握り返す。

「……（ビツ）」

ピースサインを向けてくるムツツリーニ。

「Cクラス戦は助かつた。感謝している」「……（フツ）」

小さく笑うムツツリーニ。照れやがつて…。

「雄二」

一輝が近づいてくる。

「一輝、お前にはこれまで何度も助けてもらつた。クラスのリーダーとして俺に足りないものを教えてくれた。本当に感謝している」「おいおい、昨日の朝のH.Rでも感謝の台詞を聞いたぞ。もしかして緊張しているのか？」

「それもあるな…。だが、昨日やれるだけの事はやつたんだ。あとはベストを尽くす！ そうだろ？」

「ははは、そうだな。あとはお前次第だ、頑張れよ」

一輝に背中を叩かれ、俺は翔子の下へと歩を進める。

俺から始まつた過去に決着（ケリ）をつけるために。

Aクラス戦（5）

雄二視点

「……雄二」

遅れて前に現れた俺の名を呼ぶ幼馴染み。

「待たせたな翔子」

そうだ。これまでずっと待たせてきたんだよな…。だかそれも今日で終わる。

《霧島さん、科目は何にしますか？》

Fクラスは既に科目選択権を使いきった。だから高橋先生は翔子一人に問い合わせた。

「……数学でお願いします」

《承認します》

「（……）試獣召喚（サモン）！」

フィールドの展開と同時に俺達は召喚獣を呼び出す。白い特攻服にメリケンサックを装備した俺の召喚獣と、和風鎧を装備し日本刀を両手に持つ翔子の召喚獣が現れる。

【数学】

Fクラス 坂本雄二 209点

V S

Aクラス 霧島翔子 524点

『『『はあつ!?』』』

『数学が五百点超え!?』

『これが学年主席の実力…!?』

『坂本も（ギリギリだけど）Aクラスレベルだぞ！』

両クラスから驚きの声があがる。それも当然だな。文系と理系どっちが得意（好き）か？と聞かれたら文系と答える人が多数を占める。それくらい理系を苦手とする者は多い。確かテレビでやったアンケートの結果は文系七十パー、理系三十パーだったか？

ちなみに俺は理系派だ。問題の解き方が理解出来ていれば暗記よりも楽に解けるからだ。…それはきっとアイツも同じなんだろうが。

「翔子、お前やっぱ凄えな」

「……雄二、本気でいく」

はは、珍しく褒めてやつたのに真剣な表情が崩れてねえな。それだけ本気でぶつかってくれるってことだよな。ありがてえ…。

「ああ、俺も全力でぶつかせてもらうつ！」

俺の一声が開戦の合図となり、翔子の召喚獣が走ってきた。向こうは日本刀に腕輪という未知の力を持っているのに対しこつちはリーチゼロのメリケンサックだ。

俺は全神経を集中して翔子の動きを観察し、攻撃をかわしながら拳を放つ。いつ腕輪が発動されても離れられるよう無茶な動きはしない。焦らず、的確にダメージを与えていく。

「……つ！」

さらに俺の攻撃を受けて翔子の召喚獣の点数は三百近くとなつた。一輝や明久のように一撃で倒せるほど操作が上手くないため、少しづつ削っていく。

「……わかつた」

「あ？」

俺の召喚獣と距離を取り、翔子が口を開く。いきなり何だ…？

「……雄二の攻撃パターンは理解した。ここから反撃開始」

つ!? やはり時間をかけすぎたか…。翔子の記憶力を考えればこうなる事はわかつてたのに…！

「……腕輪発動」

起動ワードと共に翔子の召喚獣に変化が現れる。召喚獣の足下にわずかながら雪が積もり、日本刀や鎧がみるみる内に凍つっていく。

「一体何が…？」

「……氷の剣と鎧、完成」

その名の通りだつた。日本刀は白い冷気を放ち、鎧は薄い氷で覆われている。そして召喚獣の髪も翔子の黒髪から一変、白に変色していふ。そんな召喚獣の大きな変化を見てざわつく周囲を気にせず俺は召喚獣を突貫させた。

腹に右の拳を入れ、ダメージを与えた瞬間、予想外の事態が起きた。「なっ!？」

翔子の召喚獣に触れている右の拳が凍りつく。慌てて拳を引っ込め翔子の召喚獣から離れる。召喚獣の右手は凍つたまま。しかも少

しづつ点数が減り始めている。

「これが翔子の腕輪…」

「……冷気を操る力。こういう使い方もあるみたい」

どうやら翔子の方はぶつつけ本番だつたらしい。鎧に攻撃したらその箇所が凍つっていく。パンチやキックの場合手や足が凍つてしまい、凍傷？によつて点数が減り続けるつて事なのか？
武器があれば問題はなかつただろうが俺の場合はそれがない。
……おい、相性最悪じゃねーかこれ？

「……ここから、巻き返す」

そう言い放つ翔子に若干ながら戦慄してしまつた。

一輝視点
二人の激闘をFクラス陣営で観戦する俺と瑠璃花。

「翔子の奴、容赦ねえな」

「坂本君大丈夫ですか？ 戰意喪失してませんよね？」

「しかけてるかもな。けど、心が折れてなきやまだ戦えるさ」

翔子の本気とも言える圧力に後ずさる雄二を気にかける瑠璃花に軽く返す。そう、戦意を失くす事と心が折れる事は同じようで違うの

だから。

「一輝は坂本君の勝利を信じてるんですか？」

「ああ、勝手ながら信じてるさ。だからといって負けたとしても責めるつもりはないがな」

ま、俺に言わせて貰えば、雄二は既に欲しいものを手にしている。この勝負で勝とうが負けようが関係ない。アイツがそれに気づけるかどうかなんだ。たぶん翔子も雄二にそれを気づかせる為に全力をぶつけている。

乗り越えれば見える景色もある。さあ雄二、そこからどうやつて巻き返す？

【数学】

Fクラス 坂本雄二 176点（右手の凍傷により少しづつ減少）

V S

Aクラス 霧島翔子 289点

Aクラス戦（6）

雄二視点

翔子が腕輪を発動してからというもの、あれから全くダメージを与えられず翔子が繰り出す猛攻を避け続けるだけだった。

「あぶねえっ!」

冷気を放つ日本刀による突きをギリギリの所でかわした。集中力が切れかけてきたのを悟り、翔子の召喚獣から離れる。

「まいったな……」

そう言いたくなる。翔子の召喚獣は腕輪により氷の鎧を纏い、攻撃すればこちらもダメージを受けるオマケ付きだ。実際俺の召喚獣の点数は少しづつ減り続けている。いまや点数差は二倍近く。

（昨日一輝と練習してなかつたらとつに諦めてたな：）

問答無用で腕輪を使つてきたあのバカに怒りを覚えつつも感謝し、打開策を考える。そして昨日の特訓で一輝の言つたことを思い出す。

『柔道の投げ技だつたり、器械体操のアクロバットだつたり、召喚者が持つてる技術は召喚獣に反映させることが出来るんだ。

だから雄二、お前にしか出来ないやり方で戦え。点数差関係なしに翔子と渡り合うにはそれしかない』

それについては寝る前だつて考えた。俺にしか出来ないやり方といえばアレしかねえ。上手くいくかはわからねえ。下手すりや自滅になるが他に手もない。

覚悟を決めた俺は召喚獣の構えを解いた。予想外の動きに翔子はキヨトンとする。

「……雄二？」

「そういうや、お前は俺が喧嘩する所なんて見たことがないだろうな」

俺は自分から喧嘩を売つたことはほとんどない。『悪鬼羅刹』と呼ばれるようになつた今でも売られた喧嘩を買うスタンスを取つている。

格闘技をやつてた訳ではない俺の戦法はハツキリ言つて自己流であり、手強い相手にはこういつた手を使う。

「ほら翔子、どこからでも掛かつてこいよ」

両手を広げて相手を挑発させる。喧嘩を売つてくる連中はこうやって敵愾心を煽れば普通に相手できる。だが今回もこの手を使う。俺の意図が分からず警戒しつつも、翔子は武器を構えて自分と俺の召喚獣の距離を縮めていく。

こちらは右手が凍つてて使い物にならない。使うのは左手だ。点数も百点を切つていい。チヤンスは一度きりだ。

そして時は来た。翔子の召喚獣は素早い動きで迫つてくる。

（こつからはじんけんだな。上から来るか、横から来るか、それとも
……）

集中力を高めてギリギリまで引き付ける。そして日本刀の間合いに入つた瞬間、翔子の召喚獣は刀の切つ先を俺の召喚獣に向けて突き出す。

（突きだつ！）

ドスンツ！

【数学】

Fクラス 坂本雄二 87点（勝負が決まったため停止）

V S

Aクラス 霧島翔子 D E A D

喧嘩において俺が手強い奴に使う戦法、それはカウンターだ。突進してきた翔子の召喚獣の体重が乗つたことで俺の召喚獣の左拳は見事に鎧を突き破り心臓を貫いた。三百点近くあつた翔子の召喚獣は消滅した。

『勝負あり。三対二の結果この戦争、Fクラスの勝利となります』

どちらが勝つてもおかしくない白熱した戦争。だからこそ勝ったFクラスだけでなく、負けたAクラスからも、拍手喝采が鳴り響く。そんな中、俺は翔子の傍へと歩く。伝えたいことを伝える為に。

「……雄二」

「翔子、なんで俺がAクラスに試召戦争を仕掛けたか分かるか？」

俺の問いに翔子は首を横に振る。まあ当然だな。

「証明したかったんだ。世の中学力だけが全てじゃないって事を。だからこそ文月学園に来た。最底辺のFクラスに入つて成績トップが集うAクラスに勝つことでそれを証明したかった」

「……そう」

「……だがそれは、眞実から目を背けている言い訳に過ぎなかつた」

「……え？」

「勉強が出来る事以外何も持つてなかつたあの頃の俺自身が嫌いだつた。冷めた態度、大人ぶつた態度で周りに接し、学力の低い者は上級

生ですら見下す。そうやつて無駄に敵を作りそして…翔子を巻き込んだ俺自身が許せなかつた。あの事件でお前、今でも責任を感じてゐたいだしな」

「……」

「俺はAクラスに勝ちたいんじやなく翔子、お前に勝ちたかつた。俺が昔と変わつても、何度突き放しても、決して離れることなく自分の思いを貫く。そんな強いお前に勝つ事こそ、あの頃から俺の探していた答えだと気づいたんだ」

気付かてくれたのは俺の親友だがな。

「さて、勝つたら一つ命令できるんだよな？　今使わせてもらう「……かまわない」

「好きだ、翔子」

「……え…？」

「前々から決めてたんだ。お前に勝つたら告白するつて。ただ『元神童』でも『悪鬼羅刹』でもない、坂本雄二として、学年主席の霧島翔子に勝つた男として告白したかった。：嫌だったか？」

フルフルと首を横に振り、口元に手を当て、涙を流す翔子。

「……嫌じや、ない。嬉しい、雄一っ！」

涙ながらに飛びつく翔子を抱き留める。

「長い間ずいぶん待たせたな。今まで離れていた分、ずっと一緒にいような？」

一輝視点

「よかつたですね、翔子」

「雄二もだな。つたく、やつと素直になつて…」

教室の真ん中で抱き合う二人を微笑ましく見届ける俺と瑠璃花。しかし残念なことに全員があの二人を祝福している訳ではない。教室の隅で何やら怪しい動きが…。

「…あなたの予想がここまで当たると怖いですね」

「当たつて欲しくなかつたけどな。それじゃ、最後の仕上げに行くから、いつでも出れるように準備してくれ」

「わかりました。気をつけてくださいね？」

幼馴染みに心配されつつも、俺は雄二達の下へと走る。

助走をつけて。

つまらない戦争

雄二視点

『諸君、ここはどこだ?』

『『最後の審判を下す法廷だ!!』』

『異端者には?』

『『死の鉄槌を!!』』

『男とは?』

『『愛を捨て哀に生きる者!!』』

『宜しい。これより第一級異端者、坂本雄二の処刑を開始する。者共
かかれえー!』

『『YEAH!! Let's Party!!』』

『初陣は俺がいくぜヒヤツハーツ!』

翔子を慰めているとどこからか黒い覆面とマントの集団が現れ、そ
の内の一人が俺達に向かつて飛び掛かつてきた。気がつくのが少し
遅れたせいで俺は翔子を後ろに庇う事しか出来ずソイツの飛び蹴り
を一発を喰らう覚悟でいた。しかし…

「てやああああつ!」

『『ペボつ!?』

『『ふ、福村あああああつ!?』』

横から跳んで現れた何者かが福村?を蹴り飛ばし、俺達の前に着地
する。ソイツは…

「反射的とはいえ咄嗟に翔子を庇うとか、やるじやないか雄二」

よくやつたと笑いかけてくる親友、一輝だった。そして覆面集団の
一人（恐らく須川）が一輝に指をさし

「こ、小波キサマつ！ 我々『FFF団』を裏切る気か!?」

「何を言つている？ お前達の宗教団体に属した覚えはないぞ？」

当たり前の返答をする一輝。てかFFF団ってなんだ？

「つーかお前ら何をやつてるんだ？ 何故雄二に襲いかかる？」

「ふつ：いいだろう。横溝、罪状を読み上げろ」

「了解です須川会長。えー被告人坂本雄二は我等がFクラスの生徒でありながら文月学園の華、霧島翔子に告白し見事に結ばれーー」

「長い、簡潔に述べよ」

「彼氏彼女の関係になれて羨ましいであります！」

「うむ、実に分かりやすい報告だ。よつて坂本は有罪、死刑」

「「死刑——つ!!」」

要するに嫉妬か：バカだろコイツら。そんな事を思つていると一輝が

「お前達の言いたいことはわかつた。だがそんな事を黙つて見ている訳にはいかないな」

一輝は二人の教師に向かつて

「高橋先生！ 暁先生！ Fクラス男子四十人に試召戦争を挑みます！ 召喚許可を！」

一輝の発言に教室にいる殆どの人が驚きの声をあげる。一人で四十人を相手にするとか正氣か？

『小波君。気持ちはわかりますが、私情による召喚獣の使用は『許可する』暁先生つ!?』

『高橋先生。ここで暴力事件を起こすわけにはいかないでしよう？このあとの戦後対談を平和的、円滑に進めるためにも彼等には補習室に行つて貰いましょう。小波、頼んだぞ？』

「任せてください！」

暁先生の説得により高橋先生もため息をつき了承する。

『……仕方ありませんね、許可します。科目はどうしますか？』
「家庭科でお願いします」

……つて、よくよく考えたら何も黙つて見学する必要もねえだろ。つたく、仕方ねーな。

「さて行くぜ…サモーー」

起動ワードを言う直前に肩を掴まれた。誰？

「一人でカツコつけてんじゃねえよ一輝」「……加勢する」

家庭科の召喚フィールドが張られ、召喚許可も貰った。相手は四十人だが、万が一の為に瑠璃花も待機している。

一輝視点

雄二……翔子……。

「なんだか面白そうな事をしてるね」

「仲間のピンチを見過ごすわけがなかろう」

「……任せろ」

「ウチを忘れないでよねー」

「頑張りますっ！」

明久……秀吉……ムツツリーニ……島田……姫路……。

「僕も力を貸そう」

「彼等にはお仕置きが必要ね」

「ボクも力になるよー」

久保……木下姉……工藤……。

「みんな、ありがとう」

予想外の展開だな。本当なら俺が腕輪の力で殲滅し、うち漏らしを瑠璃花に任せるつもりだったんだけど……。仕方がない、と教室の壁にもたれている瑠璃花に視線を向ける。

(作戦は無しだ。お前もこっちに来て一緒に戦え)
(やつぱりこうなりますよね)

小学校の頃からずつと一緒にいた為、俺と瑠璃花は言葉を交わさなくて会話（意志疎通）ができる。作戦中止を聞いた瑠璃花は予想通りと言わんばかりの顔でこちらに歩いてくる。

「姫路さん、島田さん。油断しないでくださいね？」

「もちろんですっ！ もうあんな思いはしたくありませんから」

「ウチ等Fクラス女性陣の力を見せてやろうじゃない!」

：瑠璃花の奴、いつの間にあの二人と仲良くなつたんだ？

「あれ？ そういえば上守は？」

「彼女なら君との戦いを終えてすぐ生徒会室に行つたよ。元々忙しい所に僕達クラスメイトが無理を言つて代表メンバーに入つて貰つてた訳だしね」

俺の質問に久保が答えてくれる。ふーん…そつちもいろいろ事情があるんだな。

「よーし皆、気合い入れて行くぞ！」

「「おおおーーーっ!!」」

こうして、F & Aクラス主力メンバー対FFF団による試召戦争は十分の激闘の末に幕を閉じた。

：正直な話、こちらの問答無用な蹂躪劇であるという事だけ言っておく。

戦後対談（3）※

「戦死者は補習〜！」

『『『ぎやああああつ!!』』』

戦争が終わり、西村先生がFクラス男子四十人を担いで教室を出ていった。…どうやって？

『それでは両クラス、戦後対談を行つてください』

高橋先生、冷静に話を進めないでください。

「……雄二、私達の負け。素直に教室を明け渡す」

とまあ、色々あつたけど無事に始まつた戦後対談。代表の翔子が前に立ち、雄二にクラスの総意を伝えた。

翔子の後ろにいるAクラス陣を見る。泣いてる人、落ち込む人、そういう人達の肩に手を置く人。全員悔しい気持ちが露になつている。負けて設備が入れ替わる以上当たり前の反応だ。

「それなんだが、俺達は設備を交換するつもりはない」

まあ、当然こうなるよな。雄二の宣言を聞いてAクラスが騒ぎ出す。Fクラス連中にも騒ぐ奴はいたんだろうけど、ソイツらは全員補習室に行つた。ここにいるのは全員物分かりのいい連中だけだ。

「ちょっと待つてよ。設備を入れ替えないなら貴方達は何のために試召戦争を仕掛けたの？」

寄ってきた木下姉の問いに俺が答える。

「実は今朝学園長に許可を貰つてね。Aクラスに勝つたら希望者だけに再振り分け試験を受けさせて貰うことになつたんだ」

「再振り分け試験? それでFクラス以外の教室に行く気?」

「いや、俺達は設備なんか気にしてない。ただ振り分け試験を受けれずに入った人達にチャンスをあげたかつたんだ。だけど…」

まさか大事な事を忘れていたとはな…。

「どうかしたの一輝?」

明久の呼びかけを無視して俺は姫路のいる方へ顔を向け。そして

「姫路。お前はーー

——Aクラスに行く気はあるのか?』

気づいたのは久保との対戦の最中に言つた姫路の一言だ。

『……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが』

それを聞いて俺は大事な事を思い出した。

姫路の意思を確認していなかつた。姫路がAクラスに行きたいのかどうか聞いていなかつた。

「小波君…」

「姫路。振り分け試験で体調を崩してFクラスに来た事は運が悪かつたとしか言えない。俺も明久と同じ気持ちだ。お前にはAクラスに行つて欲しい」

「吉井君…………つ！ 坂本の言う通り…。吉井君達はつ！」

「姫路さん……うん、君の思つてる通りだよ。今回の戦争は君の為なんだ」

俺と明久を交互に見つめる姫路。そして姫路の予想は当たつていると言う明久。

「せつかくAクラスに行くチャンスを手に入れたのにそれを無駄にしてしまつたら意味がない。

でもな、Fクラスで過ごした五日間がお前にとつてマイナスばかりだつたなんて俺には思えない。そしてなにより姫路の今後は姫路、お前自身で決めるべきだ。

今日まで意思確認もせずに今更なんだ？ と思うけど、自分の本心と相談して、答えて欲しい。振り分け試験を受けてAクラスに行くか、受けずにFクラスに残るかを」

「わ…私は…」

うつむき悩む姫路。しばらくして覚悟を決めて顔を上げる。

「私はーー

ーーFクラスにいたいです！」

明久視点

Fクラスに残る事を選んだ姫路さん。相談もなく勝手にやつた事
だけど僕としてはやつぱり姫路さんにはAクラスに行つて欲しかつ
た。Fクラスの環境は姫路さんの体にはやつぱりよくないし…。で
も彼女が自分で決断したことなら文句は言わない。

ただ：胸にぽつかり穴が空いたようなこの感覚はなんだろうか？

島田さんと笑いあつてゐる姫路さんの近くでは一輝と南雲さんが
喋つてゐる。

「あなたが残るなら私もFクラスに残りますよ」

「…学校でまで俺に拘らなくていいんだぞ？ それに、あの教室にい
たら体調崩すかも知れないし」

「貴方の側にいる事が私の務めですから。あと私はそう簡単に体調な
んて崩しませんよ。貧乏人をなめないでください」

どうやら南雲さんもAクラスには行かないらしい。やつぱり一輝
と一緒にいるんだね。…てゆーか南雲さんつて意外とたくましい人
だつたんだ…。

「……それじゃあ、戦後対談の続きを」
「おつと、そうだな」

若干方向がズレてしまつた戦後対談。霧島さんが戻して雄二が返
事をする。

「とは言つてもする事が無くなつたな。誰も振り分け試験を受けない
以上、学園長への提案も無駄になつちまつたし」

「……だつたら、ある程度の頼みなら聞いてあげられる。設備の交換
を免除してくれたんだからこれくらいはする」

霧島さんの提案にAクラス全員が賛同の意思を示す。そこに一輝が雄二に近づき

「雄二、翔子。俺から提案いいか?」

「一輝か、いいぜ」

「……なに?」

「週一でいいからAクラスの教室で、合同で授業を受けさせて欲しい。姫路は自分で決断してFクラスに残つたし、設備の悪さに関してはこつちも対策は立てるけど、それでも心配になる奴もいるからさ」「

そう言つて僕に視線を向ける一輝。どうやら気を遣つてくれたみたいだね、ありかとう。

「……それくらいなら構わない。みんな大歓迎」

「でも代表。ここにいないFクラス男子達が問題を起こさないとは限らないわよ? さつきのように嫉妬で襲い掛かつてきたら授業にならないし…」

優子さんが懸念材料を挙げる。確かに、須川君達が暴走する度に授業が止められたらこの提案が白紙になるだろう。

「アイツらのことなら問題ない。『眞面目に授業を受ける奴はモテる』つていえば連中は静かになるから」「そんなことで大人しくなるの!?」

その反応は最もだ。今まで勉強してこなかつた彼等がそれで眞面目に授業を受けるなら苦労はしない。でもそれが彼等(Fクラス)なんだよねえ…。

「うーん……わかつたわ。さつき代表も了承したけど、アタシもその提案を受け入れるわ」「決まりだな」

少し考えて提案を了承した優子さんに自分の案が通つて満足顔になる一輝。これで姫路さんの負担を少しほ減らせるんだと思うと僕はホッと胸を撫で下ろす。

終結

明久視点

戦後対談が終つたのは、本来ならその日最後の授業をしていた時間だ。しかし試召戦争の為に今日の授業はなく放課後扱いだ。

眞面目なAクラス生徒の行動は様々だ。クラスメイトと雑談を交わす者、自分の席で自習する者、荷物を纏めて帰っていく者、それほどこの学校でも見る光景である。

僕達Fクラス生徒がいつまでもここにいるわけにはいかない。雄二達と教室に戻ろうとした時、チヨンチヨンと右肩をつつかれた。

「ねえねえ明久くん。久しぶりにこうして会えたんだし、何処か寄り道していかない?」

振り向くと口元を猫のようにして寄りかかってくる愛子ちゃんがいた。近い近い。

「寄り道? 今日はバイト休みだし予定もないからいいけど

「決まりだネ☆ ジやあさつそくーー」

「「待ちなさいっ!!」」

僕の腕に抱きついて教室を出ようとする愛子ちゃんを優子さん、姫路さん、島田さんの三人が阻む。三人は愛子ちゃんを僕から引き剥がし、教室の隅へと引っ張つていった。

『いたつ。ちよつと、なにするのさ』

『それはこつちのセリフよ愛子。なにちやつかり明久君をデートに誘つているのかしら?』

『工藤さんズルいですっ!』

『抜け駆けしようたつて、そうはいかないんだからね!』

何を話し合っているんだろう…。上手く聞き取れない。

そんな中、Aクラスの扉が開く。振り向くとついさつきFクラス男子四十人を担いで行つた馴染みの教師が教室に入つてくる。

『あれ、西村先生？ 須川達の補習はどうしたんですか？』

『小波か。アイツらなら心配はいらん。念の為に扉と窓に高圧電流の罠を仕掛けておいたからな。俺がいなくとも逃げ出すことなく課題に取り組んでいる筈だ』

二人の会話を聞いている僕。…おかしい、うちの学校はいつからアルカトラズのような脱獄不可能刑務所になつたんだ？ 高圧電流の罠を設置する学校つて一体…。

『そんな事より小波。お前も補習室行きだ』

鉄人に手首を掴まれている一輝。その本人は補習室に連れていかれる理由を理解し納得している。

『余所の教室で相手を蹴り飛ばすのは感心せんな。だが、坂本と霧島を護る為という事を考慮して反省文と厳重注意で大目に見る』

『はあ…寛大な決定に感謝します。雄二が翔子に勝てばあの展開になる事は予想していましたが、対策を立てる時間が無かつたものですから…。

瑠璃花。遅くなりそだから先に帰つていいぞ?』

『大丈夫ですよ。終わるまで待ちますから』

というやり取りを終えて鉄人に連行される一輝に愛想笑いしていると、教室の隅でなにやら話しあっていた四人がこちらに戻つてきた。

「明久くん。三人も一緒に来る事になつたんだけど良いカナ?」

「良いも何も断る理由はないよ。大人数の方が楽しいしね」

「よーし、じゃあ吉井の奢りでクレープ食べに行こつ」

「ははは、皆。あまり高いものは勘弁してね?」

「え、明久君。お金の方は大丈夫なの?」

「バイトでそれなりに稼いでるから問題ないよ」

「いろいろ体験してるんですね?。吉井君偉いです!」

『……雄二』

『ん? なんだ翔子』

『……あの、その…』

『……俺らもどつか寄つてくか?』

『つ!? ……うん!』

『んじや鞄持つてこいよ。待つてやるから』

雄二と霧島さんはデートか?羨ましい限りだよ。僕もいつか彼女作つて楽しくデートしたいな。

「吉井君。何してるんですか?」

「吉井。早く行こ」

姫路さんと島田さんが左右から抱きついてきて、さらに優子さんと愛子ちゃんに背中を押されて僕はAクラスを出た。

教室にいたAクラス男子達の悔し涙と嫉妬の視線には一切気付くことは無かつた。

暁視点

「いやあ、まさかFクラスが勝つなんて以外でしたね」

小波や坂本、吉井達がいなくなつてある程度静かになつたAクラス教室で俺は先輩である高橋先生に声をかける。年齢は俺の方が上だが、教師としてのキヤリアは彼女の方が上なのだ。

そして俺の言葉に返事もせず、淡々とA・Fクラスの資料を纏めている先輩。

「…ショックでしたか？ 貴女が受け持つ最優秀成績を誇る生徒達が負けたことは」

下手すると挑発にも取られる言い方をしてみた。すると高橋先生は手の動きを止め、少し黙りこんだあと口を開く。

「私としても驚きは隠せません。ですが負けた事で驕りや慢心が無くなり、彼等（Aクラス）の学力向上に繋がるというのならば、次は負けないでしよう」

「今回の負けは価値ある敗北と見てるんですね」

「勝ち続ける事だけが生徒の成長ではありませんからね」

「こもつとも…………ん？ この紙は

「Fクラスの生徒名簿ですか…………あれ？」

「暁先生どうかしましたか?」

「いえ、Fクラスの名簿に聞き覚えのない女子生徒の名前がありまして。この子です」

「その名簿見せてください。姫路さん、島田さん、南雲さん……ああ、彼女ですか」

「ご存知なんですか?」

「ええ。彼女は学園長から授業免除を言い渡されますから。でもーー」

「授業免除!? それって世間的にありなーー」

「静かに。ここは教室。広いといつてもまだ生徒がいるのですから」

「す、すいません」

危ない、どうやら機密事項らしい。運良く誰も聞いてなかつたのが救いだな…。

「ふう…とにかく、学園長の許しで授業を免除されて、学校にいる間は校舎のどこか…恐らく図書室辺りで過ごしている生徒がいるのですよ。振り分け試験を受けていないので当然Fクラス在籍になりますが」

「よく学園長が許可しましたね?」

「彼女の親が学園のスポンサーの一人のようとして。成績も文句なしですから、それくらいのワガママは聞いてやると学園長はいつてました」

「あの人らしいというかなんというか…」

「彼女が今回の試召戦争に参加していたなら、こちらの黒星がもう一つ増えていたでしようね」

そこまでの逸材がFクラスに! 小波といい、吉井、坂本といい…

これは来月の清涼祭が楽しみになつてきたな。

座談会

第一回：

「バカテス ポケット座談会～」
いえーいっ！

「とゆー訳で始まりました、第一回バカテス ポケット座談会。とりあえず作者さん、第一章完結お疲れ様でしたー」

ありがとうございます。

「まつたく…八話目で挫折しかけた時はどうなるかと思つたが、よくまあ挫ける事なく更新出来たものだ」

ははは：自分でも驚いてますよ。あの時は何時間考えても何も思ひ浮かばずにいましたから。もうどうにでもなれど、当分サイトは見ないようにしてましたから。

「ふむふむ、それでー？ 立ち直ったキツカケはあるんですかー？」

二十日くらい経つて、やはり気になつてしまい恐る恐るサイトを見たんです。そしたらこの小説にお気に入り登録してくれた人が増えてたんですよ。…まあ、あの時点でお気に入りはたつたの三人でしたけど…。

それでも嬉しかったですし、一度投稿した以上最後までやろうと思えました。この作品にお気に入り登録してくれた人達の為にも頑張ろうかーー

「うんうん、よくできましたね。ナオつちは感激ですよー」

待つて、まだ途中なんだけど!?

「作者。あなたの話だけで盛り上がるわけにはいかないだろう。他にも話すことはあるんじゃないのか?」

…そうでしたね。前々から一章終える毎に座談会を開くつもりではいましたが、いざ開いて見ると一人で何をすればいいのか、何を話せばいいのか分からずでして…。さて、そろそろ第一章を振り返ってみましょーか。その為の座談会ですしね。

「とは言つても序盤はバカテス原作と変わらない流れだな」

【原作との分岐はアキちゃん（明久）がユージン（雄二）に試召戦争を提

案してたところですかねー?」

：その呼び方、本人達から許可をもらつてるんですか？ まあそうですね。そこに本作の主人公、一輝を介入させて原作と方向性を変えました。

「設備を取らず再振り分け試験を受ける、なんて他の作品でもやつているがな」

「でもクラス内の模擬試召戦争はあまり見ないですよー？」

バカテスの漫画を読んで：あつこのアイデアいただき！ と思いつつやりました。そして点数で勝負が決まらない以上、操作の訓練として相手をBクラスからCクラスに変えました。

「そのお陰で登場しました、我等が生徒会長紫杏ちゃん！ パワポケファンなら誰もが待ち望んだ事でしようキャラが早くも登場しましたよ！」

「パワポケ10では自治会長だつたがな。それにしてもスペック高すぎないか？ 確かに文武両道でカリスマ性はあつたが」

バカテス原作に生徒会があつたかどうかわかりませんでしたから、強キャラ感を出したかつたんですよ。紫杏だけじゃなく他の役員も。「だからカズちゃんとアカリんを登場させたんですね？ でしたらあたしも？」

すいません、あなたの出番は少ないです。最悪本編で名前が出てくるかどうかかも今は分かりません。

「そんなー！ ならすずちんを差し出します。好きに使つて良いですから私にも出番をください！」

「高科？ さらりと私を生け贋に使うな」

：話を進めましょうか。さらに原作との分岐があつたとすればそれは、Aクラス戦前日に雄二に日本史のテストをやらせたことですね。

「小波君、ですか？ 彼つていろいろと立ち回つてますよね。アキちゃんも言つてましたけど、何が正しくて何が間違つているのかを冷静に見極められる。：彼つて本当に高校生ですか？」

一輝は全国大会優勝を経験しました。ですが彼は当時リーダーと

して足りないものが多いために悩み苦しみながらも仲間達の協力のもと栄光を手にしましたからね。だからこそリーダーとして悩まない雄二の事が心配だつたのでしょうか。後悔させない為に。

「で？ Aクラス戦が始まつたわけだが、吉井明久は原作同様負けるのだな」

本当は一輝を負かす予定だつたんですけどね。生徒会長に勝てたのは上手く行き過ぎだつたかなーつと。

「…主人公を負けさせる考えを持てるとは作者よ、お前は鬼畜か？」

失礼なつ！ 私は聖人君子ですよ！

「自分で言うな…」

「それでAクラス戦を通じてアキちゃんがハーレム作つてる事を皆が知るわけですねー。彼、本当に誰かに刺されたりしませんよね？」

そこは彼自身の問題でしょ。自分の身は自分で守らないと。

「それ言つてしまふんですかー？」

そして一輝の対戦相手はまたもや生徒会のメンバーです。彼も大変ですね。

「どの口が言う？ まさか副会長に上守甲斐とは無難だな」

パワポケ原作でジャジメントの幹部になつた紫杏の秘書ですからね。会計でも良かつたんですが、そうなつたら残つた副会長の椅子をあのキャラに任せるのはダメかと思いまして。

「そーいえば、結局会計が分からず終いでしたね。誰なんですか？」

ネタバレになるので言えません。ヒントをあげるなら意外な所で紫杏と関わつてるキャラです。

「そしてFクラス、勝つてしまいましたね」

「ああ。恐らく：いや間違いなくバカテス原作における最大の分岐だぞ？」

ええ、やつてやりましたよ。これから先の展開はまだ未定ですが、完結目指してやつてやりますよ！

「三週間も更新をサボつてた人が何を言つている？」

ぐふつ：そこを突かれると胸が痛い。まあ、しばらく小説から離れていたお陰で気分転換出来たというのもあるんでしようね。

「それでここまで続けるとは作者さん中々ですよ。それより作者さんに一つお願ひがあります」

？ なんですか？

「妹を本編に出してくれませんか？ それなら私は出番がなくともいいですから」

妹さん？ …ああ、出す予定ですから安心してください。

「ホントですかっ!? やつたー！」

回想シーンでの登場になりますが。

「え、本編には出さないんですか？」

あの性格の子を野獣の巣窟である文月学園に入れられませんからね。ちなみに貴女の方の出番が少ないので二人が大学生だからです。「む、何故大学生なんだ？」

パワポケ原作では貴女は南雲瑠璃花より二つ上ですから、この作品では貴女は大学生なんですよ。そしてパワポケ10で仲の良かつたそちらも同じ年齢にしましたから…。

「意義アリです！ それなら私達と同い年の紫杏ちゃんがルリつちと同じ学年なのは可笑しくないですか！」

南雲さんと神条さんは11の裏サクセスでクラスメイトになりましたから。それがなければ

神条さんとその取り巻きを同学年にはしませんでしたよ。

「その11の裏サクセスに登場した何人かが三年生で登場していた気がしますが、それは何故ですか？」

あの二人は先輩キャラが似合っていると思ったので。三年生として登場させるキャラは他にもいますよ。もちろん、一・二年生にも。「ぐぬぬ…要するにすずちゃんではなく紫杏ちゃんと親しければ私も出番はあつたということですか!? すずちゃんではなく！」

「……」

「すずちゃん？ 突然黙りこんでどーしたんですか？」

「…瑠璃ちゃんに会いたい」

「そういえばすずちゃんとルリつちは幼馴染みでしたね」

「…小学校の頃、私は瑠璃ちゃんがクラスで苛められて いたなんて知

らなかつた。あの子が転校して初めてその事実を知つた

あー、パワポケ原作と違つてこの作品では貴女と南雲さんの関係は疎遠になつてますからねえ。南雲さん自身、若干人間不信に陥つてしますし…向こうが貴女を覚えているかどうか。

「あの頃、何もしてやれなかつた私の事など忘れてくれて構わない。ただ私は…もう一度あの子に会いたい。この目で確かめたいんだ。瑠璃ちゃんが笑顔でいるのかどうかを…！」

「すずちゃん…」

……。（スツ…）

「…作者。これは？」

来月、文月学園で開かれる清涼祭の一般招待券です。これで学園に行つて南雲さんに会いに行けばいい。

「作者…ありがとう」

ふう…これにて問題解決。

「してません！ 清涼祭に行くつて事はすずさんは本編に出れるかも知れないつて事じやないですか！ あたしの分は？ あたしも欲しいです！」

そういうと思つて、招待券を二枚、あの人に渡しましたから。二人で行つてきなさい。

「わーい、これで問題解決ですねー」

チヨロくないですか？ さて、これ以上続けてもグダグダになるだけなので。まあ本作品最初の座談会ですし、これでお開きにしましう。

読者の皆さん。誤字脱字の修正や見直しの為、次のページ更新は来週の日曜日になります。

次回からはバカテス原作における短編集や各キャラの日常編をはさんでから二章に行こうと思つていまーす。

以上、第一回バカテスピケット座談会でした。今回のゲストは作者である私と

「天月 五十鈴（あまつき いすず）と」

「ナオっちこと高科 奈桜（たかしな なお）でしたー」

日常編

吉井明久の朝

明久視点

永きに渡る試召戦争も終わり、平和な休日の朝。

「おはよう（）ぞ」いります、アキ君」

「…おはよう、姉さん」

目を覚ますと、部屋のベッドで寝ていた僕の上に姉、吉井 玲（よ
しい あきら）が覆い被さつていた。顔も近いし。

「…何をやつてるの？」

「おはようの T Y ——」

姉が言い終える前に姉の顔を両手でガシツと掴む。

一しばらくおまちくださいー

「さて、朝食の支度をするかなー」「んづ！」

油断した姉のスキを突いてベッドに引きずり込み簣巻きにした僕
は部屋を後にする。姉さんに関しては朝食が出来るまでは放置して
おくことにする。

これは春休みから続くいつも通りの朝だ。……残念な事に。

五年前、アメリカの大学に通うため両親についていく形で姉さんは
日本を離れた。大学卒業後もしばらく向こうで両親の仕事を手伝つ

ていたらしいが、高校一年の終わりに姉が帰国してきた。再会し、戻ってきた理由を聞くと

『アキ君のそばにいたいんです。ダメでしょうか？』

「だそうだ。別に嫌じやないし僕としては一人暮らしにも少し退屈していたところだつたから都合が良かつた。いざ姉と暮らして見ると最初は特に問題はなかつた。朝の接し方も普通だつたし。

しかし春休みに入つたあたりからスキンシップが激しくなつていつたのだ。テレビを見てたら後ろから抱きついてきたり、一緒に風呂に入ろうとしたり、一番ヤバかつたのは怪しい薬を使つて僕の貞操を奪おうとしたことだ（なんとか阻止出来た）。そして今現在どうとうキスを迫るようになつていて。

こういつたスキンシップは小さい頃にも何度かあつたけど、大人になつた今も変わらない（ただ変わらない）姉に頭を抱えてしまう。そして僕も自分の身を護るために手段は選ばないので。

「（ゞ）ちそ（ゞ）さ（ゞ）ま。アキ君の（ゞ）飯はいつも美味しいですね」

そして現在、簀巻きから解放し朝食を終えた姉の一言である。

「そう言つてくれると作つたかいがあるよ。…そうだ、今日は友達と待ち合わせしてるからもう少ししたら家を出るね」「そうですか。……もしかして相手は女ですか？」

時々勘が鋭くなる姉さん。その通り、僕は今から木下優子さんと出掛けることになっている。

「…うん。前に試召戦争の話をしたよね？　うちの学校の規則みたいなものでね」

Aクラス戦で霧島さんが出した提案、『負けた方は何でも一つ言うことを聞く』。そのルールは代表同士のものだけではなかつたらしく、そのため負けてしまつた僕は優子さんの命令を聞くことになった。

Aクラス戦後、姫路さーー瑞希ちゃんたちとクレープを食べてた際に優子さんがその話を切り出してきたのだ。そして優子さんの命令は

『買い物に付き合つてちょうどだい。今度の日曜日、予定空けておいてね？』

僕としては断る理由もなかつたから二つ返事で了承した。その側で瑞希ちゃん、美波、愛子ちゃんの三人が血の涙を流し悔しがつていた理由は分からなかつたけど…。

『そういう訳だから、試召戦争における約束事は絶対なんだ。両者の納得で反故にも出来るけど、何故か優子さん気合い入れてて…』

僕の話を聞いた姉さんはため息を一つ吐いて

「…仕方ないですね、わかりました。木下さん…でしたか？　彼女をちゃんとエスコートするのですよ？」

「精一杯尽くします」

不純異性交遊に厳しい所がある姉さんが女子との交流を認めてく

れた事に感謝し頭を下げる。

「ただしアキ君、今度姉さんともデートしてくださいね？」

そんなことを提案してくる姉。ははは…姉さんともデートつて、まるで僕が優子さんとデートに行くみたいにーー

「…アキ君？ 顔が赤いですが熱もあるんですか？」

ヤバい。自分でも動搖しているのがわかる。だがその前に撤回しなければならない。

「あ、あのね姉さん。僕と優子さんは買い物に行くだけでデートをする訳じゃなく…」

「アキ君、世間一般ではそれを“デート”と言うのですよ？ 男の子と女の子が一人きりで出掛ける事は正真正銘の“デート”なのです」

くつ、常識がズレてるような人に一般常識を諭されるとは…！

「ど、とにかくもう行くねっ！ 帰りは遅くなるかもしねーからー！」

僕は逃げるよう部屋を出ていく。ハツキリ言つて今の真っ赤な顔を誰にも見られたくないかったのだ。

待ち合わせ場所に着いた時には動搖も消え、今は何とか落ち着いて

いる。

「あら、明久君早いわね。遅れてくるかと思つたわ」

「ひどいなあ優子さん。僕だつてその辺のマナーは弁えてるつもりだよ?」

「ふうん、ちよつと見直したわ。それじゃあまづは近くの喫茶店で時間潰しましょ?」

「そうだね。他の店が始まるにはまだ少し早いし」

その後、優子さんとの買い物は普通に楽しむ事が出来た。時々見覚えのある女子三人の人影を見かけたけど、優子さんが気にしてない様子だったため僕も気にしなかつた。

坂本雄二の昼

雄二視点

全ての始まりは朝だつた。

目を覚ますと何故か俺の部屋に翔子がいた。一瞬不法侵入で警察に通報しようと考へたが思い留まることにした。通報したところでも『二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎』と言われて終わるだけだし、何より翔子は彼女だ。通報はしない。

結局のところ、真相はお袋が部屋に上げただけだつたがな。で、朝っぱらから家に来た翔子の手には映画の割引券が二枚。要是映画を観ようと誘つてきたのだ。まあ休日はやる事もないし良い暇潰しになるか。

そして現在にいたる。

「……雄二、早く行こ？」

「なあ、本当にこれを見るのか？」

今は午前十時過ぎ。俺は朝の軽い決断を後悔している。俺達は映画館のロビーにいて、受付前に置いてある上映スケジュールの看板の前で立ち尽くしている。翔子が指差している項目が：

『荒井紀香 愛のカタストロフ』

「おい待て、なんだこのタイトルは!?」

「……この映画を見て愛について学ぶ」

「破滅の未来しか見えねえぞ！ バッドエンドストーリーだろこれつ
！」

「……二回見る。暇なら寝てていい」

「……帰つていいか？」

「……帰さない。行こう」

「嫌だあああ離せえええっ！」

握り潰さん程の握力で俺の手首を掴み受付へと歩く翔子。一度決
めてしまつたら余程の事でもない限りコイツは止まらん。ヤバい、誰
か助けてくれ…。

「こら、こら二人とも、開店直後で人が少ないからつて騒いでいいわけ
じゃないぞ」

「か、一輝！ どうしてここに!?」

「翔子にあげた映画の割引券がまだ余つててな。せつかくだし瑠璃花
と一緒に見に来たんだよ」

翔子が持つてたあの券は一輝があげたのか!? しかしこれも天の
助け！ こうなつたら一輝と南雲に何とかしてもらおう。

「助けてくれ！ このままだとヤバそうな映画を二回観ることになる
！」

必死にスケジュール表の一点を指差す。その項目を見た一輝は苦
笑する。

「うわ……上映時間が三時間三十二分もあるぞ。しかも二回見るつて
ことは七時間四分だよな？」

「……今まで離れていた分雄二と一緒にいられる」

頼む二人とも、どうか翔子を説得してくれ。すると南雲が翔子に近づき

「翔子、映画の後に食事や買い物したくないの？　これじゃあせつかくのデートが映画だけで終わりますよ？」

「……別の映画にする」

アツサリと考え方直してくれた。南雲ナイス！

「せつかくだし四人で映画見ないか？　邪魔だと思うならいいんだけど…」

一輝からの提案。邪魔だなんてとんでもない。俺はデートなんて経験ないし右も左もわからん。翔子は今見た通りだ。だつたら一輝達に映画を選んで貰い一緒に見た方がいいだろう。

「……私は構わない」

「俺も構わない。てなわけで一輝と南雲、お前ら二人が選んでくれ。正直映画に関してはわからん。翔子もこの通りだからな」

「わかった。といつても俺もどれが面白いかなんてわからないからな。瑠璃花、何か見たい映画はある？」

「そうですね…このあとすぐ上映される映画は三つ。その中で翔子も坂本君も楽しめる映画はーー」

「なかなか面白かつたな、『カリムーの秘宝』

「……うん。意外なものがお宝だったことに驚いた」

映画を観終えて近くのファミレスで昼食を取り一輝達と別れた俺達は適当に町を歩きながら映画の感想を話し合っていた。それにしてもカリムーの宝ねえ…………。最初はどんな物かと思つたが蓋を開けてみたら意外すぎて驚いた。しかし納得もいった。

「南雲は俺と翔子に合う映画を選んでくれたわけだが、翔子はどうだつた？」

「……面白かった。さすが瑠璃花」

「なら良かつたじゃねーか。しつかし映画がこう面白いとなると他の映画も観てみたくなるよな。それこそ翔子が観ようとしたヤツとか？」

もしかしたら普通に面白いだけかも知れないしな。

「……雄二は映画観るのは久しぶり？」

「ん？　ああ、そうだな。中学ん時は喧嘩ばつかで一緒にいく相手もいなかつたし。明久達とはどっちかつつーとゲームで盛り上がり始めたからな。翔子はよく映画観るのか？」

「……うん。高校に入った今でも玲奈や瑠璃花を誘つて一緒に観てる」

玲奈？　…ああ、翔子の従姉の。

「最近会つてないからすぐに顔と名前が浮かばなかつたぜ。そういうや二年に進級してからアイツとは連絡取り合つてねーな。今日の夜にでも挨拶するか。翔子と付き合い始めたつてさ」

俺がそう言うと両手を紅くなつた頬に当てる翔子。かわいい奴め。そう思つていると遠くから声が

『女は度胸！　アタシ達のデートの邪魔は誰にもさせないわ！』

『ね、ねえ優子さん？　僕の腕を掴んで急に走り出して一体どうしたのさ！』

『明久君は知らなくてもいいのよ。大丈夫、どんなおじやま虫が飛んでこようともアタシが貴方を守り抜くから！』

『どうしよう！　男としてなんだか凄く情けないっ……』

「ん？　少し離れた通りを明久と木下姉が走っている。さらにその二人を追いかけている三人（推定で島田、姫路、工藤）の姿が。

「明久も苦労してるな。島田と姫路も大変だ」

「……優子も愛子も本気だから。……ねえ雄二」

「あん？　なんだ翔子」

「……映画も観た。昼食も食べた。……これでデート終わり？」

まだ終わりたくないのだろう、寂しそうに聞いてくる翔子の頭を撫でる。

「んなわけねーだろ？　そこら辺プラプラ寄つて買いたい物があつたら買おうぜ」

「……うん、ワインドウ・ショッピングつてやつ」

「なんだそれ」

あまり聞きなれないワードを軽く流して俺達は夕方まで楽しんだのだった。

小波一輝の夜

とあるバッティングセンターにて。

カキーン！

金属バットとボールのぶつかる音が響く。ボールはピッチングマシンの頭上を超えて、さらに向こう側のネットにぶつかって落ちていく。

「ラスト一球…」

最後まで油断せず、ゆっくりバットを構えて打撃に備える。

カキーン！

そして放たれた 140 km/h を超えるボールを俺はマシンを超えた向こう側のネットへと弾き飛ばした。

「ふう…」

十五メートル以上離れた位置にあるマシンの動きが止まつたことを確認して一息つく。喉が渴いてきた為ジュースを買おうと一旦ケージを出たところで声をかけられる。

「お疲れ様。これ飲んで一息つきなよ、小波君」

「…暁先生？」

これは奢りだ、と俺にスポーツドリンクを差し出す顔見知りの教師がいた。

「まさかこんな場所で先生に会うとは思いませんでしたよ」

「そうか？　俺はよく君が出入りする所を見かけるけど？」

「まあ…俺は最近先生と知り合いましたからね」

基本的に俺は休日は予定がなければ練習に励んでいる。今日は瑠璃花の買い物と映画に付き合つたけど。それでも夜は早めに夕食を済ませいつものように隣町のバッティングセンターで打つていた。

しかし意外な場所で意外な人と対面した。

キャップを外してペットボトルに口をつける。此処に来てからずっと打つていたから、スポーツドリンクがいつも以上に美味しく感じる。

「先生もよく此処で打つんですか？」

「ああ。でも今日は気分転換に打ちに来たんだよね。調子悪かつたのか、試合の結果が最悪でさ」

試合？　俺の表情で気付いたのか、先生は疑問に答える。

「たまにね、この町の野球チームに助つ人に入てるんだ」

「野球チーム？　この町にあるんですか？」

「まあね。これでも強いつて評判なんだよ？　暇なら今度試合観に来なよ」

「まあ…試合の日を教えて貰えるなら」

今度瑠璃花を誘つて観に行くか。

「そりいえば今日は南雲さんは来てないのかい？　いつも一緒にバツ

ティングセンターに来てるだろ?」

「今日は少し遅れてしましましたから。流石に女子を夜遅く連れ回すなんてしませんよ」

映画の後の買い物が長引いたからな…。 そう思つていると

「へえ…そうやつて女性を気遣つてやれるとは。君はいい男になるよ」

暁先生はうんうんと頷きながらバンバンと背中を軽く叩いてくる。音の割には痛くはない。

「話は変わるけど、小波君は自分の将来について何か考えているのかい?」

「あれ、なんですか急に?」「一応教師だからね。生徒の将来を早い内に聞いておきたいのさ。気に入った生徒は特にね」

「一応つて…あなたは正真正銘の教師でしょ?」

「将来なら決まつてますよ。俺の夢はーー」

今も昔も変わらない。

「プロ野球選手です」

「少し遅くなつたな」

時刻は九時を過ぎて辺りは当然真っ暗だ。いつもは自転車で通っているのだが、今日は瑠璃花がいなためランニングを兼ねて走つて来ていた。俺の町と隣町を繋ぐ橋を渡り、今は川沿いの道を走つている。

『あ～あ、やつとバイト終わつたよ～。でも脚疲れた～』

暗くてよく見えないが黄色っぽいベージュのカーディガンを着た他校の女子生徒が前方からフラフラと歩いて来る。今言つてたようにバイト帰りかな？

普通に彼女の横を通り過ぎた後でふと気付く。ここは川沿いの道だ。しかも彼女は道の端を歩いていた。フラフラな状態で。気になつて後ろを振り向くと

「あつーーー」

まさかのタイミングで体制を崩しやがつた。このままでは転んで川に落ちるぞ！

「危ないっ！」

ガシツ

倒れそうになつた彼女の手を掴んで引き寄せる。

「おつと。大丈夫か？」

「え？ …うん、ありがとう」

「こんな夜中にフラフラン歩いていたら危ないぞ？」

「う…うめん。バイトで疲れててつい。でも今まで日が覚めたからもうーー」

恐らく『大丈夫』と言おうとしたんだろうがそこで彼女は黙りこむ。そして俺の顔をじーっと見てくる。

「…………」ニコツ

なんだ、その笑顔は？

「どうした？ 急に笑顔になつて」

「何でもない。もう大丈夫だよ」

「ならいい。暗いから気をつけて帰れよ」

彼女にそう告げて走り出す。

ヒュー…

ん？ なんの音ーー

カコーン

「あぶなつ！ 一体なにが…って空き缶!？」

「ね、ねえちょっと！ アンタの名前は!?」

声を上げて問いかける彼女。今の空き缶はアイツが投げたのか？
俺は走りながら

「空き缶投げるような奴に名乗る名前はない！」

「あ、待ちなさいーい！」

逃げるよう走る。あの子の名前を聞くなり空き缶を投げてきた文句なりいろいろ言うべきなんだろうが今は早く家に帰る事を優先する。面倒事は御免だ。

第三者視点

男が暗闇の向こうに消え、彼女は喚くのをやめる。

『…ほう、このあたしから逃げようとはねえ…。でも非はこつちにあるし初対面の人間にあれはなかつたかな？ それよりも…』

多少は反省し、そして彼女は先程の事を思い出す。川に落ちそうになつた自分を助けた男を見たとき、自分の中で感じた何かを考える。そして：

『なんか面白そうな奴見つけた！』

その目は新しいオモチャを見つけた子供のようにキラキラと輝いていた。

合同授業

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子。当然のように俺の膝に座ろうとするな」

Aクラス戦が終わって数日がたつたある日の午後。Fクラスの生徒はAクラスの教室で合同授業を受けていた。戦後対談で決めた事だから批判は無い。むしろ歓迎ムードだった。Aクラスの教室はFクラスの教室に比べて四倍もの面積があるから座る場所は当然余っている。…金掛けすぎだろ。

授業（自習）が始まつてさつそく雄二と翔子がイチャつき始めた。まあ雄二も嫌なわけではないらしい。あのまま翔子が攻め続ければいずれ観念するだろう。

「…………工藤、これは分かるか？」

「当然、答えはこれだネ☆」

「…………流石だ。ならば、これはどうだ」

「負けないよ！」

「秀吉、そこの計算間違ってるわよ」

「なんじやと!? さつきの問題と解き方は同じのはず……」

「応用しなさい。そこはね——」

「あーもう！ 数学以外はお手上げだわー！」

「落ち着いて美波ちゃん。分からなかつたらちやんと教えますからめげずに頑張りましょう」

「うへへ……」

皆しつかり勉強に励んでいる。…いや、励んでいるように見えるだけかもな。

「一輝、どうかしましたか？」

「…いや、なんでもない」

「そうですか？」

隣の席に座る瑠璃花が様子を伺つてくる。しかし向こうもある程度察しているのか、俺の返答に対し追及はしてこなかつた。

実を言うと姫路、島田、木下姉、工藤の四人は時々ある方向へとチラチラ目を向けている。そこでは

「上守さん。この年代に起きた出来事つて…」

「正解よ。それより吉井君つて歴史科目は充分に取れてるでしょ？」

「私に教わる必要つてあるの？」

「一輝に比べればまだまだだからね。なんとしても四百点以上取つて腕輪を使えるようになりたいから」

明久は上守に勉強を教わつてゐる。まあ今後の試召戦争に備えて腕輪は持つべきかも知れないしな。それにしてもFクラスも交えて百人いる中で一人だけ白い制服というのはやはり目立つな。

「…気合いは充分のようです。わかりました、少しレベルを上げるとしましょう。覚悟はいいですね？」

「どんとこい！」

モチベーションが出てきたのか、さらに資料を取り出した上守を見ても明久は怖氣づくことはなかつた。寧ろさうに燃えている。それを見ている四人の女子もやる氣満々の明久の邪魔をするわけにはいかないと近寄ることはしない。

「吉井君、凄いやる気ですね」

「Aクラス戦で負けたのが悔しかつたんだろう。勝ちの計算に入つていたのにクラスの勝利に貢献出来なかつたんだから余程堪えただろ

うな」

Dクラス戦では俺と一緒に敵戦力の半分以上を削り、聞いた話Cクラス戦では生徒会の浜野と互角に渡り合つたと聞く。

しかしそれらはAクラス打倒という目的の前段階に過ぎない。肝心のAクラス戦で負けてしまつては意味がないのだ。

それでも明久は折れることなく、立ち止まらず歩き続いている。次こそ勝つ為に。アイツに俺達仲間がしてやれる事はただ信じる事のみだ。

明久視点

「終わつた」

「お疲れさま。これだけ出来れば上々かと思いますよ」

チャイムが鳴り休み時間。力なく机に突つ伏す僕に上守さんは笑う事もなく冷静に労いの言葉をかける。

「いや、僕なんてまだまだだよ。六限目もお願ひしていい?」

「私は別に構いませんよ。貴方のやる気が続く限り、付き合いましょう」

次の自習時間も上守さんに付き合つてもらうことになつた。気合いを入れる為に体勢を整えようとすると何者かが彼女の後ろへ忍び寄り…

「甘い」

「にやーつ」

後ろから上守さんに抱き着こうとしたのは愛子ちゃんだった。しかし上守さんは気配を感じ取り迫る愛子ちゃんの肩を両手で押さえ。そんな中、瑞希ちゃん、美波、優子さんも寄ってきた。

「長い付き合いですからね、あなたの背後からの奇襲は見破りますよ?」

「もうヤダなー。スキンシップだヨー」

「そのスキンシップが過激にならなければここまで拒絶はしませんよ」

そんな二人のやり取りに一つの疑問が浮かぶ。長い付き合い?同じ事を考えたのか、優子さんが愛子ちゃんに問う。

「ねえカイ。去年の終わりに転校してきた愛子がどうしてアンタと長い付き合いなのよ?」

「それはね? ボクとカイと紫杏は小中学校が同じだからだヨ。『神桜(しんおう) 女学院』、皆も知ってるでしょ?」

その質問に答えたのは愛子ちゃんだった。神桜女学院つて…

「「「ええええええええええつ!」」

「神桜女学院つて…!」

「…………名門女子校つ…!」

教室にいるほとんどの人が愛子ちゃんの爆弾発言を聞いて驚きの声をあげた。質問した優子さんと少し離れた場所にいたムツツリー二は特に驚いていた。

神桜女学院といえば知る人ぞ知る男子禁制の名門お嬢様学校だ。以前テレビでもやつてたけど、今年高校一年の子が理事長を務めることになったとか!?

嘘でしょ!? 愛子ちゃんも上守さんも、そしてこの場にいな生徒会長も神桜出身だったの!? なんで文月なんて貧相な学校(失礼なクソジヤリさね……)に来てるのさ!?

「いやーみんなが言う名門といえばそうなんだけどさ、校則が厳しくてー」

「それなら私や会長と一緒に文月を受ければよかつたじやないですか? 正直あなたが高等部に行くと知ったときは驚きました」「受験が面倒だつたからエスカレーター進学したんだよ。そしたら中学の時よりもさらに厳しくなつたから冬休み明けに辞めたんだつて」

「ははは…苦労したんだね愛子ちゃん」

どれくらい厳しいのか知らないけど僕だつたらきっと一ヶ月も持たないんじやないだろうか? いや、男子である時点で入学は不可能だけども。

「…と、いう訳で明久君。六限目はボクが保健体育を教えてあげるね
☆ モチロン、じ・つ・gーー」

「やめなさい愛子。明久君? 現国や古典で分からぬところつてある? 良かつたらアタシが教えてあげるわ!」

「ふ、一人とも? 僕は引続き上守さんとーー」

「アキ、数学ならウチにまかせて! 優しく教えてあげるわ!」

「明久君。私なら全教科教えてあげられますよ! ついでに美波ちゃん達も一緒に教えますから」

僕の席を囲んで女子四人が言い争っている。上守さんは少し離れた場所でやれやれとため息をつくだけで助ける気はないみたい。

こうして短い休み時間は過ぎていったのだった。

生徒会室にて

紫杏視点

一日の授業を終え今は放課後。グラウンドで部活動に励む生徒達を生徒会室の窓から見ていて微笑ましく思っていた今日この頃。そんな中、庶務の大江和那（カズ）が自身の席でため息をつく。

「どうしたんだカズ。ため息なんかついたら幸せが逃げていくぞ」

「いや～別に悩んどる訳やあれへん。試召戦争も終わって溜まつた業務もやつと片付いて明日から正常運転になる思うとついホツとしてしもうてな」

「ああ。確かに、先週は予想以上に忙しかったからな」

一週間で二年Fクラスが起こした四度に渡る試召戦争。我々生徒会は裏でその戦後処理に追われていた。通常の業務に加え、四回分の戦争の報告書の作成、戦死者の補習に使つたプリント用紙の補充、その他もろもろ。我々は学園に許可をもらい土日も登校してそれらを完遂させた。

「しかしカズよ。まだゆつくりしてはいられないぞ？ 一年生の部活動紹介・勧誘の取り纏め、来月の清涼祭の準備。やることは盛り沢山だ」

「…なあ紫杏。ウチ生徒会辞めてもええ？」

「ははは……逃がさないぞ？」

本当に辞めないよう優しく脅しておく。私の笑顔を見て千切れくらいい首を横に降るカズ。

「ホンマにやめるわけないやん。ただ土日も学校で仕事してたせいで

アキを買い物に誘えへんかつたんやもん」

「生徒会が忙しいのは覚悟の上だつた筈だろう？　…それにしてもアカリ程ではないとはいえた前も男子は苦手だつた筈だろう？　どういう心境の変化だ？」

「紫杏とアイツ見てたら羨ましなつてもーたんやもん！　ウチも素敵な出会いが欲しいねん！」

初めて会つた頃と比べて変わつたな、と彼女の変化を喜びながらカズが指差す部屋の一点へ振り向く。そこにはカズの言う『アイツ』がいた。ちなみにソイツはうちの会計と一緒にそれぞれに渡した問題用紙とにらめっこしている。

『…あのさ辻井ちゃん。この問題解ける？』

『…すまん室町、一問も解けない』

会計の室町　しのぶ（むろまち）と、辻井と呼ばれた男子が二人揃つて数学の問題に頭を抱えていた。その光景を今更気にして出したカズが私に問い合わせる、

「…なあ紫杏？　あの二人は何をやつとるん？　そういうやウチがここに来た時から二人共席に着いてああしてへん？」

「あの二人は中学の数学の問題を解いている。邪魔しないでやつてやれ」

なんで？　とカズに目で問われた私は答えるために口を開くが

ガチャツ

「校内の見回り、終わりました」

「同じく」

そのタイミングで副会長の上守甲斐（カイ）、書記の浜野朱里（アカ

リ）が巡回パトロールから帰ってきた。

「おかえり。一人とも、何か変わったことは無かつたか？」

「特に変わったことはありませんでした」

「こちらで一つトラブルがあつたわ」

カイの方は異常なしと、しかしあカリの方で何かがあつたらしい。

「聞こう。何があつた？」

「はい。一階校舎を巡回中、一年生の男子が黒い覆面集団に襲われている現場を目撃しました。私の名前を知っている事から彼等は学園の生徒であると想定し、実力行使による拘束を実施した後、その身柄を偶然通り掛かつた西村先生に引き渡しました」

ふむ：確かにアカリを知っている以上そいつらは学園の人間なのだろうな。どちらにせよ西村先生に身柄を預けたなら安心だな。彼等が何者なのかもすぐにわかるだろう。

「わかった。報告」苦労だつたな

「いやいや、何普通に聞いとんねん。おかし過ぎやろ」

む、どうしたんだカズ。何か問題でもあつたか？ そう思つてゐる
とカイとアカリが数学の問題と向き合つてゐる二人に近づいてゐる。
「しのぶ。会計の貴女がそれでどうするの？」

「辻井、アンタまだやつてたの？ はやく終わらせなさい」

カイはしのぶにごもつともな発言を、アカリは辻井に若干きつくあ
たる。

「こんな問題解けるわけないじやない！」

「そうだよ！ つーかなんで俺が生徒会室でこんな事をしてるんだよ！？」

「しのぶ、生徒会役員なんだからある程度は点数を取れるようになれ。そして辻井、お前は雑務担当だが立派な役員の一人だ。だからこそお前にもある程度の学力を身に付けて貰わなきゃ困る。

それにだ、これは振り分け試験で鉛筆を転がしてEクラスに入った二人への罰。黙つて受け入れるんだ」

「うう…」

ぐだぐだ喚く二人を黙らせる。そう、コイツらは本来ならFクラスに行くべきだつたのだ。…まあ、成績が悪いと役員ではなくなる訳ではないが、生徒の見本となる我々生徒会役員が最底辺の成績では他の生徒に示しがつかない。だからある程度の点数は取れるようになつてほしい。

このやりとりを聞いてカズは「なるほど」と納得した。

「だつたらもう少し問題を優しくしてよ…」

「本当だよ。くそつ…因数分解つてなんだよ。勝手に分解すんなよ。自然のままにしておけよ…」

「同感よ…。てゆーかなんで私が会計なのよ…。アカリちゃんやカイちゃんの方が適任じゃないの？？」

「お金の計算が出来れば充分だからしのぶを会計に選んだまでだ。とりあえず頑張れ。全問正解するまで帰れんぞ？」

「そんなん…！」

「……私達に教えて貰つてでもいいからなんとか全問正解しろ」

そういつた瞬間二人は一斉に我々に泣きつく。それを見て私たちには苦笑いを浮かべるのだった。

再会

Aクラスの合同自習を終えた放課後。今日は瑠璃花も部活が無く、俺も先生方の仕事が無いため珍しく早い時間に下校出来た俺達は校舎を出て校門に向かつて歩いている。

「いろいろ不安な点もあつたが、Aクラスの皆に迷惑をかけずに終えることが出来て良かつたな」

「不安な点？ それって須川君達の暴走ですか？」

「暴走以前にずっと寝てたからなアイツら。まあそれも一つ、他に挙げるなら明久を巡る女子四人の暴走かな？ 結局何事も無かつたけど」

「何度も一触即発しけたが、結局のところ抜け駆けがないよう最後まで互いに牽制し合つてただけだつたのだ。

「やつぱり吉井君は倍率高いですね」

「当の本人は自身に向けられている矢印にまったく気付いてないけどな」

「はあ…姫路さんも島田さんも報われませんね…」

「俺としては中学の時のお前と玲奈みたいな事が起きなければそれでいいんだけど…」

「そう、中学時代に俺を巡つて起きた『第一次お^トリー

「お、思い出させないでください！ あの頃は勢いに任せてしまつて…正直すごく恥ずかしかつたんですから…」

「瑠璃花に遮られてしまつた。まあ中学時代にいろいろあつたと思つて欲しい。時期が来たら話そう。」

「言つておきますけど今の吉井君の立場、昔の一輝とほとんど変わりませんからね？ 私達の気持ちに全く気付いてくれなくて…」

「それについては本当に申し訳ない」

返す言葉もございません……ん？

「？ どうしましたか？」

「いや、噂をすればなんとやら。ほら、あそこに」

俺の指差す方を見てあつと声を漏らす瑠璃花。校門に他校の制服を着た女子生徒がいる。青のブレザーとスカートに緑色のリボン、花丸高校の制服だ。さらにその女子は俺達の知り合いでもあった。

「二人とも、お疲れ様」

こちらの視線に気づいた彼女はオレンジ色の長い髪をなびかせてこちらに体を向けて右手をふる。

「よう玲奈」

「こつちに来てたんですか？」

そう、彼女は霧島 玲奈(きりしま れいな)。霧島翔子の従姉で俺達の中学校時代のクラスメートだ。

「なるほど。学校終わつてすぐ翔子の家に行つてたんだ」

「うん。用事で翔子の両親に会いに行つてたの。で、せつかくだから

二人に会いに来たのよ。本当は翔子にも顔見せたかったけどあの子、雄二と付き合い始めたでしょ？だから邪魔しちゃ悪いと思つて」

久しぶりに三人で歩道を歩く。昔はこの中に翔子（たまに雄二）もいたが随分と懐かしく感じる。こうして一緒に歩いていると瑠璃花が口を開く。

「玲奈。新入部員はどんな感じですか？今年は良いとこ行けそう？」

「んー正直、今年こそベスト8進出が目標かな？毎年新入部員は多いけどこれといって突出した選手がいないのが現状だし」

右手で無理無理とジエスチャーしながら苦笑する玲奈。まあ確かに花丸高校はどちらかといえば弱小の部類に入る高校だよな。甲子園どころかベスト16すら厳しいだろう。

「でもなんで部員数は多いんだ？何か話題性もあるのかな？」

「私もマネージャーになつて知つたんだけど、十年くらい前に甲子園に行つたみたいよ。それを知つて『次は自分が甲子園につ！』て意気込みを抱く人が後を絶たないみたい」

「へえ～ようするに古豪つてことか？」

玲奈の話を聞いて驚く俺。瑠璃花はあまり驚いてはおらず、既に知つてているという感じだった。

「まあ今は単に弱小みたいに呼ばれてるけどね」

やれやれと頭に手を当ててしばらくして俺に視線を向ける。ん、どうしたんだ？

「…ねえ一輝。今からでもウチに来ない？」

「…ウチつて、花丸高校の事？」

俺の問いに玲奈は頷く。

「いきなりの勧誘だな。どうした急に」

「貴方みたいな突出した選手が居てくれたらいいなーって思つて。腕はもう治つてるんでしょ？」

俺の右腕を指差しながら問う玲奈。

「…問題ない。てか既に完治した事は話しただろ？」

「それはそうだけど、やっぱり心配にはなるわよ。あんな事件があつたんだもの」

ああ、あの事件な…。

「もう済んだ話だよ。今じゃ外野からの送球も、バット振るのも違和感は無いしな」

「だつたら、ウチに来て野球やろうよ。一輝がいれば甲子園だつてーー」

「文月学園に入った時点ではわかるだろ？ 高校では野球から離れることにしたんだ」

そもそも甲子園に行く気があるなら間違つても文月学園には来ない。文月学園にも野球部はあるがウチは試験召喚システム優先であり、部活動に入れてないので。

…まあそれでも、今になつても野球部に勧誘してくる奴はいるけど。

「俺は大学で野球を再開する。今は他のやりたい事に専念したいんだ」

「……」

暫くの沈黙。そして

「はあ……勧誘失敗ね。わかつてたことだけど」

「おいおい、潔いな。もう少し粘つたらどうだ?」

「それで貴方の決意が変わるならね。変わらないからこそ瑠璃花は黙つて聞いてたんでしょう?」

「もちろんです」

「こらこら二人とも。俺つてそんなに分かりやすいのか? って、気が付けば駅前に着いていた。

「ありがとね。わざわざ駅まで付き合つてくれて」「気にするなつて」

「久しぶりに会つて話が出来て、楽しかつたですよ」

「私も。またこつちにきたら電話するね?」

駅へと向かう玲奈だつたが途中で足を止め戻つてきた。なんだ?
こつちに走つてくるぞ?

「えいつ」

「つ!?

「ああっ!」

勢いよく俺に抱きついてきた玲奈。隣では瑠璃花が悲鳴にも似た声をあげる。そしてしばらく俺の胸に顔を埋める玲奈は俺の顔を見上げ

「あいにく私は一度フラれたらいいじや諦めないからね?」

それは何に対してだ？ 中三の時の告白か？ それとも今さつきの勧誘の話か？ それを問いただす前に玲奈は「それじゃ」と俺から離れて駅に走つて行つた。

それにも、やつぱりアイツは翔子の血縁だな。フラれようが突き放されようが好きな人を諦めない一途さは。

「血は争えないか…」
「…………」

その後、俺達は帰路に就くのだが、家に帰るまで俺は隣を歩く瑠璃花の機嫌を取るのに苦労するのだつた。

転校生

玲奈との再会から一週間が経った、登校中の朝の出来事。ようやく校門に差し掛かつた所で

ヒューー：

ん？ この音はまさか——

カコーン

「あぶなつ！ つて、また空き缶？ ということはまさかっ!?」

「やつほー。やつと見つけたよ♪」

「……またお前か。なんでここにいる？」

頭に手を当てため息を吐く俺の前には、ベージュのカーディガンに青いスカートの女が立っていた。あの時は真っ暗で見えにくかったが、この緑色のポニーtailは以前俺に空き缶を投げてきた女と同じ髪型だ。

「……さて、もう一度聞く。なんでここにいる？」

「小波に聞きたいことがあつたんだよ。だから捜してたの」「聞きたいこと？」

「なんである時…………名前も名乗らずに去つていったのよ!?」「こないだも言つたが空き缶を投げてくる奴に名乗る名はない！」

正直この場に瑠璃花がいなくてよかつたと思う。アソツは俺に害を為す者に對しては敵意むき出しになるからな。もしいたら一触即発の展開になつていただろう。

ちなみに瑠璃花は体調崩した母親の看病で遅れてくる。

「いや～あの時はゴメンね。あたしつてさ、気に入った奴にはつい空き缶を投げたくなる性分みたいなんだよね～」

「それ普通は気に入らない奴にやるものじやないのか？　つーかなんで俺の名前知ってるんだよ？　まだ名乗つてもないだろ」

「あれからアンタについていろいろ調べたから。文月学園に通ってることも、伝説のキャプテンっていう二つ名もね」

「よく調べられたものだな」

初めて会ったあの時、俺は私服だった。だから文月学園の生徒なんて知りようもない。なんのヒントもない状態で出身校や名前まで辿り着くとは大したものだ。

「…さて、とりあえずお前は学校は良いのか？　時間的にもここにいたら不味いだろ？」

カーディガンのせいで最初はわからなかつたがコイツ、よく見ると玲奈と同じ花丸高校の生徒だな。今から走つた所で遅刻は免れない。
「それなら大丈夫。問題なし」

そう言いながらある場所を指差す。そこには俺の通う文月学園があつた。

…まさか。

「今日からこのFクラスで一緒に勉強する事になりました、石川 梨子（いしかわ りこ）です。みんな、よろしくーっ！」

『『ようしくううううつ!!』』

まさか転校生だったとはな。周りの奴らもノリがいいなあ…。

「…一輝。あの人つてもしかして」

「ああ、以前話した空き缶女だ」

「そう、あの人ガ…」

瑠璃花には既にアイツの事は話してある。そしてその人物が俺に害を与える敵と認識したのか、瑠璃花から凄まじいオーラが放たれる。ゴゴゴつていると表現してもいいだろう。

「では石川さん、空いてる席に座つてください」「はーい」

福原先生に言われ、こつちに近づいてくる石川。そして瑠璃花の前に立ち

「ごめん、あたし小波の隣がいいからさ。そこ譲つてくれない？」

石川の申し訳なさそうに瑠璃花に放つた一言に何故か冷や汗をかく俺。その理由はすぐにわかつた。

「…お断りします。一輝の隣は私の指定席ですので。空いてる席は他にあるんですからそこに座れば良いじゃないですか」

ああ…、やつぱり怒ってる（俺には分かる程度だが）。今日に限つて窓際の席に座つたのは失敗だつたか？ つまり二人が言う俺の隣は一つだけなんだよな…。

「あたしは小波の隣がいいのよ。だからアンタに退いて欲しいって頼んでるのよ。てゆーかアンタ小波の何なの？」

「私は一輝の幼馴染みです。貴方が何を言おうと私はここを退きません」

二人の間には火花が散つっていてどちらも一步も退くつもりはない。どう收拾つけるんだこれは？

「福原先生、担任の権限でこの場を治めてください」

「福原先生ならもう出てつたぞ」

「なんだと!?」

打つ手なしだというのか？

「雄二、代表としてこの場を治めてくれ」

「すまん一輝。俺にそんな力はない」

「そんなく…」

それからしばらくの間、二人の言い争いは続き、最終的に石川は俺の後ろになつた。授業中も目が合う度にバチバチしあつている二人は意外なことに早く意気投合するのだが、それはまた別の話。

第三者視点

ちようどその頃、学園になにやら怪しい影がやつて來た。

「ここが文月学園でやんすか。クツクツクツ……オイラの物語はここから始まるでやんすねえ」

意味深な台詞を口にして校舎へと入っていく。また一つ、学園に新たな嵐が起こりそうな予感がする。

第二章 清涼祭編

プロローグ

あれから二年の月日が流れたかな…。

桜の木を見る度にあの出来事を思い出す。

俺の時間はあの頃から止まつたままだ。

恐らく、これからもずっと…。

桜の花びらも姿を消し、新緑が芽吹き始めたこの季節。文月学園では、新学期最初の行事である学園祭、『清涼祭』の準備が始まりつつあつた。

お化け屋敷に屋台、飲食店、この学校ならではの試験召喚システムについて展示。それらの準備の為、H.Rの時間はどの教室も活気が溢れている。そんな中…

『勝負だ、福村！』

『さあ来い、須川！』

『お前から三振を奪つてやる！』

二つの段ボール箱を両手に旧校舎一階の廊下を歩いていると窓の向こうから会話が聞こえる。チラツと視線を向けると大勢の生徒が外で野球をやっていた。

(…今授業中だよな？ しかもアイツらつてFクラス？ まだ出し物も決まっていない筈なのに何をやつているんだ？)

段ボール箱を床に置き、注意しに行こうか考えていたところで我が校の必殺仕事人、補習担当教師の鉄人（西村先生）が校舎から飛び出した。

『貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているか！』

『ヤバい！ 鉄人だ！』

『全員逃げろー！』

うわっ、百メートル走何秒台だよあのスピード。連中が捕まるのも時間の問題だな。

…なんて考えているうちに三十人以上の男子が全員捕まつた。流石は学園の人間兵器だ。

(…野球か。懐かしいな)

俺にもああして笑っていた時期があつたな、と床に置いた段ボール箱を持ち直し、仲間達の待つ場所へと急ぐ。

場所は変わつて新校舎四階。一年のフロアだが、一年生に用事があるわけではない。ここには一年生の教室以外にも部屋がある。『生徒会室』のプレートが掛けられた扉を開けて部屋に入った俺は机に向かつて作業をしている一人に声をかけた。

「会長、去年の清涼祭の資料持つてきたぞ。どこに置けばいい?」「む、来たか。ご苦労だつたな。部屋の隅に置いておいてくれ」「わかつた。ここでいいか?」

指定された部屋の隅に段ボール箱を置く。ふう…疲れた。

「お疲れ様です辻井君。お茶をどうぞ」「ああつ…私が淹れようと思つていたのに…」「ありがと、上守」

俺が生徒会室に入つたと同時に副会長の上守が席を立ち、お茶を用意してくれた。スーツを着れば一流のキャリアウーマンと見間違えるくらいに彼女の雰囲気は大人びていると俺は思う。会長が小声で何かを言つてる中、俺はお茶を貰う。

「カイ。そんな奴に気を遣わなくてもいいのに」「アカリ、彼も生徒会役員なんですよ？ そんな事は言わずに」「…ふん」

眼鏡女子の浜野は俺に…いや、男子に対して冷たい。昔色々あつて男嫌いになつたらしいがそれ以上の事を会長達は教えてくれなかつた。…まあ俺は気にしないが。

俺も生徒会役員ねえ……。白服じゃないけどな。

「うわ、重つ！ 辻井ちゃんこんな重いものよく運んでこれたよね!?」「これでも鍛えてるからな」

いつの間にか席を離れ、俺が床に置いた段ボール箱を持ち上げようとするクラスメートの室町。俺と同様に数学の成績が絶望的な筈なのに何故か会計に割り振られている。憐れ……。

「言うてくれればウチも荷物持ち手伝ったのに……」

「気持ちは嬉しいけど、流石に女子に力仕事を頼む気にはなれないよ」「あはは……。ウチを女子として扱ってくれる男子なんてアキとアンタくらいやで？」

庶務の大江は男子からの扱われ方に苦笑してみた。確かに俺より頭二つほど背が高いけど顔立ちは可愛らしいのにな……。つかアキって誰？

「はあ……。さて、全員集まつたところで席についてくれ。皆に話があるんだ」

そして何故かさつきまで落ち込んでいた我らが神条生徒会長。慕われたり、恐れられたり、完璧に見えて時々ポンコツな部分を見せたりと色々忙しい人だ。

そんな彼女に応じて全員が生徒会室の真ん中に置かれた長方形のテーブルに、自分の指定された席に着く。そして全員の視線が集まつた事を確認して口を開く。

「今年も年に一度の清涼祭の時期がやってきた。我々生徒会は一致団結してこの行事を成功させねばならん！ 皆、気合いを入れていくぞ！」

「「おーつ」」

神条の意氣込みに応えて拳を上に突き出したのは大江と室町だけだ。いや、上守と浜野も内心は応えているのだろうが二人はそういうキヤラじやないしな。

「…さて。実の所、我々Cクラスは演劇をやることになつてな。着々と準備は進んでいる。この場にいるのは…AクラスとEクラスだな。そちらは準備は進んでいるのか？ 足りない物、必要な物があるなら今のうちに言つて欲しい」

「Aクラスはメイド喫茶に決まりました。肝心のメイド服はうちの代表が人数分揃えてくれるそうです」

上守が手を上げて淡々と答える。Aクラスの代表つていつたら霧島翔子か？ 学年一美人で有名な。最近Fクラスの代表と付き合い始めたとか。

それにしてメイド喫茶か…。上守なら似合うと思うが、彼女が知らない男に奉仕する姿が……想像出来ないな。何でも事務的にこなすイメージがあるし。

「Eクラスはそれぞれが所属している運動部の出し物を手伝うため、クラスでの出し物は無しかな」

「そうなのか？ ならば、しのぶと悟志は清涼祭当日はフリーか。羨ましい限りだな」

そう。体育会系の多いEクラスは各部活動の出し物があるため、Eクラスそのものの出し物は無いのだ。部活に所属していないのは俺と室町だけだしな。

「フリーだからと言つて生徒会の仕事がない訳じやないだろう？ 当日の見回りは俺と室町の二人でーー」

コンコンッと扉を叩く音がする。誰かがきたのか？

「どうぞ」

「失礼します」

神条が入るように促す。すると扉が開き、二人の男女が入ってきました。青い髪の女子は知らないが男子の方は知っている。特に野球をやっていた人間は知らない筈がない。

「二年Fクラスの小波です。清涼祭の準備に関して、生徒会に相談にきました」

これが『伝説のキヤプテン』と言われた小波一輝と俺、『六人目の生徒会役員』辻井 悟志（つじい さとし）の邂逅であった。

邂逅※

「なるほど。つまり、飲食店を出そうにも設備に問題あり…と？」

教室に入ってきたFクラス生二人を椅子に座らせ、神条が話を聞いている。

「恥ずかしながらその通りだ。先月に少しでも衛生面を良くしようと掃除をしたんだけど、畳の半分以上が腐つていてな…」

「先生方に相談はしたのか？ 最悪私達が学園長に直談判してもいいぞ？」

「その学園長にも相談はしたさ。しかし、『設備に差があるのは学園の教育方針だからね。ガタガタ抜かすんじゃないよ、ガキども』って一蹴された」

「……」

頼みの綱である筈の学園長がそれである事に神条は何も言えなくなつた。ちなみにそんな彼女の後ろで壁にもたれていた俺は、相変わらずだな…と苦笑いを浮かべる。以前用事で学園長室を訪れた俺にあの人人が放つた最初の一言は

『何か用かい、クソジヤリ』

…である。まあ教師というより科学者と呼ばれる様な人だし、生徒とのコミュニケーション能力は皆無。期待できないと思つていいただろう。

小波が頭を悩ませる中、隣にいる南雲という女子も残念そうに口を開く。

「それで生徒会に相談に来た訳です。どこか空いてる教室に心当たりはないでしょうか？」

強いていうなら一ヶ所だけあるんだよな。

「空いてる教室か…。残念ながらどこも埋まっているだろうな。今年は空き教室を使いたいと、いくつかの部活動が志願してきたからな」

あれ？ 神条、もしかして気づいてないのか？

「Fクラスの隣の空き教室はどうなん？ 掃除すれば多少マシになるはずやろ？」

「駄目ね。あそこは他クラスの物置小屋になるわ」

大江と浜野も？

「小波君。飲食店に拘る必要はないのでは？」

「清涼祭で得た稼ぎで教室の設備を改善しようと思つてるんだ。今ウチの連中が学園長に交渉に言つてる。それに怠け者の男子達がやけに気合いを入れててな。飲食店じやないと出し物にならない気がする」

怠け者…さつき野球やつてた連中か。一体何の風の吹き回しだろうか？ そして上守も氣づいてない。あとは

「残念だけど、空いてる教室が無い以上諦めてもらうしかないかな？」

分かつてたさ室町。お前も氣づいてないってな。仕方がない、俺は床を指差しながら

「あのさ、此処じや駄目なのか？」

そう言うと全員がこちらに顔を向け目を点にしている。：あれ、俺

何か言つたかな？　ああ、そうか。ちゃんと場所の名前を言つてないから伝わらなかつたんだな。ならもう一回

「此処、『生徒会室』じや駄目なのか？　清涼祭当日は俺と室町は校内の見回りをするし、他の四人はクラスの出し物でこの教室を空けるわけだし、だつたら此処使つてもらうのは……アリ？」

周りが黙つたままに不安になり、最後は疑問系になつてしまつた。そしてFクラスの二人を除く五人がわなわなと震えだし、五人同時に

「「天才かっ!?」」

指を指してきた。息ピッタリだな。

「わ、私とした事が……生徒会長でありながら生徒会室の存在を忘れるとは……！」

「灯台もと暗しつてヤツだね！」

「サトシ、勉強は出来へんのにこういう時は頭回るな。凄いわアンタ～」

「ま、待て大江！　そんなガツチリ握手してブンブン腕を振つたら千切れる！　一本しかない俺の腕が千切れるからつ！」

「こんな奴に遅れをとるなんて……自分が情けないわ」

「そう言いながら辻井君を褒めてましたよね？」

「あ、あれはみんなにつられてつ！」

問題解決に歓喜する役員共。そんなことよりまず助ける！　マジで腕が飛ぶから！

「というわけだ小波よ。君達さえ良ければ当日はこの生徒会室を使つてくれ」

「いいのかよ、そんなアツサリ決めちゃつて」

「空いてる教室がココしかないからな。それに稼ぎを出さなければ君達のクラスの問題が解決しない。生徒会として我々は力を貸すだけさ」

「……だったら、お言葉に甘えようかな？」

「ご好意、感謝します」

親指をグッと立てて微笑む神条に素直に応じる小波と律儀に頭を下げる南雲。すると小波と視線が合い、彼がこっちに来て手を差し伸べてくる。

「君もありがとう。正直諦めかけてたんだ」

差し伸べられた手を掴む。

「礼にはおよばないって。ただ、飲食店を出せたとしても稼ぎを出さなきゃ意味が無いんだぞ？」

「お、なかなか言うじゃないか。もちろん、君達から貰ったチャンス、モノにして見せるさ、……えーっと……」

あ、そういえば自己紹介まだだつたな。

「辻井悟志だ。小波、健闘を祈つてるよ」

その後、小波と南雲は報告の為に教室に戻つて行つた。Fクラス（アイツら）の飲食店か……。時間見つけて食べに行こうかな？

学園長室で

放課後、生徒会役員と俺の六人は学園長に呼ばれ、学園長室を目指し廊下を歩いていた。

「それにしても、『文月の妖怪』と謡われているあの婆さんが俺達に一体何の用だ？」

「こら悟志、学園長をそういう風に呼ぶものではないぞ？」

「…すまん」

学園長の悪態をついていると神条に注意された。

「ははは。ほんまサトシはあの人の事苦手みたいやな」「出会いが最悪だつたからな」

正直あの人には好きになれない。それよりも

「なあ。俺も一緒に行く必要はあるのか？　俺は生徒会役員じゃないんだけど？」

「何を言う。私達は君も立派な生徒会役員だと思つていてるぞ？」

「雜務担当として加入してもらいましたが、貴方は二人目の庶務として正式に生徒会メンバーに加わってますからね？」

「いつのまに…」

神条と上守の言葉に何も言えなくなつた。俺の知らない間に話が進んでいたのか…。

去年、生徒会長になつた神条はすぐに信頼できるメンバー（上守、浜野、大江、室町）を役員に選定した。しかし役員全員が女子であつた為に男子の立場で考えられる人材、そして力持ちの大江がいるとしてもやはり男手に困つていたらしい。役員結成から一ヶ月経つた頃、偶然屋上で悩んでいる神条と出くわしてしまつたことが俺の人生の転

機だった。当時のクラスの連中は美人五人に囲まれて羨ましがつていたが、果たしてあの出会いが俺にとつて不運だったのか、それは今でもわからない。

「私としては良かつたよ？ 辻井ちゃんが来てくれてから退屈しない日が多くなったし」

「俺が一番退屈しなくなつたよ。特に最近じゃあ神条と付き合つているつて噂で他の男子に追いかけ回されたからな」

「まさか私と悟志が一緒に下校している所を見られていたとは…」「いやいや…アンタなら二人、前々からそういう噂あつたで？」

「噂になるのも当たり前なくらい良い雰囲気だつたわよ、アンタ達」「私達はそれを見て二人を応援しようと思つたんですけどね」

…マジですか？

新校舎の一角にある学園長室の前まで来ると

『…今度の…システムは…』

『…流石さね…なかなか…面白い…』

扉の向こうから話し声が聞こえてきた。一人は学園長だけどもう一人は誰だ？ 話の内容はともかくやけに会話が盛り上がつてるようだ。

「む？ どうした、悟志」

「今は取り込み中みたいだな」

「そうか、ならば少し待つとしよう。急ぎの用でもないしな」

神条の案に全員が賛同し、待つことにした。それから五分も掛からず扉が開く。

「おや、君達は？」

学園長室から出てきた眼鏡をかけたスーツの中年男性が呼びかける。神条が答える。

「生徒会です。学園長に呼ばれ足を運んできました」

「そりだつたでやんすか。もしかして待たせてしまつたでやんす？」

「いえ。今来たところですよ、亀田教頭先生」

……やんす？　……えつ……教頭先生！？

「それならよかつたでやんす。あ、オイラは急用があるので失礼するでやんす」

「お疲れ様です」

教頭と呼ばれたメガネはそそくさと去つていき、神条は頭を下げる。

「あの人……教頭？」

「知らなかつたのか、悟志よ。竹原先生が先日退職して代わりに亀田先生が派遣されたのだぞ」

あれ、竹原の奴辞めたのか？　まああまり良い先生じやなかつたから俺としては結果オーライなんだがな。

「さて皆、入るぞ」

コンコンツ

『入りな』

「失礼します」

最初にノックし、返事がきてから扉を開ける。流石我らが生徒会長、全校生徒の見本だな。

「アンタたち、よく来てくれたね」

「学園長、我々を呼んだ用件は何でしようか?」

「ああ、実はアンタ達に頼みがあつてね」

頼み?

「清涼祭で行われる召喚大会は知つてゐるかい?」

「存じてます」

「じゃ、その優勝賞品は知つてるかい?」

優勝賞品? そんなもの初めて知つたぞ。出場する気もなかつたしな。

「確かに二対二のタッグマッチですよね。その大会に何か問題でもあるんですか?」

「大会じゃなく、賞品に問題があるさね」

「賞品?」

「そう。優勝賞品にある『白金の腕輪』にあるさね」

「白金の腕輪?」

「そうさね。アンタたちも知つてるだろう。高得点を出した召喚者の召喚獣に付与され、様々な能力を發揮する、それが腕輪さ。

だからアタシは召喚者が身に付ける事で召喚獣に新たな能力を与えるタイプの腕輪を開発しているのさ。

ちなみに白金の腕輪の能力は点数を一分にして二体の召喚獣を同時に呼び出せる同時召喚が可能になるさね」

ほう、持ち点が四百に満たなくとも召喚獣に力を与えられるのか…。なんだろう、少し興味が出てきたな。それより説明してる時の学園長の様子が少しおかしいな。

「その白金の腕輪に何かあるんですか？」

「察しがいいねボウズ。その腕輪はまだ完成していないんだ」

なんだと…？

「完成していない？」

「そうさね。機能はするんだけど欠陥があつてね。総合得点が学年全体の平均並の点数を取つた状態で使用すると腕輪が耐えられずに壊れてしまうという欠陥が…」

学年全体の平均つて……それじゃあ高得点者はまず使えない。

「そんなものをなぜ賞品にしたんです？」

「…アンタら、先日退職した教頭の竹原を知つてるかい？ ここだけの話、竹原には今までの不正と汚職の証拠を突きつけて学校を辞めて貰つたのさ。あの男、その時には既に白金の腕輪を賞品にする事を発表していたさね」

「「なつ！」」

「腕輪が暴走すれば間違いなくアタシの監督責任が問われる。どうして欠陥のある腕輪を賞品として出したんだってね。」

一度発表したことを撤回すれば信用問題に関わる。文月学園は世間からの注目度が高いから少しでも信用を欠くことをすればアタシが責任をとることになる。竹原にすれば最後の仕返しになつただろ

うね」

おいおい：竹原の退職にはそんな事情があつたのか？　あの人つて口クな事してないな…。

つーかこれってかなりマズい話だよな？　試験召喚システムは文月学園の存在そのものと言つていい。暴走なんて問題が起きたら学園の存在意義も問われるだろう。

「学園長。俺達を呼んだ理由はもしかして、召喚大会で優勝して腕輪を回収しようと？」

「その通りさねボウズ。ただ、さつきも話したけど総合得点が平均以上だと壊れるから、点数を低くして戦つて欲しいのさ」

つまり召喚獣の操作性で戦えつて事か…。それが出来るのは

「去年から召喚獣で教師の手伝いをしているアンタならやれるさね。万が一の保険にFクラスの何人かにも既に伝えてあるから、中の誰かが優勝して腕輪を回収してくれれば問題はないさね」

こうして、学園の存亡をかけた戦いがはじまつた。

準備（1）

『おーい誰か！ そこの釘とつてくれー！』

『このテーブルどこに置けばいい？』

『壁に飾る装飾つてこんなのでいいのかー？』

清涼祭まであとわずか、普段は少人数しかいない生徒会室は多くの生徒で賑わっていた。Fクラスの出し物、中華喫茶の為に室内を改装しているのだ。

「思つたよりみんな真面目に仕事してるな」

「これじや助つ人に来た意味がなくなつたね」

万が一の為に助つ人として手伝いに来た俺と室町は連中の仕事を見て感想を述べる。そんな俺達に三人が近づいてきた。小波と南雲。あと一人は吉井明久だ。学園初の觀察処分者として、ある意味では神条に負けず劣らずの有名人だ。

「辻井、室町。せつかく手伝いに来てもらつたのにゴメンな？ アイツら珍しくやる気だからさ。作業はまだ半分くらいだけど、あとは寛いでてもいいぞ？」

「そうだよ。この部屋を使わせて貰つただけじゃなく、応接室のテーブルと椅子使えるよう先生方に頼んでくれたんだから。充分働いてるよ」

「たつた六人で使うのは勿体ないからな。使いたい人に使つて欲しいって思つただけだ。あと先生方と交渉したのはウチの会長だけどな」

小波と一緒に来た吉井が俺達に感謝するも、それを冷静に対応する。やはり交渉能力に関して神条（アイツ）は尊敬に値するな。

「まあおかげで室内は綺麗だし、これなら上手くいくんじゃないかな?」

「学園祭のレベルとしては充分過ぎるんじゃないかな?」

「…………飲茶も完璧」

「わっ」

いきなり後ろからの声で室町が驚く。振り向くと小柄な男子生徒、ムツツリーニの二つ名で有名な生徒が立っていた。彼の手には

「…………味見用」

そう言つて木のお盆を差し出す。その上には胡麻団子が載つていた。

「わあ……美味しそう……」

「土屋……君? いただいてもいいのかい?」

目を輝かせる室町の横に俺は土屋に確認する。返事は

「…………(コクリ)」

「なら、ありがたく」

「いただきまーす」

「あら、美味しそうじゃない。ウチもいただくわ」

「ワシもいただこうかの」

つまようじがないので直接手で摘まんで口に運ぶ。そのタイミングで茶髪ポニーテールの島田美波と見た目が女子の男子生徒、木下秀吉も胡麻団子を手に取る。

「これは……!」

「美味しい!」

「表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし!」

「甘すぎないところも良いのう」

「これは売れるな。好評間違いない！」

「好評だな。俺も貰おうかな？」

「僕も」

「…………（コクリ）」

小波と吉井も一つ摘まんで口に運ぶ。小波は「うん、うまい」と一言。吉井は

「ふむふむ、表面はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつてもーーんゴパつ」

口からありえない音を出して床に倒れた。……え？　なにこれ？

「明久！　しつかりしろ！」

「え、何？　何が起こったの!?」

倒れた吉井に駆け寄る小波と突然の出来事に狼狽える室町。もしかして胡麻団子？　全部作り方は同じだろうし、一つだけ違うなんて事があるのか？　そんな時、木下の口から信じがたい人物の名前が

「あ、それはさつき姫路が作つたものじゃな」

「え、姫路？　あの学年ベスト3の？」

「む、ムツツリーニ!?　どうしてそんなに怯えた様子で胡麻団子を僕の口に押し込もうとするの!?　無理だよ！　食べられないよ！」

団子の残り半分を吉井の口に押し込もうとする土屋。二人の必死

な姿にこれは冗談じやないことが伝わってくる。

とりあえず現状を傍観している南雲に聞いてみることに。

「なあ。姫路さんって、料理ダメなの？」

「これでもマシにはなってるんですよ？ 以前は薬品混ぜていましたし…」

頭に手を当ててため息をつく南雲。てゆーか薬品つて、流石に冗だーーん…じやないよね！ 目が笑つてないし。

「うーつす。戻ってきたぞ！」

そんなところに背の高い赤髪の男子生徒がやつてきた。

「確か、Fクラス代表の坂本君だつけ？ どこかに用事だつたのか？」
「誰だ？ …ああ、助つ人に来てくれた生徒会か。学園長のババアと
ちよつと話をな。…ん？ なんだ、美味そうじやないか。どれどれ
？」

躊躇う事なく吉井の食べかけの団子を口に運ぶ。

「…雄一よ、たいした男じや」

「雄二。君は今、最高に輝いているよ」

「？ お前らは何を言つているのかわからんが……。ふむふむ、表面
はゴリゴリでありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいが
とつてもーーんゴパつ」

うわあ…、なんか既視感（デジヤブ）。

「…坂本、大丈夫か？」

「ふつ。何の問題もない」

とりあえず声をかけたが、どうやら大丈夫そうだ。

「あの川を渡ればいいんだろう？」

全然大丈夫じゃなかつた。三途の川を渡ろうとしている。

「ゆ、雄二！ その川はダメだ！ 戻つてこーい！」

生徒会室のど真ん中でFクラスメンバーがギヤーギヤー騒いでいる。俺と室町はこつそりと場を離れてその光景を眺めていた。

「辻井ちゃん。清涼祭、大丈夫かな？」

「死人が出ない事を祈ろう」

もう俺達にはそれしか出来ない。

「姫路さん、まだまだ修行が足りませんね？」

「…はい、すみませんでした」

一方、部屋の隅では事の元凶が青白い怒りのオーラを纏つた女子生徒によつて正座させられたりしていた。

準備（2）

あれから坂本も復活を果たし、姫路への説教を終えた南雲もこつちに戻ってきた。そして…

「明久ー、いい加減目を覚ませー？」

「…………はつ、じいちゃん」

「誰がじいちゃんだ!?」

食べ物を粗末に出来ないと、姫路作の胡麻団子の残りを覚悟の末た
いらげた吉井も危ういながら復活を果たした（本人曰く「天国のじい
ちゃんに会ってきた」らしいが）。ちょうどその時、俺達の下に一人の
女子生徒がやつてきた。

「ちょっとアンタ達、いつまでも油売つてないで仕事しなさい」

「おつと…くつろぎ過ぎたかな？ 悪いなりコ。すぐ作業に戻る」

「みんな、もう一頑張りだ。行くぞ」

緑髪ポニーテールのリコと呼ばれた女子生徒に小波が返事をする。
あの子は最近転校してきた石川梨子だつけ？　：なんで花丸高校の
制服（上はベージュのベスト）を着てるんだ？

小波と坂本の指示を受けてそれぞれが作業に戻る中、石川がこつち
に顔を向け

「室町と辻井だつけ？ いろいろと手を貸してくれてありがとね♪
早速なんだけどさ、手伝ってくれない？ 美術室から道具を運びたい
んだけど、アタシ一人じゃあね…」

「それは勿論手伝うよ。じゃあ行こうか」

なんだかんだあつてようやく改裝作業は終わった。生徒会室は見事に中華風の喫茶店となつた。俺と室町の感想は

「よくもまあここまでやつたな…」

「ここ本当に生徒会室？ つて思いたくなるよね…」

「ちゃんと元に戻るよな？」

「シャンちゃん達、これ見たらどんな反応するかな？」

「こんな変わり果てた生徒会室を見たら生真面目そうな上守と浜野がどんな反応をするか。神条は…むしろここまで仕上げたFクラス連中を褒め称えるかもな？」

表彰式でもあげそุดだな。と思つていると小波達がこつちにやつて來た。

「辻井、室町、お疲れ様。寬いでていひつて言つておいて結局散々働かせてしまつたな」

「いひつて。元々その為に來たんだし」

「みんなテキパキ働いてたよね～。FFF団だつけ？ 正直言うと私達は彼等の事を警戒してたんだよね～」

室町に肯定するように頷く。新学期に入つてからの連中の問題行動に俺達は頭を抱えていたのだ。だから神条は俺達にFクラスを手伝うよう指示したのだ。

「そこは俺達も驚いてるよ。だが俺達よりも、アイツらよりも一番働くのはコイツだろ？」

全員が石川を見る。須川達に細かい指示を出したり、改装に必要な物をあちこちから調達したり、そう言われば彼女が一番働いてたよな。

「いやー祭りを全力で楽しむ為には準備だって全力で取り組まなきや、ね？」

そう言つてウインクする石川はどこか格好いい。男の俺達より男らしい……女だけど。

「その姿勢、尊敬するよ。…さてーー」

改装の手伝いもそうだけど、俺はもう一つの目的を果たすとしようか。

「坂本、小波、それと吉井も。突然だけ着いて来てくれないか？　話があるんだ」

俺は誰もいない場所、屋上に足を運んだ。小波、坂本、吉井も遅れてやって来る。南雲がついて来ようとしたが何とか断りを入れた。室町はFクラスの女子達とガールズトークでもさせればいい。屋上について早速坂本が口を開く。

「で、ここまで連れてきた理由はなんだ？　人の多い場所では話せないことなんだろ？」

「え、 そうなの？」

坂本はこれから話す内容が判らずともそう言つた話だと理解してゐようだ。吉井は気付いてないみたい。俺は三人を見て口を開く。

「单刀直入に言う。召喚大会の優勝商品の件は知つてゐる。俺達生徒会もお前達の味方だ」

「「「つ!?」」」

「Fクラスの何人かにもこの件について話してある、と学園長から聞いてゐる。常に万が一の保険をかけるあの人の性格を考えれば多すぎず、少なすぎない人選をするだろうし。

Fクラスの生徒を巻き込む訳だから、代表の坂本には当然話すだろうと思つた。あとは召喚獣の操作に慣れている小波と吉井が妥当かなつて。で、当たつてる？」

三人とも驚きの表情を浮かべる（特に吉井が）。しかし反応がおかしい。

「な……な……

「あれ？ もしかして初耳？ お前達じゃなかつた？」

改装作業中に彼等を観察し、確信をもつての告白だつたんだけどな。まさか外したか？ なんて考えていると、吉井と坂本の二人共ブルブル奮えているのがわかる。そして空に向かつて。

「「なんでソレを言わねーんだあのババアっ!!」

…あれ？

「ざけんじやねえぞあのババア！ 学園存続の危機に余計なプレツシャー与えやがつて」

「ホントだよ！ 生徒会にも腕輪の事を話すなら話すつて言つてくれればいいのにさ！」

「ははは、なかなか苦労してるみたいで」

怒りを空にぶつける坂本と吉井。まあ確かに誰に話したか、他に誰に話すかはちゃんと伝えておくべきだろう。

「…で？ 一応確認するけど、三人は優勝商品の件を知つてゐる…てことでいいんだよな？」

「ああそうだ。設備の改善をババアに頼んだ際に条件として大会の優勝を…な」

「とにかくよかつたよ。生徒会役員が協力してくれるなら、僕達の誰かが確実に優勝出来るよね？」

吉井は既に優勝した気でいる。まあ神条や大江、今ここにいる小波や吉井の実力は誰もが知る事実だ。しかし…。
そんな浮かれてる吉井に小波が

「油断するなよ明久。大会はトーナメントだからな。決勝上がる前に仲間同士で潰し合う展開も考えられる。そしてなにより大会には三年も出場するからな」

そう、俺達二年生よりも試召戦争を経験している三年生は間違いなく手強いだろう。さらに俺達は学園長の指示で総合科目を平均以下に抑える必要がある。そんな状態で連中から優勝を勝ち取らなければならぬのだ。

まあ俺は全力を出したところで平均には届かないわけだが。

「とにかくだ、優勝目指すためにもお前らの知恵を貸して欲しい。まあ、優勝したところでの妖怪ババアの俺達に対する態度は変わらないと思うけど、恩を売つといて損はないだろ?」

「あれ、辻井君もババア長に対してもそんな態度なんだ」

「…正直、あの人は苦手でね」

吉井に指摘されてハツとなる俺。おつと、本音が出てしまったな

⋮。

ペア決め※

一輝視点

俺、明久、雄二の三人が屋上から戻つて来ると、生徒会室はやけに賑わっていた。大人用のテーブルを囲んで瑠璃花、リコ、姫路、島田、室町、そして——

「神条、来てたのか？」

「小波達、邪魔するぞ」

「邪魔するつて……ここは生徒会室だろ？」

「今は君達の教室だ。何もおかしな所はないさ」

生徒会の神条、大江、浜野、上守の四人も混ざつて盛り上がり始めたようだ。

「自分達のクラスの準備はいいのか？」

「こつちは既に終わっている」

「それに私達は劇の裏方をやることになつたの。だから練習に付き合う必要はないわ」

「ウチとしては役貰つて舞台に出てみたかつたんやけどな？ 生徒会は校内の見回りあるから……」

「あれ？ 当日の見回りは辻井と室町がやるんじゃないのか？」

「もちろん二人も見回りはするさ。しかし一人だけに任せた訳にはいかないだろう？」

ああ、納得した。そして神条の隣に座つていた上守が口を開く。

「ちなみにAクラスも喫茶店の準備を終えています。もう少ししたら翔子もこちらに顔を出しますからね、坂本君？」

「上守、まるで翔子が来るこどを俺が期待してるように言つたんだな」

実際そななんじやないのか、雄二よ。自分の顔を鏡で見てみろよ。

「あれ？ なあアンタら、サトシはどうしたん？」

「辻井君ならすぐ戻るから先行つててー、て屋上に残つたけど」

この場に辻井がいない事に気づいた大江の疑問に明久が答える。
俺も気になつてはいたんだけど、

「あ～…またや。アイツ一度屋上に行つたら中々戻つてこーへんで
？」

「…仕方がない、呼んでくるとしよう。皆はここで待機していくくれ」

そう言つて神条は席を立ち教室から出ていった。

「一体どういうことだ？」

「坂本、他の皆も、出来たらなんも聞かんしてくれへん？」

「……わかつた」

雄二を筆頭に事情を知らない人たちは了承した。そして空氣を変えようと室町が立ち上がる。

「あ、あのさ。召喚大会つてチーム戦だよね？ みんな誰とペアを組むか決めたのかな？」

あきらかに話題を変えようという意志が見てとれたが、みんな気にはしなかつたらしい。室町の質問に姫路が手あげて答える。

「私は美波ちゃんとチームを組みました」
「優勝はいただくわ！」

揃つてVサインをする二人。息ピッタリだな。ただでさえ負けが許されないのに思わぬ強敵が現れた。

「はいはーい、あたしは一輝とペア組んだからねー」

リコが元気よく手をあげる。彼女の宣言を聞いて（瑠璃花を除く）全員が驚いた顔で俺を見た。

「ん？ どうしたんだよ皆。そんな顔をして」

「あ、ごめんよ一輝。ただ意外に思つただけさ。一輝はてつきり南雲さんとペアになるとと思つてたから」

「よろしくね、一輝♪」

腕に抱きついてくるリコにため息をついて

「…まあ、成行つてやつだ」

明久の質問に対し、俺はそれしか言えなかつた。

『…それで、結局のところどうなのよ?』

『一輝のペアをじやんけんで決めることになり、私が負けた結果です』

『うう…。南雲さん、残念でしたね…』

『ですが代わりに、休み時間に一輝と出店を巡る権利を貰つたので問題はありません』

『はっ…失念していたわ…！ 男女で清涼祭を巡るのも一興。ウチもアキを誘つて…』

『み、美波ちゃんズルいですよ…！』

瑠璃花、姫路、島田がボソボソと話し合つている。何も聞こえない。

「ほんならアキ、ウチとペア組まへん？ ウチも召喚獣の操作には自信あるで。アキとなら優勝間違いなしゃ！」

「な、大江さんっ！ 卑怯よ！」

「抜け駆けは禁止ですよ！」

大江が明久に詰め寄り、姫路と島田が割つて入る。明久も苦労している。

「さ、三人とも落ち着いて。それよりカズさん、僕達クラスが違うけど？ ルール違反じやないの？」

「同じクラスやなきや駄目なんてルールはあらへんで。せやから、AクラスとFクラスで組むのもアリなんやで。坂本君？」

ん？ なんでここで雄二に振るんだ？

『……カズの言う通り。雄二は私と組むべき』

『し、翔子！ お前いつからいたんだ!?』

『……いまさつき。ちなみに雄二、私と組む以外の選択肢は認めない』

『横暴だろ!? こつちにも事情がーー』

雄二は既に翔子に迫られている。優勝商品の事を気にして明久と組もうとしてたんだろうが雄二よ、表彰式で翔子に使わせなければ問題はないと思うぞ？ 最悪翔子にも事情を話して点数下げてもらえば良いわけだしな。

『明久くーん。召喚大会なんだけど、ボクとペアにならない？』

『ね、ねえ明久君。もしよかつたら、アタシとーー』
『『待ちなさいつ!!』』

翔子がいるなら当然あの二人もいるよな。

(明久：頑張れ)

「みんな、作業お疲れ様。お茶菓子でもどうかしら？」

「小野さん、喜んでいただきます。あ、小野さんもどこか空いてる席に
どーぞ」

生徒会室の扉が開き、振り向くと売店勤務の小野さんが両手に色々
なお菓子を抱えて入ってきた。いつも通りの三角巾とエプロン姿に
のほほんとした笑顔は疲れきった男子には破壊力抜群である。

小野さんに近づきお菓子を受けとり、空いてる席へと案内する。

『…ねえ、やけに一輝が積極的な気がするんだけど？　あの人前で
はいつもああいう風なの？』

『…去年からお世話になつて、というのもあるんでしようけど。少
なくとも尊敬の念を懷いているのは確かですよ』

『せつかく一輝のペアの座を勝ち取つたのに…この敗北感はなんだろ
う…』

『それはお互い様ですよ』

女子一人の会話は俺の耳には届かなかつた。

紫杏視点

屋上の扉を開ければ、目当ての人物はすぐに見つかった。屋上には彼しかいないというのもあつたが。

いつものように屋上のフエンスを掴んで、辛い顔をしている。

「悟志」

声を掛けて近づくとハツとした表情になり、すぐになにもなかつかのような顔になる。

「どうしたんだ会長？ もしかして生徒会室でなにがあつたのか？」

「いや、君の事が気になつただけさ」

そして彼の隣に立つ。すると不意に懐かしい記憶がよみがえる。

「こうして二人きりでいると思い出すな。私が屋上で一人悩んでた時に悟志が声をかけてくれたんだっけ？」

「そのせいで生徒会役員にされたけどな」

「…今更だと思うが、嫌だつたか？」

実をいうと去年の十月、男子の役員が必要になつたからとはいえ半ば強引に彼を誘つたことを後悔していたりする。そして彼の本心を聞こうともせず今に至つてはいるのだ。

迷惑だと言われるのが恐いから…。

「いや別に」

答えは違った。

「正直面倒だと思った。けどこうして仕事に携わっていると、あとには退けない、て思うようになつてきてさ」

「……」

「自分で言うのもなんだけど、俺つて働き者なんだと知つた。だから今は…もう少しこのままでいいかなつて思う」

「……ふふつ」

他にやることもないしな、と笑いながら言う彼につられて笑つてしまふ。

「なに笑つてるんだよ…」

「ははは、すまない。つい」

思えば悟志と知り合つてもう半年になるんだな。しかし…：

（彼は未だに私達を名前で呼ぶことを拒んでいる…）

彼のいた中学を調べて、彼の身に何が起きたのかは大体の目星はついている。

彼は過去に囚われているのだ。

そんな彼を私は…いや、私達は救いたい。
生徒会長としても。

友人としても。

だから…

「悟志、頼みがあるんだ」

「ん、なにかな?」

「召喚大会なのだが、私とペアを組まないか?」

「……はい?」

私の告白に彼は鳩が豆鉄砲をくらつたような顔をしたのだった。

清涼祭開幕

清涼祭初日の朝、俺と室町、そしてFクラスの皆は中華喫茶『ヨーロピアン』にて

「皆、喫茶店はいつでもいけるな?」

「バツチリさ」

「…………お茶と飲茶も大丈夫」

坂本の最終確認に吉井と土屋が自信満々に答える。これで準備は整った。

「いいかお前ら。設備の改善の為にも資金が必要だが、それ以上に生徒会の面々が協力してくれている以上中途半端な結果は出したくない。今日と明日の二日間、死ぬ気で取り組むぞ!」

『『おおーっ!!』』

みなぎってるなあ…。それにしても坂本つてああいうキャラだつたつけ?『悪鬼羅刹』のイメージと随分違うんだけど…。

「やる気充分だな。よし、各員作業に取り組め」

坂本の号令で集まつてたメンバーが散つていく。厨房に入る者、廊下で呼び掛けをする者、校舎の外でチラシを配る者、様々だ。

「やっぱ指揮を取るのは雄二が向いてるな」

「はつ、よく言うぜ一輝。お前には負けるつての」

笑い合う小波と坂本。それを見ていると吉井と土屋が

「辻井君。店手伝つてくれてありがとね」

「…………感謝する」

二人が礼を言つてきた。まあ会長命令だし。

「チラシ配りと声かけくらいしか出来ないけどな。それより女子達は？さつきから姿が見えないけど？」

「あ、そういえば誰もいないね？」

室町、南雲、姫路、島田、石川（あと木下弟）がいないことに吉井も今気付き、室内を見回す。

「…………女性陣なら、もうそろそろ——」

土屋が何か言いかけたその時、教室の扉が開いた。

「おつまたせー！」

そこにはチャイナ服に着替えた石川が堂々と教室に入ってきた。それに続くように他の女子達も（何人かは恥ずかしそうに）入つてくる。そんな女子達に対して雄二が真っ先に口を開く。

「お前ら、チャイナ服なんてどこから持つてきたんだ？」

「今日の為に土屋が人数分作ったんだって。似合つてるでしょ？」

「…………徹夜した」

クルツと一回転してみせる石川。その仕草に恥ずかしさは感じられず、嬉々として着ているのだと伝わってくる。

「室町、お前もか？」

「ははは……私の分もあつたからね。それにしても土屋ちゃんつて凄いよね。サイズがいい感じにしつくりきてるもん。まるで、いつの間に

か体の寸法を測られた一つて思うくらいに…」

それを聞いて実際どうなのかを聞こうと土屋に視線を向ける。俺の意図を察したのか、土屋は「…………目測」と答えた。なんて観察眼だ…！

「でもいいんじやないか？ やっぱり室町は何を着ても似合うよな」「…………うん、ありがとう…」

そう言つて背を向ける。あれ？ 何かおかしな事を言つたかな。

「一輝、どうです？ 似合つてますか？」

「ああ、凄く似合つてる。てか瑠璃花は厨房担当じやなかつたか？」

「もちろん厨房ですよ？ でもせつかく私の分もありますから…」

「一輝、あたしも似合つてるかな？」

小波と南雲、石川は相変わらずだな。…で、吉井は

「秀吉、やつぱり君は何を着ても可愛いね！」

「明久よ。それは姫路と島田に言うべきじや」

「木下…。アンタはとここんウチ達の邪魔をしたいようね…！」

「ズルいです木下君…。そうやつて吉井君を夢中にさせるなんて…」

「何故じや!? 何故ワシが責められておるのじや!？」

ああ…、いないと思つたら木下もチャイナ服を着てたのか…。でもお世辞抜きで似合つてるな。男子から告白されるのも領ける。

俺はしないけど。

「よし。もうすぐ召喚大会だ。喫茶店は秀吉とムツツリーニと南雲と室町に任せ。俺と明久、一輝と石川、姫路と島田、辻井の七人は一回戦を済ませよう」

召喚大会に出る全員が領く。

「辻井君は誰と組むの？」

「会長と」

吉井の問いに答えると姫路、小波が反応する。

「こ、今度は負けません！」

「わかつてはいたが、一番の壁だな…」

FクラスとCクラスの試召戦争の詳細は知っている。姫路は呆気なく戦死し、小波は激闘の末、ギリギリ勝利を掴んだ。

勝つたにしても、負けたにしても、二人にとつてはそんな厳しい戦いをもう一度するとなると何かと思う所があるんだろうな…。

「…辻井ちゃんは紫杏ちゃんと組むんだ。もし一回戦負けなんてしまらアカリちゃんが許さないかもね」

「怖いことをいうな…」

簡単に想像出来る未来に俺はため息を吐くしか出来なかつた。

…とにかくベストは近くすけどさ。

召喚大会一回戦 悟志＆紫杏

明久視点

「ねえ雄二。 やけに参加人数多くない？」

「毎年五十人くらいだつて話だけどな」

「どうみても百人は超てるよねー？」

「俺としては試召戦争は大歓迎だ」

僕、雄二、リコ、一輝がそれぞれ感想を述べる。召喚大会の為に体育館を改装した試合会場には予想以上の人数の生徒がいた。それを目にして驚く僕達を見て辻井君は

「…どうやらお前らは自分達のやつた事の重大さに気づいてないんだな？」

「え、 どゆこと？」

「最底辺のFクラスが最高峰のAクラスに勝つ。お前らはそんな前代未聞の偉業を成し遂げたんだ。その結果、三年生のクラスがモチベーションあげて頻繁に試召戦争を始めたり、一年生が来年を待たずに試召戦争をしたいと懇願したり、今月になつてようやく落ち着きはしたが今、文月学園では試召戦争がブームみたいになつてているんだよ」

「そうだつたのっ!?」

「それで人数も去年の倍に？」

「だな。特に経験値の差がある三年生の参加者が多いから、勝ち残るのは容易じやないだろう」

よ、予想外の展開じやないか…… 優勝賞品の腕輪の事もそうだけどこのままじや…

「いい結果を出さないと瑞希ちゃんが…」

「瑞希ちゃん……ああ、姫路か？ 姫路がどうかしたのか？」

「ああ、そういうえば辻井君には話してなかつたつけ？ 実はーー」

『連絡します。まもなく召喚大会第一回戦を開始します。名前を呼ばれた者からステージに上がつてください。三年Cクラス、ーー』

僕の会話を遮り会場にチャイムと司会を務める女子生徒が鳴り響く。もうすぐ大会だ。一輝が僕の肩に手を置き

「ま、三年生が多いけど、毎年一回戦はレベルの近いペア同士で戦えるようになつてはづ。俺達Fクラスの相手はセオリーワンならEクラスのペアになるだろうし、そう弱気になるなよ」

「うん、そうだね」

一輝の話を聞いて胸を撫で下ろす。良かつた、いきなり三年生と当たることはないんだね。

「すまない悟志、遅くなつた」

辻井君に誰かが近づいて來た。やつてきたのは黒い衣装に身を包み、顔全体を覆う黒いマスクで顔を隠した誰か。

これつて歌舞伎なんかに出てくる黒子つて奴だよね？

「…会長、その格好は？」

「む？ ああこれか？ 前にも言つたがCクラスの出し物は演劇で、私は裏方だからな。それにしてもよく私だとわかつたな」

マスクを取つたその顔は確かに神条さんだ。辻井君、なんでわかつたの？

「いや、確かに劇の裏方を務めるなんならその格好なんだろうけど…。ただ、そこまで徹底する必要性はあるのかと思つてな…」

「？」

頭を押さえて何かを言つてる辻井君に神条さんは頭に?を浮かべているだけだつた。

『——次のペアを発表します。二年Cクラス、神条紫杏さん。二年Eクラス、辻井悟志君。両名はステージに上がってください』

辻井君達が呼ばれた。

「む、早くも私達の出番のようだな」

「参加者は多いがステージ自体が広いから一度に複数の試合を行つてゐみたいだな。とゆ一訳で早速行つてくる。坂本、試合が終わつたらすぐによつてチラシ配りの仕事するから」

「おう、よろしく頼む」

こうして神条さんを追いかけるように辻井君はステージに向かつた。

悟志視点

「ふつふつふつ…腕が鳴るな
…ほどほどにしてくれよ?」

「何を言う。戦いで手を抜くのは相手に対する失礼だろう?」「全力出す気マンマンじゃねえか!」

ウズウズしている会長の隣で俺は頭痛と戦っている。四月に起きたFクラスによる下剋上は文月学園に新たな風を起こした。その結果は召喚大会に目に見えるように表れている。

それ自体は学園生活を盛り上げていく生徒会としても悪くない。悪くないんだけど問題は会長にある。良い意味でも悪い意味でも有名な会長は手加減というものを知らない。

元々強かつたのに加えて生徒会(ウチ)の顧問が興味本意で剣術を教え、その技術を召喚獣に反映させた結果手がつけられなくなつたのだ。

Fクラス戦で会長がサシの勝負で敗れたと聞いた時は驚いたけど、それでも会長が十分強いことに変わりはない。俺の思いはただ一つ。

(戦う相手にトラウマを与えないか心配だな…)

『対戦相手は二年Bクラス、岩下 律子(いわした りつこ)さん。菊入 真由美(きくいり まゆみ)さん』

「Bクラスか…」

こつちにはCクラスの会長がいるとしても、俺はEクラス。さつき小波が言つてたセオリ一ならDクラスあたりが相手になると思つたけど…。

「いきなり生徒会長とはね…真由美!」「ええ、いくわよ律子!」

対戦相手の女子二人が頷きあう。仲良しなのかな?

「それでは召喚してください」

立会人を務める数学の木内先生から許可が下りた。

「試獣召喚（サモン）っ！」

目の前に対戦相手の召喚獣が現れる。岩下の召喚獣は格闘家風の服に巨大なハンマーを装備している。菊入の召喚獣は剣士風の服にメイスを装備している。

【数学】

Bクラス 岩下律子 179点

Bクラス

菊入真由美 163点

「私達もいくぞ！」

「ああ」

「試獣召喚（サモン）っ！」

呼び出された俺達の召喚獣。会長の召喚獣は赤いローブに禍々しい剣を持つ魔王の印象を持っている。対する俺は

「悟志は…探検家？ 武器はなんだ？」

会長の言う通りの印象だろうな。ゴーグル付の帽子、首に赤いマフラーをした探検家を思わせる服装。そして武器は何かと召喚獣に右手を挙げさせると

「ふむ、鉄の棒か」

「…話にならねえ」

なんで召喚獣の装備にこんなにも差がつくんだろうか？

【数学】

Cクラス 神条紫杏 126点
Eクラス 辻井悟志 13点

「「「…………」「」」

場に沈黙が流れる。

「……悟志……？」

「因数分解も解らん俺にはこれが限界だ」

何か言いたそうな会長に早めに釘を刺しておく。正直、悪かつたと思つてゐる。

「それでは、試合を開始します」

「よし会長っ、俺が片方を相手にするからもう片方をよろしく」

黙つたままの会長にそれだけ言つて前に出る。

向こうも武器を構えて突進してくる。

「…………を……」

(ん？ 会長？)

隣を見ると俯いてプルプルと肩を震わせている会長が。まさか怒つてゐる？

「悟志、貴様……」

見苦しい言い訳をするなあああああつ！」

マズイっ！

俺は咄嗟に召喚獣に横つ飛びさせる。すると

ズバアアアアン…！

気が付けば対戦相手二人の召喚獣の胴体が真つ二つに分かれていた。そう、会長の召喚獣の剣の一振りによつて放たれた斬撃が離れた位置にいる敵をも斬つたのである。

「うそ…？」

「そんな…？」

「し…勝者、神条・辻井ペア」

相手の召喚獣は当然戦死。周りが啞然としている中、我にかえつた木内先生が試合終了を告げる。岩下と菊入がショックを隠しきれずにうなだれる。まあ当然だな。とりあえずトラウマにはならずに済んだかな。

と思つてるのも束の間。

「待つてくれ会長！　試合はもう終わつた！」

「黙るがいい！　今ここで貴様の怠慢を叩き直す！」

試合終了を告げられても神条は召喚獣を操り斬撃を飛ばし、俺は召喚獣を必死に操り全て避ける。ギリギリ二桁の召喚獣であんな物を喰らつたら戦死は免れない。

ちなみに清涼祭の間は戦死しても補習は無い。その為、清涼祭が終

わった後日に全て回されるのだ。面倒を無くすためにもなるべく戦死は避けたい。

「神条さん、辻井君、試合は終わりましたよ」

立ち会い人の木内先生によつて召喚フィールドが消された。助かつたと思ったのも束の間、会長に首の後ろを掴まれ引っ張られる。

「仕方がない。校舎裏で話をしよう」

「あの会長？俺、Fクラスの手伝いが…」

「大丈夫だ。時間は取らないから」

「あのう、お手柔らかに出来たりh 「無理だな」 ですよね」

もはや話し合いの余地なしと判断した俺は大人しく校舎裏まで引っ張られ説教を受けたのだつた。

召喚大会一回戦 一輝＆梨子（1）

一輝視点

辻井と神条がなんなく初戦を制した。労いの言葉をかけようと思つたが、試合が終わつて早々辻井が神条に連れていかれたため断念した。

そしていよいよ俺達の出番だ。名前を呼ばれてステージに立ち、今は対戦相手を待つている。

「わくわく……わくわく……」

「楽しそうだな、お前」

隣にいる相棒はまだかまだかとウズウズしている。

「そりやあたしにとつて初の召喚獣バトルだもん。一週間前から待ち遠しくて仕方がなかつたんだよ？」

「随分と待つてたんだな。そのテンションが試合まで持てばいいけど」

「大丈夫大丈夫、問題なし！（グツ）」

「その自信はどこから出てくるんだ？」

試召戦争をまだ一度も経験したことのない筈なのに石川梨子の顔に不安はない。

「真っ先に戦死しちゃつたとしても一輝がなんとかしてくれるんだよね？だからあたしは安心して召喚獣の練習に専念できるもん。対戦相手だつてレベルの近い相手になるんでしょ？」

「……ああ。俺達はFクラスだから初戦の相手はEクラス連中になる筈だ……多分」

去年の召喚大会を見学し考察した結果、『初戦はなるべく同じクラス同士ではない』かつ『あまり実力差は離れていない』と、トーナメントの組み合わせは徹底されていた。

だが今回は正直いうと断言出来なくなっている。辻井と神条の相手がBクラスのペアだったからだ。EとCのペアなら無難に考えればDクラスのペアになるのにBのペアは頭一つ抜き出ているように思えた。

単にDクラスのペアがいなかつたのか？ それとも…

「…リコ。例え相手のレベルが高かつたとしてもお前は今回は召喚獣の操作に専念してくれ」

「りょーかい。でもある程度操作に慣れたら好きにやらせてもらうからね？」

念のために忠告してもリコには意味がないかも知れないな。そんな事を考えていると俺達の対戦相手が発表される。

《対戦相手は二年Aクラス、小杉 優作（こすぎ ゆうさく）君。久保利光君》

…………は？

「これは…………面白くなつてきたんじやない!?」

「いきなりAクラスだとつ…！」

隣で場違いなリアクションをしているリコを無視して俺は驚きの声をあげた。まさかの予想外の組み合わせだ。しかも…

「いきなり君達と当たるとはね…。この間の一騎討ちの借りを返させ
て貰おうか」

学年次席の久保がいる。宣戦布告じみた事を言いながら眼鏡をクイッと上げている。そしてその隣には：

「この日が来るのをずっと待っていたぜ、小波」

去年から馴染みのある男子が待ちに待つたと言わんばかりに俺の前に立つ。隣のリコが聞いてくる。

「……ねえ一輝、あいつと知り合い？」

「ああ、毎回しつこく野球部に勧誘してくる野球馬鹿だ。ここ最近は大人しくしてくれてたんだけどな」

文月学園野球部レギュラー、小杉優作。Aクラスに在籍しての通り成績優秀で野球の実力も次期キヤップテンの呼び声も高く、中学時代は名前の通ったスター選手である。そんな奴が何故ウチの学校にいるのかと、去年見かけた時は驚いた。しかしその理由はすぐにわかつた。

そして小杉は俺に頭を下げる。

「小波、この通りお願いだ。野球部に来てくれ！『伝説のキヤップテン』と呼ばれたお前がチームに入れば甲子園だって夢じゃない！」

そう、コイツは俺が文月を受けると聞いてウチにやつて来たのだ。俺と野球をする為に。それでも答えは決まっている。

「答えはノーだ。小杉、俺は高校で野球をやるつもりはない。理由は前にも話しただろう？」

もう何度も話しているし何度も断っている。それでもコイツは——

「……わかった。ならば勝負だ！　俺が勝つたら入部を検討してくれ」

——毎回勝負を仕掛けてくるのだ。だがいつもは野球部に入れ、なのに今回は入部を考えてくれ、とはな…。

「……いいだろう。負けたら入部を考えておく」

「ああ、それでもありがたい」

もつとも、負けるつもりは無いがな？

「久保、今更だけどありがとな。俺の我が儘に付き合つてくれてよ」「構わないさ。実は誰とペアを組もうか悩んでいたんだ。姫路さんへのリベンジもあるしね。だから小杉君、誘つてくれてありがとう」

「それでは召喚してください」

「試獣召喚（サモン）つ！」

木内先生の合図で二人は起動ワードを唱える。足下に魔方陣が展開し、そこから鎧と袴に大鎌を装備した久保の召喚獣と、侍のような格好（着物、羽織に袴）をして腰に刀を差している小杉の召喚獣が姿を現す。

「リコ、相手が相手だ。油断するなよ？」

「わかってるって。んじや、いつくよー！」

「試獣召喚（サモン）つ！」

俺達も召喚獣を呼び出す。俺の目の前には野球のユニフォームと帽子、右手にバットを装備した俺の召喚獣が現れた。リコの方を見てみると

「海賊か？」

青を基準とした海賊のコートを着ており、右手に曲剣を持つリコ
そつくりの召喚獣が立っている。

「へえ……これがあたしの召喚獣か。いーじやん、気に入った♪」

自身の召喚獣を誇らしげに眺めているリコ。どうやらある程度戦
える装備のようで内心ホッとした。

そして試合開始と同時に先手必勝と言わんばかりに一体の召喚獣
が敵に向かって走つていった。

【数学】

Fクラス	小波一輝	179点
Fクラス	石川梨子	216点
V S		
Aクラス	小杉優作	206点
Aクラス	久保利光	387点

召喚大会一回戦 一輝＆梨子（2）

一輝視点

「何やつてんのおおおつ!?」

俺は驚かずにいられなかつた。何故なら試合開始早々敵に向かつて突つ込んでいつたのは

「突撃だあー！」

リコである。海賊衣装の召喚獣は真正面にいる久保の召喚獣と武器をぶつけ合つている。

「リコ！ 操作に慣れるまで大人しくするように言つただろ！」

「もう慣れた！」

「早くない!?」

「召喚してから試合開始までの間に腕や足を動かしてみた。それだけで充分！」

「不充分過ぎるわ！ あと学年次席相手にむやみに突つ込むんじゃーー」「よそ見してんじやねえ！」——おつと

リコに注意している最中に小杉が割り込んできた。召喚獣の持つ刀で俺の召喚獣に斬りかかる。

「おらっ」

「（斬撃…） つ!? 危ない！」

俺は小杉の一振りを大雜把に回避した。いや、してしまつた。回避した後で俺はふと気付く。

(…そうだった。相手は神条じやないんだ)

ある程度点数が高く、剣を武器にしている召喚獣を相手にするとい
い斬撃が飛んでもくると警戒してしまう。

…まああんな芸当が出来る奴が何人もいたら堪つたものじやない
が。

今の攻撃で小杉（コイツ）にそれは出来ないと確信し、俺は反撃に
動く。武器であるバットで何回か刀を受け止める、そして小杉が刀を
上段に構えたスキについて、バットで腹部を殴る。

「あつ！」

『しまつたつ！』と言うような声をあげる小杉を余所に動かなく
なつた小杉の召喚獣が両手に持つ刀を払い、渾身の力で頭を強打。人
間なら致命傷は免れないだろうダメージを受けた小杉の召喚獣は

【数学】

Aクラス 小杉優作 D E A D

当然戦死した。よし、早くリコの加勢にーー

《勝者、小波・石川ペア！》

ーーはい？

リコの加勢に動こうとして試合終了の合図が、そして実況の女子生
徒が俺とリコの名を告げる。

「一輝、勝ったよー」

「負けた……この僕が…」

振り向くとそこには満面の笑みでVサインを掲げるリコと両手を

床についてこの上なく落ち込む久保の姿があった。

「うそ……リコ、勝ったのか？」

「いやー楽しかった。それじや、あたしは先に中華喫茶に戻るからねー？」

俺の質問の答えになつていない返事をするリコは満足気にステージを降りていつた。追いかけようとすると、近づいてくる何かを察して立ち止まる。

「小波」

小杉だ。あんなあつけなく負けて悔しくない筈無いのにな…。

「今日は俺の負けだ。だけど俺は諦めないからなつ！ 必ずお前を野球部に入れて見せる！」

「……負けないよ」

時々自分が嫌になるな…。こうやつて何度も挑戦を受けてしまうから面倒な事になるつていうのに…。

落ち込んでいた久保も復活し、こつちに寄ってきた。

「君達には見事の一言だよ。石川さん…だつたかな？ 彼女、Fクラスにしては随分と高い点数だつたけど一体何者だい？」

「そうだぜ。召喚獣動かすのだつて今日が初めての筈だろ？ それで久保に勝つなんて只者じゃないだろ？」

…言われてみれば彼女はAクラス並の点数を取つていた。それに、召喚してから試合開始までのたつた数十秒で操作に慣れるなんて可能なのか？

俺や明久はともかく、一年時に召喚獣の操作訓練を数回行つても慣

れない人は多いのに…。

「転校してきてまだ一ヶ月。アイツに關してはまだ分からぬことが多いんだよ。数学だけ高いのか、Aクラスレベルなのに点数調整してわざとFに来たのか、今のところはなんとも言えないな」

「わざとFクラスに？ そんな奴いるのか？」

「いるぞ。そういう連中はFクラスに何人も。俺だつて、その一人だしな」

そう言つて俺は一人をステージから降りるように促す。こんなとこで喋つていたら大会運営の迷惑だし、俺達三人は校舎に着くまでまで世間話で盛り上がつた。

明久視点

「……雄二。これつて何かの冗談だよね？」

「現実を見る明久。正直俺も試合が終わつたら運営に文句が言いたいくらいに苛ついている」

ははは…。顔は笑つてゐるけど頭に怒りマークがついてゐると思えるくらい今の雄二は怒つてゐる事がわかる。辻井君達の相手がBクラスペア、一輝達の相手がAクラスペア、本来なら実力差が上でトーナメント一回戦で当たることはないと一輝は予想した相手だ。そして僕と雄二の対戦相手は運営からの嫌がらせを疑う程の組み合わせだつた。

『三年Cクラス、芹沢 真央（せりざわ まお）さん。三年Aクラス、
白瀬 芙喜子（しらせ ふきこ）さん』

まさかの三年生のペアである。

召喚大会一回戦 明久＆雄二（1）

???視点

（なぜこうなった…？）

あたしは白瀬美喜子、受験を控える高校三年生よ。まあ受験生といつても時々授業サボつて屋上で昼寝している、いわゆる不良（ヤンキー）なんだけど。

今日が清涼祭当日だとしてもそれは変わらない。クラスの出し物をサボつて屋上で昼寝していたそんな時。知り合いに叩き起こされて無理矢理体育館に連れて来られた。

そして今、召喚大会？のステージの上に立っている。

「…ねえ真央。いい加減あたしをここに連れてきた理由を教えてくれないかしら？」

隣に立つあたしをここに連れてきた元凶に尋ねる。

「…………腕輪」

「腕輪？」

「…………かつこいい」

「あのねえ、全然理解出来ないんだけど？ 腕輪って何なの？」

隣にいる女は芹沢真央っていう去年のクラスメートでそれなりに交流はあった。常に無表情で何を考えているのか分からぬ。

今だつてそう。口数が少ないので説明が不充分。

「…………腕輪、優勝商品」

「優勝商品つて…この大会の？ で、それが欲しいってわけ？」

「…………（こくつ）」

そういうことね。まつたく…

「はあ…わかつたわ。めんどうくさいけど協力してあげるわ」

「…………ありがとう、フツキー」

「その呼び方はやめて。別に礼なんていいわよ。去年同じクラスだつた好みで仕方なく付き合つてあげるだけよ」

「…………フツキーはツンデレ」

「…ケンカ売ってるのかしら？」

去年と変わらないやりとりを交わしてあたし達は召喚獣を呼び出した。

明久視点

対戦相手である先輩二人…………とにかく強い。雄二が相手しているのは黒髪ショートヘアの芹沢先輩。試合前に少し会話をしたけど口数が少なく、ムツツリーニみたいな印象を感じた。

「うおっ!?

「…………外れた」

雄二に攻撃が当たらなかつたのが悔しかつたみたいで、残念そうにしているのがなんとなくわかつた。苦戦を強いられてはいるけど雄二はなんとか戦えている。

「くつ」

「へえ、なかなかやるじゃない」

神経を集中させて攻撃を避ける僕に対して余裕の表情を見せる白瀬先輩。銀髪のベリーショートの髪にウチの学園では珍しくブレザーのボタンを外してネクタイをつけていない、ヤンキーポい格好をした女子生徒。近寄りがたい雰囲気があつたけど、さつきの芹沢先輩との会話を聞く限り悪い人じやないみたい。それよりも…：

（なぜだろう。この人何処かで会つたような…）

白瀬先輩とは初対面の筈なのに、頻繁に会つている気がする。…何故だろうか。

「うわっ」

急所に一撃を喰らうになり、少し距離を取る。そして思わず愚痴を溢してしまう。

「はは……これはちょっとキツいかな。」

少し前の僕には召喚獣の操作に関して周り皆に勝つているという自負があった。その自負は前のAクラス戦での敗北で粉々に砕けちつてしまつた。

次こそは勝利に貢献したい、と僕は点数を上げるための勉強や、操作性を磨くために教師の手伝い。やれるだけの事は。それでも上には上がいる…。

「雄二、これってヤバくない？」

「ああ、正真正銘ヤバいだろう。…よし、こうなつたらあの作戦でいくぞ」

えつ、何か策があるの!?

「いいか、作戦内容はこうだ。明久が片方を引き付けーー」

「ふむふむ」

「——その間にもう片方を明久が倒す」

「それ両方僕の仕事じゃないか一つ！」

こんな時に自分が楽しそうなんて何考えているのさ！

「……ふう、少しあいつものお前らしくなつたか？」

「つ!?

「さつきから見てたが、お前ガチガチになり過ぎだ。もう少し肩の力抜け」

「あ…」

もしかして僕…

「姫路の転校の事、ずっと気にしてたんだろう」

図星のため何も言えない。

「気持ちは分かるが、もう少し気楽にやれよ。ここで俺達が負けても一輝と石川が残つていれば目的は果たせる」

「雄二…」

「それに俺達はFクラス。相手が強いのは当たり前。緊張するくらいなら全力で戦つて悔いなく負けようぜ？」

まつたく…コイツは。

「ははは、負けてどうするのさ。…そうだよね。僕たちはFクラス、最底辺だ。戦力差なんて変えられないんだし、だつたらバカにはバカの戦いがあるって事を相手に教えるとするよ！」

「その粹だ明久」

ありがとう雄二、おかげでいろいろ吹っ切れた。

ここから反撃開始だ！

召喚大会一回戦 明久＆雄二（2）

明久視点

「おりやああつ！」

吹つけられた僕に迷いはなかつた。全神経を研ぎ澄まし、相手の攻撃を避けて一撃を叩き込む。

「くつ…なかなかやるね」

【数学】

Fクラス 吉井明久 29点

V S

Aクラス 白瀬美喜子 118点

もともと三百に近かつた白瀬先輩の点数も半分以上削ることができた。とはいえ僕も攻撃を喰らいすぎて残りの点数は僅か。油断は出来ない。

「痛つ……！」

今までに白瀬先輩によつて攻撃された腕や足、頬に痛みが走る。観察処分者仕様の召喚獣は受けたダメージが召喚団本人にもフィードバックされるため、力のある召喚獣の攻撃は相当なものである。それでもーー

「負けるわけにはいかないんだつ…！」

清涼祭の出し物が決まった日の放課後。瑞希ちゃんが早々に帰宅した事を見計らつて美波が馴染みのメンバーを集めただ。そして彼女の口から衝撃の一言が放たれた。

『瑞希ちゃんが転校っ!?』

『うん…やつぱりFクラスの環境は瑞希にとつてーーつて、アキ? 聞いてる?』

『…………』

『…………し、死んでるつ…!?

『姫路の転校にショックを受けたのか!?

『明久、しつかりせい!』

『…………はつ! ここは誰? 僕はどこ?』

『あ、息を吹き返した』

『ポンコツロボットみたいな復活ですけど大丈夫なんでしょうか?』

『明久だし、これが正常だろ』

周りが言いたい放題言つてるけど今はどーでもいいや。

『美波! 瑞希ちゃんが転校つて、どういうことさ!』

『どうもこうも、そのままの意味よ』

『なるほどな…』

何がなるほど、なの? そう思つていると察したのか雄二が

『両親の仕事の都合じゃなく、ただ単に設備と環境の問題か。姫路の高いレベルに対して設備は卓袱台に座布団、周りはレベルの低い連中ばかり。普通の両親なら姫路の転校を考えるさ』

『それに瑞希は身体も弱いから』

『そんな…』

じゃあどうすれば…。

『……要は問題は二つ。教室の設備・環境と、姫路の成長を促す競争相手がいなってことか』

一輝？

『島田。二つ目の対策なら既に練つてあるんじゃないかな？』

『う、うん。瑞希と召喚大会に出る事になつたわ。必死に頼まれちゃつて』

『一人だけでなく、他にも何人かFクラスのペアを出場させればいい。その中の誰かが優勝すればFクラスにも刺激しあえるライバルがいるという証明になる。そうなれば競争相手の問題は解決だ』

『そうか。僕たちも出場すればいいのか。瑞希ちゃんが優勝出来なくとも僕たちが優勝すれば…。』

『……ただ、教室の設備に関しては喫茶店の売り上げだけではどうにもならんな。割れた窓ガラスもだが一番の問題は畳だ。以前教室を掃除した時に見ただろう？あの腐った畳の裏を——』

『やめろ、思い出させるな！』

『あれは酷かつたのう…』

『…………夢に出る』

確かにあれはトラウマ物だつたかな。万が一の為に女子達には見せなくて正解だつた。

『一輝、売り上げでも無理なら設備はどうするの？』
『学園長に直訴するしかないな。売り上げを全額寄付しても設備の改善をお願いするしかないさ』

周りが頷く中、リコだけが疑問を浮かべる。

『寄付？ 学校側に問題があるならそなことしなくてもいいんじゃないの？』

『リコはまだこの学校を知らないんだつけ？ 学校側はFクラスの設備・環境を問題視してないんだよ。競争意識を高めるという考え方から設備に差をつけているんだし、もし設備が気にくわなければ試召戦争を仕掛けて他所から奪いとれって話になるからな』

……あれ？ そういえば

『ねえ雄二。過去に上位クラスに勝つて、設備の交換じやなく設備のランクを一つ上げる提案が通った…とか言つてたよね？

僕たちつてAクラスに勝つたけど再振り分け試験を保留にしてるじゃない？ その権利を設備のランクアップに変えられないの？』

僕の提案に雄二は苦虫を噛み潰したような顔をして

『それは無理だ。振り分け試験は行われたからな』

『はい？』

どゆこと？

『俺達の知らない間にAクラス行きを望んだバカ共がその権利を使つて再振り分け試験を受けたんだ。結果は言わなくとも判るだろう』

つまり須川君達（確定）が勝手に権利を使つて振り分け試験を受け、見事に全員撃沈したということか。

『なにやつてるんだよう…』

『泣くな。とりあえず学園長室に行くぞ。ついでに喫茶店をやる為の空き教室も早いところ探さないとな』

空き教室なんてあるのかな…？ 僕ら以外のクラスは既に準備を始めてるのに…。

あの後、雄二と一輝を連れて学園長と交渉に行つた。即決で断られたりもしたけど、粘りに粘つた結果、召喚大会で優勝し、商品の腕輪と交換で腐った畳や割れた窓ガラスの改善を約束してくれた。その他の備品に関しては喫茶店の売り上げでどうにかしなきやだけど。さらに幸運な事に生徒会室を借りられる事になつて僕らにとつては良い方向に話が進んでいる。

一輝が言つた二つの要因は召喚大会の優勝で解決する。負ければ瑞希ちゃんが転校するかもしない。だからーー

「勝たせてもらいますよ、先輩！」

「…言うじゃない、やつてみなさいよ！」

余計な事を言つたかな？ さらにやる気にさせたみたい。

「おつと、あぶな！ ……スキあり！」

更に集中力を上げ、攻撃を避けては一発叩き込む、を繰り返す。

次第に点数差は縮まつていき、そして

Fクラス 吉井明久 29点

V S

Aクラス 白瀬美喜子 D E A D

ついに相手を戦死させた。

「か：勝つた」

「あちやー、負けたわ」

苦労した勝利に内心喜んでいる僕。

「終わつたか明久」

「雄二、そつちは？」

「とつくに終わつたぞ？ 相討ちで両方戦死した」

「…………一人が終わるの待つてた」

そうだつたんだ…。芹沢先輩、少し悔しそうにしてる。

「…………腕輪、欲しかつた」

「ごめんね真央。あたしが勝つていれば…」

芹沢先輩は首を横に振る。

「…………フツキーはベストを尽くしてくれた。私が負けた、それだけ」

「その呼び方は…………まあ、今日はいつか。さ、元気出しなさい。美味しいもの奢つてあげるから」

「…………うん」

こうして先輩達は去つて行つた。

校門にて

やつと地獄（説教）から解放され、校門付近でチラシ配りをしている小波を見つけた。小波も俺を見つけてこちらに走ってくる。

「辻井、遅かつたじゃないか。真っ先に試合を終わらせた筈のお前がこの場にいなかつたから何かあつたのかと心配したぞ？」

「悪かつた小波。試合が終わってすぐ会長達とO H A N A S Iで盛り上がりつてさ。そのせいできれいに遅れてしまった」

「…お話？　まあそれはともかく、これがお前の分のチラシな。よろしく」

「ああ。遅れた分しつかり働いてやるさ。

只今、本校舎四階で営業中！　中華喫茶ヨーロピアン！　ぜひともご来店ください！」

何か都合のいい勘違いをしてくれた小波に心の中で感謝しながらチラシの束を貰い、元気よく大声を出して訪れた一般客に配る。

一輝視点

「ふう〜…やつと終わつたな」

チラシを配り終え、背伸びする辻井。それを見た俺は軽く笑いながらポケットから小さな瓶を二つ出してその内一つを渡す。

「お疲れ様。これやるよ」

「お、パワビタDじゃん。サンキューな」

喉が渴くだろうと思つて持つてきたパワビタDを受け取つた辻井はすぐにキヤップを開けて口に持つていつた。俺も自分のを飲む。

「それにもしても辻井って、思つてたよりデカイ声出すんだな。意外だつたよ」

「ははは、昔から大声出す練習をやらされたからな。これくらいは平気かな」

「ふうん。何かスポーツでもやつてたのか？」

「中学まで野球をな。結構良いとこまで行つたんだぜ？」

辻井も野球やつてたのか…。良いとここまで行つたのに高校で野球やらないのはなぜだろう？ …まあ、俺も訳ありで高校で野球をやつてないし。下手に深入りするのはやめよう。あ、そうそう

「そろいえ、試合終わつた後、会長達と話してたみたいなこと言つてたけど、生徒会で集まつて次の試合の対策でも練つていたのか？」

「いや。せつきも言つた通りO H A N A S I 、つまり説教くらつてただけさ」

「説教？ なんで？ 戦死したわけでもないだろ？」

「点数に問題があるんだよ。数学13点、流石に皆怒るよな」

それを聞いてなんとも言えない気持ちになつた。

「数学はマジで駄目なんだよな。中学レベルの問題すらもお手上げでさ。以前神条が作つてくれた中学生の数学のテスト問題で証明された」

ん、中学生の数学？ もしかして…。

「ああ～辻井？ 多分それ作つたの俺だ」

「はい？」

「先月のAクラス戦前に確かめたいことがあつて、小学生の日本史のテストの作成を神条に手伝つて貰つたことがあつてさ。その時神条も中学生の数学のテストが必要らしくて俺と瑠璃花が手伝つたこと

gーー」

「犯人はキサマかーつ！」

辻井は俺に掴み掛かる。え、どうしたの急に！？

「まさかあのテストを作つた人間がこんな近くにいたとは驚いた…。
お陰でこつちは地獄を見たというのに…」

「たかが中学生のテストで一体何が起きたんだ!?」

「数学の成績が中学生以下だと判断された俺と室町は一週間罰ゲームありのテストを放課後ずっとやらされる羽目になつてな…」

「苦手科目のテストを一週間か。それはキツいな」

「それでも成績は思つたより伸びなかつた。だから神条の奴、今度の定期テストで結果を出せなかつたら俺を船越先生とくつつけるとか言つてくるんだよお！」

「それはキツいな！」

数学教師、船越先生（四十五歳独身）。婚期を逃し、ついには単位を盾に生徒達に交際を迫るようになつた危険人物である。

実を言うと去年一度だけあの先生に迫られたことがある。好みのタイプだから、と。なんとか貞操は死守出来たが次はどうかわからな
い…。

「なんだ、そのー…ごめん」

「いいんだ、わかってくれれば」

まさか知らない所で彼を巻き込んでいたんだな…。俺自身まったく非がないってレベルの話だけど他人事に思えない事が恐ろしい。それから少しして辻井が話を切り出す。

「さて。とりあえずこの時間帯に配るチラシは無くなつたし、二回戦まで時間もあるし、一旦店に戻るか」

「そうだな。トーナメントの組み合わせについて明久と雄二に聞いたことがあるし」

そう言いながら俺達が校門を離れようとすると

「すみません、少しいいですか!?」

突然の呼び止める女の子の声。振り向くと小学生くらいの女の子が二人。一人は茶髪のツインテール、もう一人の子は緑髪で頭のてっぺんのアホ毛がピヨコピヨコ揺れている。

目を見れば俺と辻井を呼び止めた事は分かる。しかし初対面だから、二人は俺達に対してもやら警戒心を抱いている。俺は怖がらせないようにゆっくり近づいた後、彼女達の視線に合わせるようにその場にしゃがむ。

「どうかした?」

少しは警戒が解けたのか、二人は互いに顔を見合せて俺の問いに答える。

「優しいお兄ちゃん（お姉ちゃん）をさがしています！」

小さな来訪者

「お、覚えてろよつ！」

小学生二人と共に四階に上がり、中華喫茶が見えてくる。すると突然扉が開かれ、黒髪モヒカンの生徒がまったく動かない坊主頭の生徒を抱えて走り去つていつた。

「…何があつたんだ？」

「さあ？」

小波の問いに俺はそう答えるしかなかつた。俺的には態度の悪い客を吉井と坂本が追い払つたのだと信じたい。

「は、葉月ちゃん。怖いです…」

「茜ちゃん大丈夫です、葉月が側にいるです！」

先程の光景に茜ちゃんは怯えて葉月ちゃんの後ろに隠れる。そんな茜ちゃんの手を優しく握る葉月ちゃん。…なんか和むな。すぐにでも吉井と坂本、小波の四人で情報交換をしたかつたが、どうやら喫茶店の現状を知るのが先決らしい。

喫茶店の扉を開けた小波は、たまたま近くにいた坂本と木下に声をかける。

「ただいま戻つたぞ」

「一輝と辻井か、お疲れさん。一回戦はなんとか勝つたぞ」

「それは良かつた。ちなみにさつきの二人はなんだ？　まさか営業妨害か？」

「まさかも何もその通りだよ。さつきの一人、三年の先輩らしくてな。真ん中の席に座つて大声で料理が不味いだの何だのクレーム抜かしやがつたからつい…な」

「…ついって？　一応聞くけど何をやつた？」

うん。そこは俺も気になる。

「『パンチから始まる交渉術』、『キックでつなぐ交渉術』、そして最後に『プロレス技で締める交渉術』を実施したまでだ」

「…ちなみに使用したプロレス技はバックドロップじゃ」

坂本の説明の後で木下が補足を入れる。聞いただけで分かりやすい、そして世界一受けたくない交渉術だな。

「それで、迷惑をかけたお詫びに今いる客の頼んだ品を半額にしていいのかそれで？」

「料理も好評だから問題ない。客達も悪いのは向こうだと言ってくれている。さて、次は…」

そう言いながら俺と小波の側にいる少女一人に目をやる。

「チビッ子二人の説明をしてもらう」

「ああ、この子達はーー」

「葉月（茜）達、優しいお姉ちゃん（お兄ちゃん）を探しているです！ 知りませんか？」

店内での立ち話は迷惑な為、俺と小波と坂本、木下は一度喫茶店の外に出てツインテールの女の子、島田 葉月（しまだ はづき）ちゃ

んと、緑髪でアホ毛が特徴の高坂 茜（こうさか あかね）ちゃんの話を聞くことに。

ちなみに葉月ちゃんはFクラスの島田美波の妹らしい。

「成る程。一人とも以前困つてたところを助けてくれた優しいお兄さんとお姉さんに会いたいんだな？」

「はい（そうです）っ」

話を聞いた坂本がまとめた結論を言うと二人は同時に肯定の返事をする。

「じゃあ島田妹。今お前が探しているお姉ちゃんはウチのクラスの島田美波じやないんだな？」

「はいですっ。葉月のお姉ちゃんに会いに来たのもありますけど、前に困つているところを助けてくれた優しいお姉ちゃんにもお礼を言いたいですっ」

「そうか…。で、そっちのチビッ子はお兄さんを探していると？ 家族の兄じやなく？」

「はい、茜も去年この学校に通う優しいお兄ちゃんに助けて貰いました。ですからお礼をーー」

途中で言うのをやめた茜ちゃんは表情を明るくする。彼女が見ている方向から一人の男子生徒が二人の女子に挟まれて歩いていた。

「休憩用のジュース、これだけあれば足りるよね？」

「ありがとねアキ。ジュース運ぶの手伝ってくれて」

「いいよいよ。女の子二人だとキツいでしょ？」

「それでも嬉しいですよ、明久君」

「ははは……ん？ 雄二に一輝に秀吉に辻井君？ 廊下で集まつてなにして「おにーちゃーん！」 んんつ!?」

「えええつ!?」

吉井を見つけるなり正面から抱きつきに行つた茜ちゃん。抱きつかれた本人だけでなく隣にいる姫路と島田も驚いてショックを受けている。

「…………つて、君は茜ちゃん？　久しぶりだね！」

「茜を覚えていてくれたですか？」

「もちろんだよ。リンさんも元気にしてるかな？」

どうやら茜ちゃんの探し人は吉井だつたらしい。これで問題解決。

「あれ？　葉月じゃない。どうしてここに？」

一時的なショックから解放された島田は妹がこの場にいる事を問う。

「お姉ちゃん、その格好似合つてるです！」

「えっ、そう。ありがと」

妹にチヤイナ服姿を褒められて嬉しそうな島田。それを他所に俺は吉井と何かを話している姫路を見ながら島田妹に聞いてみる事にした。

「ねえ葉月ちゃん。君が探しているお姉さんって、もしかしてあの人？」

葉月ちゃんは姫路を見た後首を横にふる。

「違うです。葉月が探しているお姉ちゃんはポニー・テールで眼鏡を掛けている人です」

「ポニー・テールに眼鏡か……」

残念ながら心当たりがないな…。まあウチの学校の生徒だし、何処かに居るだろう。

会議

商品が半額となり満足した客全員が店を去った後、客の少ない時間を見計らつて召喚大会に参加するFクラスと生徒会役員による会議を行われている。ただし今いる生徒会メンバーは俺と室町だけである。

「当然、明久と雄二も勝つたよな」

小波の確認に対し吉井は苦笑いで答える。

「ギリギリだつたけどね…。瑞希ちゃんと美波は？」

「こちらも勝ちました」

「楽勝よ」

「いえーい！」

ハイタッチを交わす二人。そんな二人を微笑ましく見ている吉井。

「全員無事に一回戦を突破、出だしはいい感じだね。上手く行けば決勝はあたし達で独占出来るかもね」

石川の発言に吉井や室町、姫路、島田のテンションが上がる。しかし小波、坂本は何も言わず考える素振りを見せる。

「ん？ 一輝、雄二。どしたの？」

気になつた石川が二人に問う。

「…ああ。今回のトーナメントの組み合わせ…」

「何か裏があるような気がしてならない」「裏？ なにそれ？」

「今はまだなんとも言えん。とにかく皆、二回戦も気を引き締めるようにな」

小波が全員にそう告げる。まあ油断するつもりは毛頭無いが。

「が、頑張ります！」

転校が掛かっている以上、姫路も気合い充分だ。ちなみに彼女の転校の話は試合の後で会長から聞いた（会長達女性陣は清涼祭前に聞いたらしい）。姫路の目的は大会の優勝だけど、その問題はFクラスの誰かが優勝すれば白紙になる。

それに賞品である腕輪の欠陥を公にしないことを考へると何としても彼女の優勝は阻止しなければならない。

腕輪の件を知っているのは俺と生徒会メンバー、小波、吉井、坂本だけ。そこに姫路を加えてもいいが、点数をわざと低くして決勝で戦うなんて真似、例え優勝出来たとしても両親の評価を下げるだけだ。

（小波か吉井、どちらかのペアの優勝が一番の理想だな…）

清涼祭前に屋上で小波達と協力関係を結んだ時から状況次第では優勝を捨てる事も考へていた。あくまで生徒会の目的は腕輪の欠陥を公にしないことだ。

「坂本、客が増えてきた。ヘルプ頼む」

「さて、いつまでも秀吉やムツツリーニ達に任せせるのも悪い。仕事戻るぞ」

名前の知らないFクラス男子の一言を聞いてパンパンと両手を叩き、この場はお開きだと告げる坂本。全員が仕事に戻るなか、チラシン配りをしていた俺と小波は

「一輝、辻井。お前達も接客に入ってくれ。次のチラシ配りは昼からだ」

「了解」

こうして俺達も仕事に入った。

一輝視点

「一輝。三番テーブルにこちらをお願いします」

「任せておけ」

厨房で瑠璃花から烏龍茶と胡麻団子を受け取り、指定のテーブルへと持っていく。そこにいたのは「お待たせしました。本格烏龍茶と胡麻団子です」「うむ、ありがとうございます」

…やんす？

「こつ…これは美味しいでやんす、サイコーでやんす！」

「そうですか、ありがとうございます」

眼鏡を掛けスーツを着た男性。珍しい喋り方だがこれといって可笑しいわけでもないので普通に接することにする。

「君、確かに召喚大会に出てたでやんすね？」

「え？　はい、そうですが」

あれ？ 召喚大会は三回戦までは一般公開は無いから部外者は俺達の試合はまだ見れない筈。……ああ、そういう事か。

「あなたは学園の職員なんですか？」

「察しがいいでやんすね。オイラはつい先日から教頭に任命された亀

田 光夫（かめだ みつお）でやんす。以後よろしくでやんす」

「教頭？ 竹原先生はどうなつたんですか？」

「彼は健康上の理由で退職したでやんす。そして臨時教頭としてオイラが学外からやつてきたのでやんすよ」

マジか、竹原辞めたんだ。…まあ観察処分者の明久を見下すし、成績で生徒に対する態度がコロコロ変わるし、居なくなつて精々した。せめて目の前にいるこの人はマシであつて欲しいと願い自己紹介をする事に。

「そうでしたか。自分は二年Fクラスの小波一輝と言います。何卒御教授願います、亀田先生」

「こちらこそよろしくでやんす、小波くーー」

突然、亀田先生の口が止まつた。

「亀田先生？　どうかしましたか？」

「…小波君」

「はい」

「…変なことを聞くでやんすけど…君の父親の名前は、何て言うでやんすか？」

何を聞かれると思つたらまさかの親父の名前？ ううん……別に

隠す必要はないしな。

「俺の父は——」

『んゴパつ』

『大変！ アキが瑞希の淹れたお茶を飲んで倒れたわ！』

『：姫路さん、どんなお茶の入れ方をすればこうなるんですか？』

『明久君、しつかりしてください！』

「——ですよ？」

厨房の方が何やらやかましかつたが、気にせず父の名を教えた。

「は、はは……」

変な笑い方をする亀田先生。

「そうでやんすか……」

肩の力を抜いてガクツと俯く。一瞬見えたのだが、下に向けた際の先生の顔は笑っていた。ホツとしたような、嬉しそうな、そんな顔だった。

「ありがとうでやんす。また食べにくるでやんすよ」

しばらく俯いていた先生は顔を上げて烏龍茶の残りを飲んで席を立つ。

「（）ちそうさまでやんす」

代金を払つて店を出たのだつた。

最悪に備えて※

『勝者、神条・辻井ペア！』

「なんだとくつ！」

「そ、そんなあくつ！」

召喚大会の二回戦。俺と神条は難なく勝利した。対戦相手はEクラスのペア、俺のクラスメート達だった。そして、戦ったのは召喚獣の筈なのに相手の二人は激戦を繰り広げた後のようにボロボロな状態で倒れている。…何故？

「ふつ…どちらが勝つてもおかしくない名勝負だつたぞ」

「どの口が言うんだよ…」

一回戦の時の黒子の姿ではなく、制服姿の神条に聞こえない声でツッコむ。わかっていると思うがホントにコイツは情け容赦がない、それだけ言えばどんな戦いになつたか想像できるだろう。開戦真っ先に狙われた奴が憐れでならない。

ちなみに俺も武器である鉄の棒で相手を叩きまくつて何とか勝てた。意外となるととなるものだな。

『つ、辻井…。キサマは悪魔だ…』

『対戦相手をここまで痛めつけるとは…なんて非道な奴…』

おかしい。戦つたのもトドメを刺したのも殆ど神条の筈なのに何故か俺に怒りの矛先が向けられている。無視して喫茶店に戻ろうと歩を進めると神条に捕まつた。

「待つんだ悟志。カズとアカリを交えて今後について話がしたい。一

緒にCクラスまで来てくれないか？」

「…あまり時間は取れないぞ？」

昼前ということもあつて喫茶店が混み始め、試合が終わつたらすぐ戻るよう坂本にも言われてるからな。

「感謝する。…急ぐぞ」

こうして俺たちは体育館を後にする。

「ただいま戻つたぞ」

「お疲れさん」

「お疲れ様」

Cクラス前の通路で待つていた大江と浜野がこつちに気付き近づいてくる。

「で？ サトシ、結果はどうなん？」

「もちろん勝つた。そつちは？」

「当然、勝つたわよ」

「負けるわけないやろ」

Fクラス組だけじゃなく、生徒会組も順調に勝ち進んでいる。ちなみに生徒会組の参加者は俺と神条ペア、大江と浜野ペアの二組が参加している。

「さて、四人揃つた事だし会議を始めよう」

神条が場を仕切り出す。

「私達は無事に二回戦を突破。Fクラスのメンバーも全員勝ち抜いた今、これで三回戦に進出した十六組の中に我々五組が入った事になる」

「充分な快挙やな」

「しかし、この先も五組全員が勝ち進めるとは言えない。そもそも我々の誰かがぶつかる事もあり得るだろう」

「トーナメントだから当然か」

「だからこそ今の内に伝えておこうと思う。最悪のケースに直面した時の対応についてを…な」

「最悪の…ケース？」

「まず我々の目的は…一つ、姫路の転校を阻止する。その為にFクラスのペアを優勝させる。二つ、腕輪の暴走を阻止する為に低得点者のペアを優勝させる。この両方を満たす為にすべき事は、姫路及び、我々生徒会組が優勝しないことだ。つまり小波か吉井のペアを優勝させる」

「せやけど、そう上手く事は進まんとちやうん？ 今回は三年が予想以上に多いし、その理想は強引やなあ…」

大江が若干弱気なのをよそに神条はどんでもない事を言い放つ。

「だからこそ、他クラスのペアに優勝の芽が出た場合は…決勝戦の前に秘密裏に腕輪を破壊する事を考へていい」

「「はああつ!?」」

流石に大江と浜野も驚かざるを得ない。いつも以上の神条（コイ

ツ）のとんでも発言に。

「…一体何を驚いている？ 腕輪の欠陥が世間にバレたら最悪学園の存続に関わるのだぞ？ 運の要素が絡む試召戦争で計画通りに事が運ばない可能性がある以上、今すぐにでも破壊してしまうべきだろう」

「待つて会長！ 腕輪の破壊なんて一体誰がやるの!?」

「もちろん、実行犯には私がなる。バレなければ良いが、最悪私一人の退学（クビ）でどうにかなる」

「いや待て神条、いくら何でもそれはーー！」

「安心しろ、あくまで最後の手段だ。決勝戦に小波ペアと吉井ペアが勝ち進めばいい。またはそのどちらかと生徒会の誰かが勝ち進む事だ。そうなつたら我々はわざと負ければいいんだからな」

淡々と話を進める神条。

「とにかく、決勝のカードが今言つた以外の組み合わせになつたら、腕輪の破壊に動く。学園の存続と私一人の首、天秤にかけるまでもない。以上を以て会議は終わりだ。悟志、喫茶店に戻るといい」

「おい待て！」

俺の制止の声も聞かず神条はCクラスに入つていった。

「おいおい…。アソシ本気で言つてるのか？」

「でしようね。前々から他人の為に自分を犠牲にする所があるから…」

「だからつて…」

「ありえないだろ、こんなの…。」

「サトシ、こうなつたらやるしかあれへん。会長がそんな愚行に走ら

なくともええように頑張るしかないで
「カズの言う通りね。流石の私も今回に関しては会長を止めるわ」

大江…浜野…。

「…そうだな」

考えた所で仕方ない。

この件が片付いたら今度は俺が神条に説教してやる。

打開策

明久視点

「…………大丈夫か、明久」

「な、なんとか咲はこえたよ…。もう大丈夫」

場所は厨房。隣で一緒に団子を作っているムツツリーニが時々気にかけてくれる。瑞希ちゃんの淹れたお茶を飲んで倒れた僕はすぐに復活し、作業に励んでいる。

いい加減耐性でも付いたのかな?

「…………召喚大会の方は順調か?」

「うん。一回戦に比べると二回戦は楽に戦えたからね。順調だよ」

「…………そうか。そんな明久に朗報だ」

「ん? なにかな?」

ムツツリーニが僕に朗報とは。勿体振らずに早く教えて欲しい。

「…………木下優子と工藤愛子も大会に参加している」

「…………え? あの二人も参加してるの?」

「…………（コクツ）」

ここにきて思わず強敵が現れたか…。特に優子さんは前の一騎討ちで負けてるから当たればリベンジのチャンスだ。愛子ちゃんとも戦つてみたいしね。

「あれ? となると霧島さんは誰と?」

「…………霧島翔子はエントリーしていない」

「なんで? やる気充分だつたじゃん」

「…………ペアを組みたかった雄二が明久と組んでしまったからだ」

「…なんか、悪いことしちゃつたかな」

そういうえば雄二と出るみたいな事言つてたつけ？ こちらの事情でそれが叶わなくなつたということか…。

「近いウチに埋め合わせしないとね」

「…………それがいい」

そんなこんなで胡麻団子は完成した。うん、我ながら良い出来だね。

「あれ？ 誰もいない」

喫茶店に入ると、客が一人もいなかつた。さつきまで結構いたのに
…。

「雄二？ 客がいないんだけど？」

「明久か、俺もよくわからん。急に客足が途絶えてな。今その原因を探つてている」

「明久お兄ちゃん！」

後ろから可愛い声が近づいてくる。そして声の主は後ろから抱きついてきた。

「茜ちゃん」

声の主は茜ちんだつた。振り向くとそこにはなんとチャイナ服を着た彼女の姿が。

「似合つてるじゃないか。その服どーしたの？」

「はい、茜と葉月ちゃんも店を手伝うつて言つたら康太お兄ちゃんが茜達の服を作つてくれたです」

「ムツツリーニ…。君はよく働いてるよーー」

厨房から一緒にいた筈のムツツリーニがいない。どこに行つた？

「ああ、ムツツリーニなら情報収集にいつたぞ。さつき言つた、客足が途絶えた原因を探しにな」

僕の疑問を察した雄二が答える。ムツツリーニ：君は仕事をし過ぎ。過労死だけはしないでね？

「さーて、客がいないならいないで仕方がない。明久も休めるときには休んどけよ」

「うん」

そう返事をしてさつき休憩ように買ったジュースの缶を手に取る。

「そういうえば一輝と辻井君がいないね」

見渡すと客のいない店内で休んでいる中に一人の姿が見当たらぬ。そこにひょこつと現れたチャイナ服姿の室町さんが答える。

「辻井ちゃんは知らないけど、小波ちゃんは大会参加者の情報を集めるためにあちこち回つてゐただよ？」

「情報?」

「俺が許可したんだ。今回の召喚大会はいろいろと不確定の要素が多いからな。トーナメント表すら無いから、いつ誰と当たるかも、どの教科で戦うかもわからないんだ。せめて誰が勝ち残っているのかを知つてた方がいいだろう?」

雄二の言いたいことはなんとなくわかつた。雄二も一輝と同じ考えだからこそ許可を出したんだろうし。

「…さて、もうすぐ三回戦なんだが、その前に明久にやつてほしいことがある」

「やつてほしいこと?」

なんだろう。そう思つていると雄二が右手に持つてゐるそれを僕の目の前に突きつける。これは

「…チャイナ服だよね?」

「そうだ。チャイナ服だ」

「…あのさ、意図が読めないんだけど?」

説明をお願い。

「召喚大会二回戦が終わつた後くらいからだな。少しづつ客が減つてきている」

確かに。一時期満員だった喫茶店が数えるくらいしかいない。

「昼になつたら一輝と辻井にもう一度チラシを配りに行かせる。だがそれだけじゃ足りない。だから…」

「だから?」

なんだろう…、嫌な予感がする。

「お前もコイツ（チャイナ服）を着て 「いやああああつ！」

最後まで聞く前に悲鳴をあげる僕。嫌な予感が現実になつたじやないかっ！ 前に一度セーラー服を着せられたけどあんな思いは二度と御免だ！

此処から逃げる為、出入口へ走ろうとするも

「なつ!?」

遅かつた。喫茶店から出ないように須川君含む数人が扉の前に立ち塞がつている。ならば

「念のために窓は全部鍵をかけたからな？」

雄二め…。僕にチャイナ服を着せるために色々と準備してたんだね。何もかもがキサマの掌の上だつたというのか？

「三回戦から召喚大会は一般公開される。お前にはこれを着た姿で観客に挨拶して欲しい」

「大勢の前で恥をかけと!? 出来るわけがないよ！」

悔しさのあまり拳をフルフルと握りしめていると両肩に感触が。

「ふふふ。大丈夫ですよ、明久君」

「アキ、安心しなさい」

瑞希ちゃんと美波が僕の肩に手を置いていたのだ。そしてニッコ

り笑顔で

「絶対に似合つて（います・る）から」

「誰か助けて！　このままだと僕の黒歴史に新たな一ページが刻まれちゃう！」

ちくしょー！　二人とも、逃げられないよう僕の腕をしつかりホールドしている！

「秀吉、助けて！」

「明久よ。ワシと一緒に落ちようぞ」

駄目だ、今回秀吉は味方じゃない！　ならば石川さんに

「さあ、面白そうだからあたしも混ざるね♪」
「石川さんあんつ！」

なんで？　僕なんかの女装を見たところで面白くなんかないじゃないか！

「さ、チビッ子二人はしばらく廊下に出ていような」

「はあーい」

嬉々として教室を出ていく小学生二人。もしかして君達もグルなのか！？　お願ひだ、僕も連れていくてくれ！

「南雲さん！　室町さん！　君達は味方だよね？　助けてくれるよね！？」

君達が最後の希望だ！

「…一輝の友人である貴方を助けたい気持ちはあります。けどーー」

「私は君の敵じゃないよ。でもねーー」

そして申し訳なさそうな顔で

「私たちではどうすることも出来ません。本当に（すみません）ごめんなさい」

「…………」

嫌だな、泣いてないよ。

「アキ…」

「明久君…」

「ちよーつとくすぐつたいからね♪」

「いやあああああああああっ！」

両隣で笑顔を絶やさない瑞希ちゃんと美波、チャイナ服を手ににじり寄つてくる石川さんから逃れられる事が出来ず、客のいない喫茶店にはしばらくの間僕の叫びが響き渡つた。

『わあ…………惨いね、あれ』

『この光景は一輝には見せられませんね…』

連中に服を脱がされる僕から離れた場所で、女子二人は申し訳なさそうに無関係を貫くのだった。

素直※

明久視点

「はあ…まさか三回戦の相手が貴方達になるなんてね」

「ははは。そういうわけだから勝ちは貰つたよ、小山さん?」

「まだよ! 相方の黒崎があなた達二人を倒せば私達の勝ち!」

「それはそんなんだけどさ。黒崎君…だつけ? 彼もう虫の息なんだ
けど。ほら」

僕の指差す方には、雄二の召喚獣によつてフィールドの端へ追い詰められ、さらに点数もあと僅かとなつた黒崎君の召喚獣がいた。

「くそつ」

そんな状況でも諦めず召喚獣に武器を構えさせる黒崎君。見上げた根性だ。

僕達の三回戦の相手はまさかのCクラス代表の小山さんと同じCクラスの黒崎君、前のCクラス戦以来の対戦だ。とは言つても僕も雄二も二人と戦つたことはないけどね。

ちなみに小山さんは既に僕が戦死させた。あとは黒崎君だけなんだけど雄二が一対一(タイマン)を望んだ為、邪魔にならない場所で小山さんと雑談している。

「それで吉井君? なんで貴方はまた女装しているのよ? しかも今度はチャイナ」

「…Fクラスだから仕方がないんだ…!」

悔し涙を流しながらも答える。クラスの皆が僕を捕らえて無理矢理…。しかも今回は秀吉まで敵に回るとは…………解せぬ!

「…可哀想にね。今後もそういう事をされそうになつたらCクラスに逃げていわよ？ 置つてあげるわ」

「うう…ありがとう、小山さん」

君はなんていい人なんだ…！

「ぐあつ」

そして今、雄二の召喚獣が黒崎君の召喚獣にトドメを刺した。

【現代社会】

Fクラス 坂本雄二 184点

V S

Cクラス 黒崎トオル D E A D

『勝者Fクラス吉井、坂本ペア！ 素晴らしい戦いでした。いや～正直な話私としては自分のクラスの代表に勝つてほしかつたので少し悔しいところです。皆さん、四回戦に進んだFクラスペアに大きな拍手を！』

司会を務める女子生徒はCクラスの新野 すみれ(にいの)さん。若干身内顛願なところはあつたけど最後に観客の拍手で締めてくれた。

「ふう…なんとか勝てたぜ」

「お疲れ様、雄二」

戦いを終えてこつちに来る相棒に労いの言葉をかける。

「吉井君、坂本君。こうなつたらなにがなんでも優勝してよね。影ながら応援するわ」

「もちろんだよ。そしてありがとうございます、頑張るよ」

小山さん達と別れて喫茶店に戻った。

美波視点

召喚大会三回戦。ウチは今、最悪な状況に陥っている。科目が現代社会というのもあるけどそれよりもっとヤバいことが…

〔現代社会〕

Fクラス	姫路瑞希	344点
Fクラス	島田美波	17点
V S		
Dクラス	清水美春	96点
Dクラス	玉野美紀	83点

「なんでアンタが参加してるのよおおおおおっ!!」

「お姉様が行くところなら、美春はどこにでもいますわ！」

「うるさいこのストーカー！」

「愛のストーカーですわ」

対戦相手の清水美春は去年からの知り合い。ウチの事を結婚したい意味で愛しているかなり危険な娘。

ここ最近距離を置いていたせいか鼻息荒く暴走気味な彼女を見て鳥肌が止まらない。

「み、美波ちゃん。私は玉野さんの相手をしますから清水さんの相手はお願ひしますね？」

「ちょっと瑞希!? 友達を即売り飛ばすってアンタどういう神経してるのよ!」

非常な行動を取るクラスメートを批難する中、瑞希はウチにしか聞こえない声でボソッと

（大丈夫です。素早く玉野さんを倒してそちらに加勢しますから、美波ちゃんはなんとかして粘つてください）

（瑞希…。わかつたわ）

話し合いを終え、瑞希は玉野さんの召喚獣に突っ込んでいく。玉野さんは遠距離から弓を放ってくるため、なかなか近づけないでいる。頑張れ瑞希…！ そしてウチは…：

「さあお姉様。大人しく美春に敗れて保健室へ参りましょう」

前にも同じような事があつた気がする。負けたら保健室に連れていかれる。そうなつたら…：

「お断りよつ！」

サーベルを片手に美春の召喚獣に斬りかかる。向こうはサーベルよりも丈夫な片手剣。簡単に受け止められる。だからといってそれで負けるわけじやない。例え点数が一点でも攻撃を避け続ければ負けないわ。

「お姉様。随分と操作が上手になりましたね」

「ふつふくん、だてに試召戦争を重ねた訳じやないわ」

戦果を挙げられたかどうかは別として、これが今のウチの実力よ？
というように鼻で笑う。

「なぜですかお姉様！ 大人しく負けてくだされば美春が新しい世界
に連れていくて差し上げるというのにっ！」

「余計なお世話よ！ ウチには心に決めた人がいるつて去年話したで
しょ！」

「ぐぬぬ……やはりお姉様は吉井明久が良いのですか!? あの男のど
こがいいのです!? 複数の女と関係を持つ女の敵のどこがーー」
「アキの事を悪く言わないで！ とにかくウチはもう決めたのよ！
後悔しないために自分の気持ちに素直になるつて！ だからーー」

ズバアアンツ

ウチの邪魔はしないで、と言おうとした瞬間、美春の召喚獣の上半
身と下半身が分断された。

瑞希の召喚獣によつて。

『勝者、姫路＆島田ペア』

客席からの歓声が体育館に響く。ウチは隣に立つ瑞希に問いかけ
る。

「玉野さんに勝つの早くない?
「間に合つて良かつたです」

そう…ありがとね、とだけ言つてウチは美春に近づく。玉野さんだ

けでなく美春も負けたショックからか、座りこんでいる。

「美春。アンタが男嫌いなのは知ってるわ。でも、だからといって男が全員美春が思つてるような連中とは限らないでしょ？」

「お姉様…」

「だから美春。アキがどういう人なのか、美春自身の目でしつかり確認しなさい」

「……はい」

ステージを去つていく美春の背中を見ながら願う。どうか美春の過剰なまでの同性愛が少しでもマシになりますように…と。しかしウチは後々に後悔することになる。親切心で言つた美春へのこの言動がとんでもない事態を招く事を。

「それについても美波ちゃんは凄いですね」

「き、急にどーしたのよ瑞希」

「だつて周りに人が大勢いる中で好きな人がいる宣言したんですよ？」

「……へ？」

「観客のほとんどがニヤニヤしてましたよ？ 明久君は既に会場を去つたから聞いてないと思いますけど」「……」

「召喚大会の映像は清涼祭終了後に映研（映画研究部）の皆さんのが編集して欲しい人に売るそうですよ。

…さつきの映像と声、残るといいですね？」

…そうだったわ。三回戦からは一般客も見ている。とはいっても

満員というわけじゃない。それでもステージの上であんな事を…。

想像したら

ばたんつ

恥すかしさと動揺で気がついたらウチは気を失っていた。

そして書つた
目が覚めたらすぐに映画研究部に行こう
映像を

第三者視点

誰もいない通路で清水美春は呟く。

「知っていますわ…」

「あの男が悪い人じやないなんて…」

知つてゐるに決まつてゐるじゃないですか……」